綠蔭叢書第四編

小說集

微風

著 村藤崎島

藤村著

微風

緑蔭叢書

緑蔭叢書は藤村の著作を刊行するものにて、一年一冊もしくは二年一冊、成るに隨ひ篇を重ぬるの豫定なり。されば世にある多くの叢書に比べて、多少其性質を異にするもの。紙數の如き毎篇必ずしも一定し難しといへども、版本の素質はすべて讀者のために親切ならむことを旨とす。

綠蔭叢書

第一編

『破戒』（明治三九）

小說、鏑木清方氏挿畫、紙數五百七十八頁、全壹册讀切、定價八十錢

第二編

『春』（明治四一）

小說、和田英作氏挿畫、紙數五百八十三頁、全壹册讀切、定價九十錢

第三編

『家』（明治四四）

小說、上下二卷、有島壬生馬氏挿畫、總紙數八百九十八頁、定價各七十五錢、

第四編

『微風』（大正、二）

小說集、平福百穗氏挿畫、紙數四百六十二頁、全一册、定價七拾五錢（小包料市內四錢、市外八錢）

微風

島崎藤村著

發行所　東京麻布區龍土町百番地
出版者　平田禄三郎
陰叢書第四編

微風

島崎藤村著

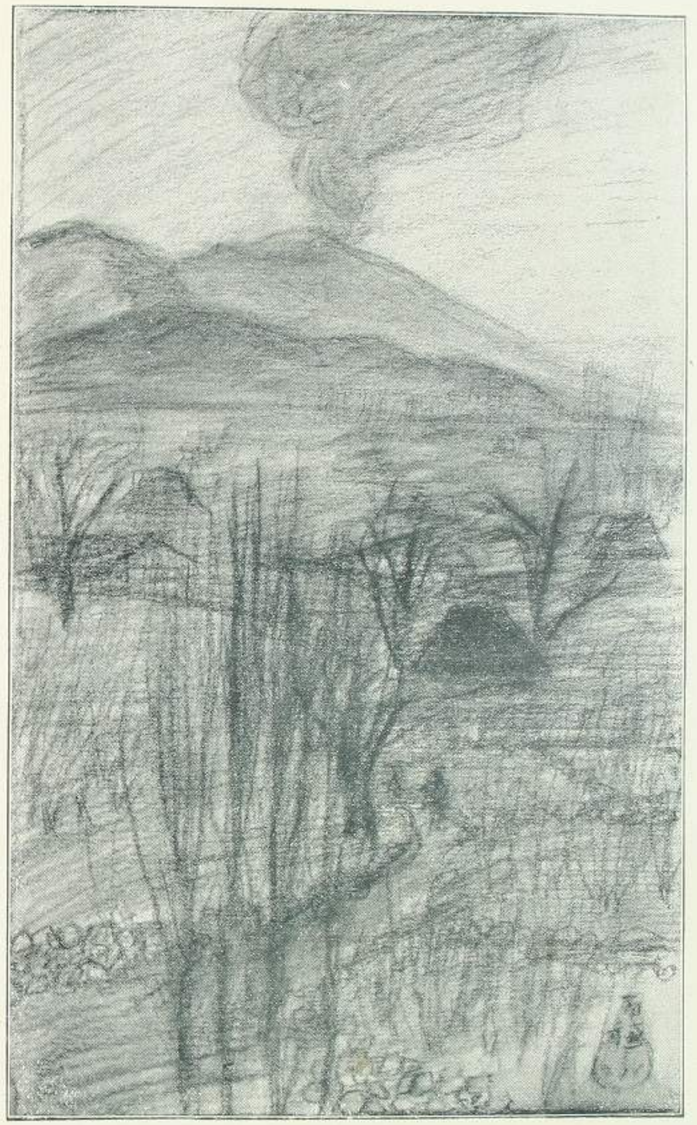
綠蔭叢書第四編

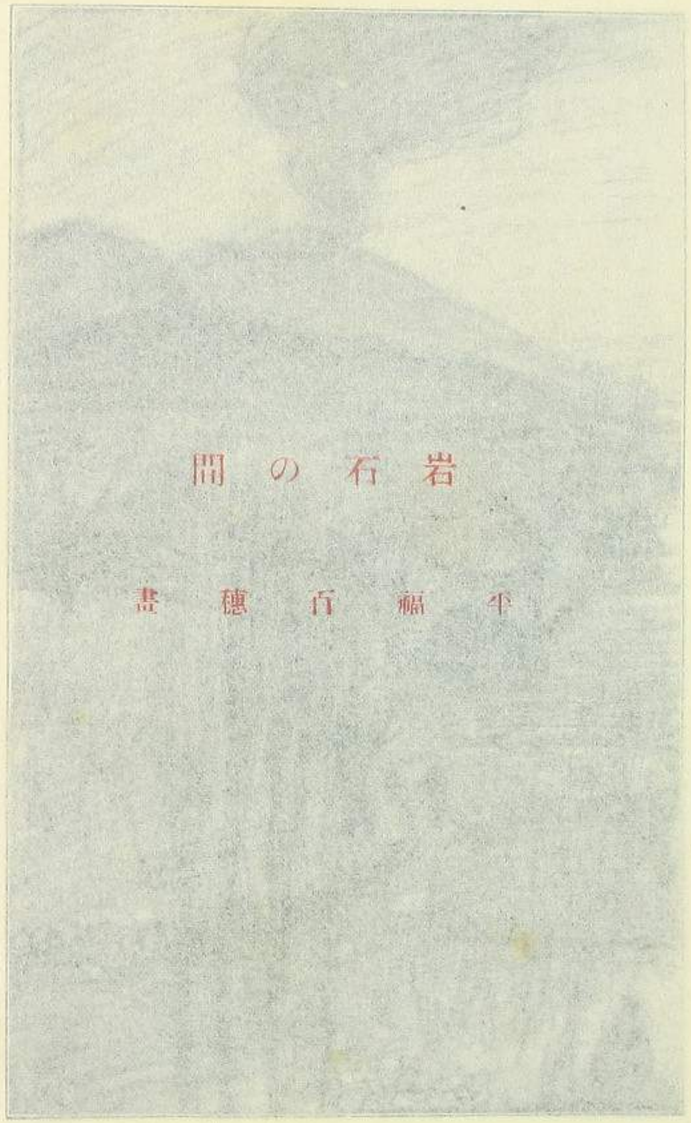
發出
平福百穗畫

微風

目次

出發……一
足袋……二
岩石の間……三
突貫……五七
死の床……一八五





微風

目次

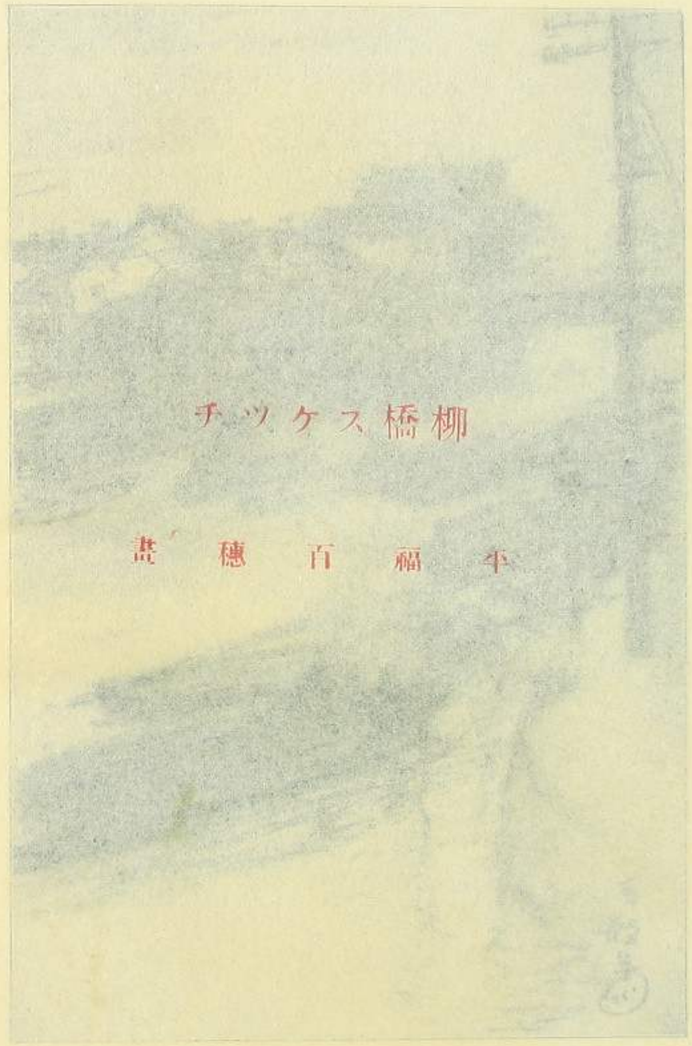
出發……二
足袋……六三
岩石の間……六九
突貫……一五七
死の床……一八五

燈火……一九九
犬……二二三
沈默……二三七
無言の人……二八三
柳橋スケッチ
一日光……三〇〇
二柳並木……三一三
三柳橋……三一九
四神田川の岸……三三八

五海岸……三三〇
幼き日……三四一

出

發



出發

微風

時計屋へ直しに遣つてあつた八角形の柱時計が復た部屋の柱の上に掛つて、元のやうに音がし出した。その柱だけにも六年も掛つて居る時計だ。三年前に叔母さんが産後の出血で急に亡くなつたのも、その時計の下だ。

姉のお節は外出した時で、妹のお榮は箒を手にしながら散亂つた部屋の内を掃いて居た。斯の姉妹が世話する叔父さんの子供は二人とも男の兒で、年少の方は文ちやんと言つて、六歳の惡戯盛りであつた。文ちやんが屋外からお友達でも連

出發

れて來ると、何時でも斯の通り部屋を散亂して了ふ。お榮は佛壇のある袋戸棚の下あたりを掃いて居ると、そこへ叔父さんが二階から下りて來た。

『子供は奈何したい。』

と叔父さんが聞いた。叔父さんは晝寢から覺めたばかりの疲れた顏付で居た。

『表へ遊びに行きました。』とお榮は物靜かな調子で答へた。

『節は？』と復た叔父さんが聞いた。

『姉さんはお墓參り。』

『斯樣な暑い日によくそれでも出掛けて行つたなあ。』と言つて、叔父さんは半ば獨語のやうに、『お墓參りには叔父さんもしばらく行かないナ……』終に叔父さんは溜息を吐いた。部屋には片隅にある簞笥から其上に載せた箱の類まで、叔母さんが生きて居た時分とちつとも違はずに置いてある。唯、壁を黃色く塗り變へた

ので部屋の内がいくらか明るくなつたのと、縁先の狹い庭の一部を板の間にして子供の遊ぶ場所に造つたのと、違つたと言へばそれ位のものだ。叔母さんの眼を樂ませた庭の八手は幾本かあつた木が子供に酷い目に逢はされて、枯れて了つた。中で一本だけ威勢の好いのがズン〳〵生長して、その年も幹のうらのところに新しい若葉を著けて居る。叔父さんは縁先に出て、その葉の青い光を見て、復たお榮の方へ引返して來た。

『へえ、時計が出來て來たネ。』

と言ひながら叔父さんはしばらく柱の下に立つて、親しいもの丶面を仰ぐやうに、磨き直されて來た時計を見て居た。ネヂを掛ける二つの穴の周圍から羅馬數字を畫いたあたりへかけて、手摺れたり剝げ落ちたりした痕が著いて、最早お婆さんのやうな顏の時計であつた。でもまだ斯うして音はして居る。硝子の蓋を通して

見える眞鍮色の振子は相變らず靜かに時を刻んで居る。

『隨分長くある時計だよ——叔母さんと一緒に初めて家を持つた時分から、あるんだからネ——阿部の老爺さん(叔母さんの父親)がわざ〳〵買つて提げて來て呉れた時計なんだからネ——』

斯うお榮に話し聞かせて、やがて叔父さんは流許で癖のやうに手や足を洗つて、復た二階へ上つて行つた。姉の結婚は次第に近づいて來て居た。お榮はそんなことを胸に浮べながら獨りで部屋を片附け、それから勝手の方へ行つて笊の中に入れてあつた馬鈴薯の皮を剝き始めた。

晝頃に姉のお節は細い柄の洋傘と黃色な薔薇の花束を手にして歸つて來た。何時でもお節が墓參りに行くと、寺の近所の植木屋で何かしら西洋の草花を見つけて、それを買つては戻つて來た。

『榮ちやん、斯ういふ好いもの。』

とお節は妹の鼻の先へ土産の薔薇を持つて行つて見せた。

お節が子供に隱れて外出したのを不平で居た文ちやんは、それと見て表口から入つて來た。そしていきなりお節に抱きついた。長ちやん――兄の方の子供も學校から歸つて來た時で、鞄をそこへ投出すが早いか、弟と同じやうにお節の手を引いたり、肩へつかまつたりした。

『まあ左樣二人で取附かないで頂戴よ……姉さんを休ませて頂戴よ……暑くつて仕樣が無いんだから…』

さう言はれると、餘計に母親の無い子供等は甘えた。

『榮ちやん、榮ちやん――電車の中でそれは好い人を見てよ。髮の恰好と言ひ、身體の容子と言ひ――』

お節の若々しい快活な笑聲と、子供等の騷ぎとで、ヒツソリとした家の中は急に賑かに成つた。お榮は姉から薔薇の花を受取つて、半分は勝手の棚の上に置き、半分は小さな大理石の花瓶に入れて叔母さんの位牌の側へ持つて行つた。

日に幾度となく叔父さんは子供のことを心配して、二階から見廻りに下りて來た。叔父さんは佛壇のところへ首を突込んで、別にそれを拜むでもなく、唯金箔の剝げかゝつて來た位牌や、薄く塵埃の溜つた過去帳などを眺めて、悄然として居た。

『どうだネ、お墓は綺麗に成つて居たかネ。』と叔父さんは佛壇に倚凭りながら、お節に尋ねた。

『えゝ、すつかり掃除がしてありましたよ。』とお節が答へた。

『お墓も古くなつたらうネ。でも節は感心にお參りするよ。これで遠方へでも行

くやうに成ると、またしばらくお參りも出來ないからネ。』

お節は默つたまゝ立つて居た。

『三年經てばヒドイものぢやないか。』と叔父さんは寂しさうに笑つて、『叔母さんのことも餘程忘れて來た——正直な話が、左樣だ——』

お節は思出したやうに、『私がこの家へ歸つて來たのは丁度去年の今日でしたよ。』

『さうだつけかなあ。』

『私はお母さんの側には半歲しか居ません。ホラ、叔父さんのとこから電報を寄して下すつたでせう。あの時はお母さんは私を離したくないやうな風でしたけれど……』

『なにしろ彼樣な田舍にクスブつて居たんぢや仕樣がないからと思つて、叔父さんが東京へ出られるやうにして遣つたんサ。愚圖々々して居る時ぢやない、うつかりすると榮ちやんまでお嫁に行き損なつて了ふ。左樣思つたから、ドシンと一つ電報で驚かして呉れた。お前がずつと田舍に居て御覽、今度のやうなお嫁さんの話は聞かなかつたかも知れないせ——女の一生といふものは、考へて見ると妙なものサネ。』

叔父さんは佛壇の側を離れて、箪笥の置いてある方へ行つた。一番上の引出から叔母さんの遺して行つた著物を取出して見た。

『どれ、お形見を一つ呉れようか。』と叔父さんが言つた。『叔母さんの著物も皆なに遣るうちに、段々少くなつちやつた。』

『榮ちやん、被入つしやいつて。』とお節は妹を呼んだ。

其時叔父さんは叔母さんの長襦袢だの襦袢だの其他こまゞゝした物を姉妹に分

けて呉れた。

『それはさうと、御祝言の時の著物は奈何するか。』と叔父さんが言出した。『四月の末に來るといふお婿さんが一月延びることに成つた。綿入の紋附を袷に直して、またそれでも間に合はないなんて、大變な話だぞ。弱つたナ、こりや。』

『根岸の伯母さんにも相談して見ませう。多分間に合ひませう。』とお節が言つた。

『でも五月の末となりや暑いんですよ……大抵單衣物よ。』とお榮が言葉を挿んだ。

『待てよ。五月の末だなあ。俺は大丈夫と見た。もし暑かつたら成るべく曇つたやうな日を見立てゝ結婚するんだネ。晴天日延とやるか。』

斯の叔父さんの串談は姉妹の娘を笑はせた。

勝手の方からは涼しい風が通つて來た。お榮は古い簾の外に出て、鉢植にしたシネラリヤの可愛らしい花を眺めたり、葉を撫でたりして居た。その草花もお節が根岸の伯母さんの家へ行つた序に買つて來たものであつた。お節は長ちやんを膝の上に抱きながら、勝手の板の間に出掛けた。叔母さんのお墓へ行く途中で行き逢つた知らない顔……電車の窓から見た種々な若い人の後姿……急いで熱い往來を過ぎ行く影……あれか、これかと思ひ比べて來た人のことが激しい日光の感じに混つて、お節の眼を眩むやうにさせた。今にもそこへ身を投出したいやうな、荒い、しかも娘らしい願ひが彼女の胸に湧き上つて來た。お節は自分の胸の鼓動がしつかりと抱いて居る子供の身體にまで傳はつて行くことを感じた。

『長ちやん、好いものを嗅がして進げませうか。』

とお榮は流許へ來て、棚の上にある黄色い薔薇の花を一寸自分で嗅いで見て、それから子供の鼻の先へ持つて行つた。

『あゝ、好い香氣だ。』と長ちやんは眼を細くした。

『生意氣ねえ。』とお節は笑つて、抱いて居る子供の身體を動するやうにした。

『長ちやんだつて、好いものは好いわねえ。』とお榮も笑つた。

『さう言へば、奈何な兄さんが被入つしやるでせうねえ。』と復たお榮が言つた。

妹は血肥りのした娘らしい手で自分の乳房の邊を著物の上から押へて、遠くから海を越してやつて來るといふお婿さんのことを姉と一緒に想像した。

三年も獨りで考へて居る二階から、復た叔父さんが下りて來た。叔父さんは流許へ行つて、水道の口から迸るやうに出て來る冷い水を金盥に受けて、それで顏を洗つた。

叔父さんは手拭で顏を拭き〳〵勝手に近く居る姉妹の娘に向つて、

『あゝ、あゝ、これでいくらか清々した……今日は阿部の老爺さんに手紙を書いて、斯う自分の身の周圍のことを報告しようと思つてサ……お園さん（亡くなつた甥の妻）もいよ〳〵東京へ嫁いて來たし、節も近いうちにはお嫁さんに成るし、皆な動いて來た……その中で自分ばかりは相變らず……なんて、そんなことを書いてるうちに、涙が出て來て困つた……』

斯う言ひかけて、叔父さんは胸を突出しながら獨りで荒い溜息を吐いた。言葉を繼いで、

『でも、俺は未だ泣ける——さう思つたら嬉しかつた……餘計に涙が出て來た……今日は頰邊が紅くなるほど泣いちやつた。』

『眞實に。』

とお節は叔父さんの顔を覗き込むやうにした。叔父さんは笑ひながら物を言つて居たが、その頰はめづらしく泣腫れて居た。

狹い町の中で、風通しの好いやうに表の戸を開けひろげると、日に反射する熱い往來の土が簾越しに見える。勝手に近い處へ膳を据ゑて、そこで叔父さんは晝飯をやつた。

『あれも仕なけりや成らない、これも仕なけりや成らない……仕なけりや成らないことは、ちやんともう解つてますけれど……氣ばかり急いちやつて、身體が動かないんですもの……』

給仕しながらお節は笑つた。

叔父さんの側へは文ちやんが來て立つた。叔父さんはその頑是ない容子を見て、

『ほんとに文ちやんも大きく成つたネ。』

『あんなに著物が短くなつちまひました。』と勝手に居たお榮も子供の方を見て居つた。

『姉さん達には餘程御禮を言はなけりやならないネ。』と叔父さんは自分の子供に言つた。

何を思ひ附いたか、急に文ちやんはお節の方へ行つて、身體をこすりつけるやうにした。

『また悪圖り始める。誰も笑つたんぢやないの。あんたが大きくなつたつて、皆な褒めるんぢや有りませんか。』

とお節は子供を膝の上に載せた。

『節の子供の時分に、叔父さんは一度お前の家へ訪ねて行つたが、覺えて居るかネ。』

『覺えて居ますとも。』

『幾歳だつたらう。今の長ちやん位のものぢやないか。』

『長ちやんよりはすこし大きかつたでせう。』

『なにしろお前のところの老爺さんが未だ達者で居た時分だ……あの薄い髯を撫で丶居た時分だ……何か好きな物を御馳走しよう、御風呂を焚いたから俺に入れなんて、老爺さんが云つて呉れた時分だ……あの頃にお前は未だ髮の毛などを垂げて居たよ、その人が最早お嫁さんに行くんだからねえ。』

多くの人から尊敬された老爺さんの話が出る度に、お節は自分の學校友達などの知らないやうな誇りを感じた。

身内のもの丶話がそれからそれへと引出されて行つた。お節姉妹は叔父さんの側でお父さんのことやお母さんのことや、それから年を取つた老婆さん、叔父さんの子供と幾つも違はない末の弟の噂などをしきりとした。

『しかし、お前達はまだ可い。』と叔父さんが言つた。『叔父さんを御覽な。叔父さんは十三の年にお父さんに別れて了つたよ。お母さんとしみ〴〵暮して見たのも僅か二年位のものだ。その二年の間も二人で苦勞ばかりして……それを思ふと、お前達は仕合せだ……なにしろ兩親がピン〳〵して居るんだからネ……』

『ほんとに、よく遲れる時計ね——榮ちやん、お肴屋さんへ行つて聞いて來て下さいな。』

と姉に言はれて、妹は家の向ひ側にある肴屋へ尋ねに行つた。

店頭に刺身を造つて居た肴屋の亭主から正しい時間を聞いて來た後、お榮は年

を取つた時計の下に立つて長針を直さうとして居た。呉服屋の番頭が入つて來た。それを聞いた叔父さんも下座敷へ來て、チョイ〳〵外出に著て行かれるやうな女物を見せて貰つた。番頭は絲織の反物、欝金の布に卷いた帶地などを皆なの前に取出した。

『節、どれが好い？』

『どれでも……』

叔父さんは自分の氣に入つたやうな地味な反物ばかり出した。お榮も姉の側に居て、あれかそれかと一緒に評定した。

番頭は羽織の裏地になるやうな物までそこへ取出した。

『節にはこれが好からう。』

と叔父さんが混返すやうな調子で言つて、皆の前で擇つたのは變な紅い色の裏地

だ。番頭まで笑つた。斯の叔父さんの串談に、お節は胸が一ぱいに成つて獨りで次の部屋の方へ逃出して了つた。

『姉さん、自分で擇つたら可いぢやないの――そんなとこに居ないで。』

とお榮は姉を慰めた。

お節は機嫌を直して、手持無沙汰で居る叔父さんや番頭の方へ引返した。其時お節は白茶色に模樣のある裏地を取つた。それには妹も賛成した。

番頭が歸つた後で、叔父さんは買取つた物をお節の前に押しすゝめて、

『何物も叔父さんから祝つて遣る物が無い。これをお前に祝ふとしよう。いろいろ子供も御世話に成りました。』

と言つて輕く御辭儀をした。

根岸の伯母さんもお節のことを心配して訪ねて來て呉れた。綿密な伯母さんは

祝言の時の薄い色の紋附から白の重ね、長襦袢まで揃へて丁寧に縫つて呉れた。

『何か私共でも節ちやんに祝つて進げたいが……要りさうな物を左樣言つて下さいな……紋附の羽織にでもしませうか、それともこれからのことですから單衣のやうな物が可いか。』

斯樣な話をして居るところへ叔父さんも一緒になつて、いろ〳〵打合せの相談が始まる。根岸の姉さんが結婚した時の話なども混つて出て來る。伯母さんの正直な打明け話は叔父さんを笑はせた。

『一體、お嫁に行く前の娘といふものは半分病人のやうなものですネ。』と叔父さんが言出した。

根岸の伯母さんは點頭いて、『皆な左樣ですよ。妙なもので、お嫁に行けば大抵の人は强壯になりますよ。』

斯の伯母さんの調子には幾多の經驗があるらしく聞えた。

斯ういふ時に亡くなつた叔母さんでも居たら、とは叔父さんの言ひ草ばかりでなく、お節はそれを自分の身に切に感じた。母親の無い子供等は奈樣な場合でもそんなことに頓著なしに、『節さん、節さん。』

と言つては纏ひついた。殊に年少の方の文ちやんと來たら、聞分の無い年頃で、一度愚圖々々言出さうものなら容易に泣止まない。

根岸の伯母さんが居なくなると、復たその子供の破れるやうな聲が起つた。お榮がやさしく慰撫めた位では聞入れなかつた。終にはお榮は堅く袖に取縋らうとする文ちやんの手を拂つて、あちこちの部屋の内を逃げて歩いた。

『著物が切れちまうぢや有りませんか。』

お榮は庭の八手のある方へ隱れて、袖を顏に押當てゝ泣いた。

斯の光景を見兼ねて、お節は縫ひかけた自分の著物もそこ〳〵に起上つた。今度は文ちやんはお節の方へ向つて來た。顏を眞紅にして、怒つたやうな首筋まで顯して。斯の兒の利かないにはお節もホト〳〵弱り果てた。

『どうして左樣あんたは聞分が無いの？』

お節は子供を抱締めて、これも一緒に成つて泣いた。

急に叔父さんは二階から馳け下りて來た。叔父さんの顏色を見ると、お節は子供を袖で隱すやうにして、

『もう泣きませんから、何卒御覽なすつて下さい。』

と子供に代つて詫びた。

文ちやんが餘計にお節を慕つたのは、可恐い思をした時とか、さもなければ酷く叔父さんから叱られた時だ。『もうおねむに成つたんでせう、それで其樣に愚圖愚圖言ふんでせう。』そこへお節は氣が著いて自分の膝を枕にさせて居るうちに、子供は泣じやくりを吐きながら次第に眼を閉りかけた。

『さ温順しくお晝寢なさい。姉さんが一緒にねんねして進げますからネ。』

お榮は氣を利かして簞笥の側へ子供の寢床を敷いた。そこへお節は文ちやんを抱いて行つた。斯の神經の強い子供は姉さんに抱かれなければ寢附かなかつた。そして半分眠つて居ながら、母親でも探すやうにお節の懷を探した。

『まあ斯樣な冷い足をしてるの？』

とお節は言つて、子供の頭を撫でゝ遣ると、まだ文ちやんは時々泣じやくりを吐いた。お節が自分の肌に押當てゝ小さな足を温めてやつた時の子供の寢顏は、すこし前まで地團太踏んで怒つたり戸を蹴つたりして激しく泣いた文ちやんと思はれないほどの愛らしさが有つた。好い具合に眠つた子供の容子を眺めて、やがてお

節はソッと文ちやんの側を離れた。眼を覺ましないやうに。

日に〳〵庭の八手は大きく葉を開いて行つた。それが透けて見える深い軒先に近く叔母さんの形見の裁物板も取出してあつた。復たお節は自分の縫板に取掛つたお榮も側へ來て、姉妹一緒に暮せる日數の段々少くなつた話などをした。

めつきり蒸暑い晩もあつた。鳥が啼いたかと聞き違へるやうな調子の高い物賣の笛に驚かされて、お節は文ちやんの側に眼が覺めることが有つた。惱ましい夢心地で聞いた物音は支那蕎麥を賣りに來たのだと氣が著いて見ると、夜の更けたことが知れた。二人の子供等は人形を並べたやうに正體もなくなつて居る。お榮もまだ寢衣も著更へずに疲れて横に成つて居る。蒸される髮の臭氣もする。部屋

の内の空氣は何となく沈鬱だ。

五月はじめの晩らしい、町の白壁と暗い青葉とに薄く映した月の光がお節の眼に浮んで來た。その忘れ難い晩には、いよ〳〵お婿さんが出掛けて來るといふ手紙の著いたことを思出した。彼女の一生が眞實に其一晩で定つたことを思出した。

その晩は姉妹二人して眠らなかつたことを思出した。子供と添寢をしながら、お節はそんなことを考へて、復たウト〳〵して居た。ふと、そんなところへ來る筈の無い老祖母さんの顏が彼女の眼前に顯れた。

『榮ちやん……榮ちやん……』

お節は絶え入りでもしさうな苦しい息づかひをして、妹を呼んだ。お榮が眼を覺まして跳起きて見ると、姉は床の上に突伏して、身體を震はせて居た。

『叔父さん、一寸被入つて下さいませんか。姉さんが奈樣かしましたから。』

とお榮は樓梯の下のところへ行つて聲を掛けた。

叔父さんも下りて來た。お榮は姉の背中を撫りながら、叔父さんに向つて、『なんでも吾家の祖母さんの顏がつとそこへ出て來たんですッて……』と話し聞かせた。

『國に居る人が枕頭へ出て來るなんて――馬鹿な――シッカリしろ。』と叔父さんは叱つた。

『だつて、仕樣が無いんですもの。』とお節は打伏のまゝ苦しさうに答へた。

刹那に來る恐怖は叔父さんの心をも捉へた。叔父さんは娘達を勵ますやうに無理に笑つたが、その叔父さんもいくらかドギマギして居た。叔父さんは藥だの水だのを持つて來てお節にすゝめた。

『榮ちやん、もう難有う。』とお節は背中の方に居る妹に言つて、それから横に成つた。『ア、、苦しかつた……祖母さんの顏が出て來たら、急に私は身體がゾーとして來た……』

『眞實にお前達には時々吃驚させられるせ。』

斯う叔父さんは言ひ捨てゝ置いて、やがて一段づゝ樓梯を上つて行く音をさせた。

幻は消えた。しかし寒い戰慄はまだお節の身體に殘つて居た。足は氷のやうに成つた。何事も知らずに眠つて居る子供の側で、枕紙に額を押當てゝ見た時は、漸くお節も我に返ることが出來た。早くお婿さんが來て自分を一緒に遠いところへ連れて行つて欲しい、斯の熱くなつたり冷くなつたりするやうな纖柔い自分をもつと奈樣かして欲しいと願つた。

『叔父さんの家に居るのも最早僅かに成つたネ。』

その叔父さんの話が食後に出る頃、お節の結婚も眼前に迫つて來た。

お父さんも急いで東京へ出て來た。お父さんは旅館の方から叔父さんの家を訪ねて來た。お父さんの手から帽子やインバネスを預る時のお節は髪も島田に結ひ替へて居た。

『節――お父さんに慥へて頂いた物を出してお目に掛けな――諸方から祝つて頂いた物もお目に掛けたら可からう。』

と叔父さんも娘達親子の居るところへ來て言葉を添へた。

祝の仕度もほゞ揃つた。根岸の姉さんがお節のために見立てゝ呉れた流行帶揚の淡紅な色ばかりでも、妹を羨ませるには十分であつた。これは根岸の伯母さんから、これは叔父さんの懇意な人からと、水引のかゝつた諸方からの贈物をお節はお父さんの前に置き、根岸の姉さんから別に祝つて呉れた帶などを取出して見せた。

お父さんは叔父さんと種々な打合をした後で、そこ〳〵にして起ちかけた、

『それぢや俺はこれから媒妁人のところへ寄つて、式場の方の都合も問合せる――今度はその爲に出て來たんだから寄れたら根岸へも寄る。復た來ます。』

お父さんの話は何時でも簡短で、そして明瞭だ。

お婿さんの新橋の停車場へ著いたといふ日、お父さんはその話を持つて、出迎へらしい羽織袴の姿で復た訪ねて來た。叔父さんと二人で二階へ上つて、打合せに來る根岸の伯母さんを待受けた。高いお父さんの話は階下に居て聞くことが出來る。『先に鈴木（お婿さん）に逢つた時はまだ書生だと思つて居たが、今度來て

見ると……どうしてナカ〳〵立派なものだよ……』姉妹の耳には聞き逼せないやうな話が後から〳〵出て來る。『親が先づ惚れて、自分の娘を呉れようといふ位の人物だから……』

根岸の伯母さんも見えた。伯母さんは階下で一服やつて、お嫁さんの心得に成るやうなことをお節に言つて聞かせる、それから女持の煙草入を手にしながらお父さん達の仰る方へ行つた。

談話半ばに叔父さんは一寸階下へ下りて來た。

『子供は？』

と部屋を見廻した。

『お婿さんに式の濟むまでは叔父さんの許へ訪ねて來ないやうにッて、今お父さんに頼んで置いた——お嫁さんがそこへ取次に出るなんて、可笑しなものだから

ね——』

斯樣なことを立話して、姉妹の娘と一緒に笑つて、復た二階の方へ相談に上つて行つた。

お父さんはその翌日も一寸顔を見せた。『鈴木が言ふには、洋食といふものはあれで本式にすると六ケしい作法がある。媒妁人が媒妁人だから、下手なことをすると笑はれる。誰の隣に誰を据ゑて、誰の向ふを誰の席にして——左樣なつて來ると、これでナカ〳〵面倒だ。それよりは矢張日本料理に願ひたいトサ。』

『成程ねえ。本場から來ると左樣思ふでせうなあ。』

混雜した中で、お父さんと叔父さんは話を遣つたり取つたりした。

『それぢや小常磐の方は宜敷頼んだよ。式が濟んだら新夫婦に寫眞を撮らせて、直に料理屋へ廻らせる。よし。』

そこ〳〵にしてお父さんは出て行つた。

いよ〳〵祝のあるといふ前の晩に、叔父さんの家ではお節のために小さな送別の食事をした。子供はかはる〴〵來てお節の側を離れなかつた。

『文ちやんは厭――姉さんの懐へ手などを入れて。』とお節は叱つて見せて、著物の襟を搔合せた。『ほんとに、文ちやんは子供のやうぢや無い。』

『あんたは子供ぢや無いわねえ。大人と子供の相の兒だわねえ。』とお榮も傍に居て戯れた。

『復た愚圖る。』とお節は子供を抱取つて、羽翅で締めるやうにした。『相の兒だつて言はれたのが其樣に口惜しいの？そんなら温順しく成さいナ。それ、くすぐつて遣れ――そうめん――にうめん――大根おろし〳〵。』

年長の長ちやんは學校へ行き始めてから急に兄さんらしく成つたと言はれて居

るが、何となくその日は萎れた顏付で、肩後からお節にすがりついた。

『長ちやん、左樣人に取附くものぢやないの――いやよ――いやよ――御覽なさいナ、髪がこはれるぢや有りませんか。』

お節は大事な島田を氣にして居た。すると長ちやんは顏を寄せて、いきなり姉さんの額のところへキスする眞似をした。

『生意氣。』

と言つてお節は妹と共に笑つたが、その子供の頰へ輕いキスを返した。文ちやんは膝に倚りながら、姉さんの口脣の鳴るのを聞いて居た。

佛壇には燈明が點いて、その光が花に映つて居た。何かこしらへたものも具へてあつた。叔父さんは庭口の方から其前を通つて皆なの居るところへ來た。

『どうだ、姉さんはお嫁に行つて了ふが可いかい。』

と叔父さんが子供等に言つた。お節は置いて行くのが可愛想だといふ顔付で、

『そんなこと言ふの御止しなさいよ。』

『行つても、可いよ。』

と文ちやんは下口唇を突出した。

『あまえる人が居なくなると、一寸これが困るだらうなあ。』

と叔父さんは獨語のやうに言つた。

お節のためにはコマ〳〵した買物が殘つて居た。姉妹の娘は早く子供等の寢靜まるのを待つた。その晩は叔父さんもめづらしく長く下の部屋に坐つて、翌日の仕度の話をした。

『叔父さんも多忙しいよ。叔母さんの分まで引受けなくちや成らないんだから。』

と叔父さんが笑つた。

『男に成つたり、女に成つたり。』とお榮も横から。

『まだ種々な物が要るぜ。紙白粉なども用意するが可いぜ。』

『彼樣なものを知つてるかと思ふと、可笑しいわねえ。』とお節は妹に。

『叔父さんだつて紙白粉ぐらゐ知つてらあ——』

叔父さんは斯樣な串談を言ふかと思ふと、急に調子を變へてお節の方へ切込んで來た。

『どうだネ、榮ちやんのところへも、貰つた物でも分けて置いてッたら。』

『私はあんまり人が好過ぎるなんて言はれますから……今度は何物も置いて行きません。』

お節は一生懸命だつた。一枚でも多く持つて、これからお婿さんと一緒に新規な生活を始めなければ成らなかつた。有體に言へば、妹のことなどは關つて居ら

れなかつた。

『行くものはサッサと行け。』

叔父さんは餞別の言葉でも吳れるやうな調子に變つて行つた。

年を取つた近所の女髮結が來た。早や祝の日が來た。その日は根岸の伯母さんも紋附を著てお嫁さんの手傳ひに出掛けて來て吳れた。根岸の伯母さんは自分が縫つた式の時の著物をお節に著せて見るのが自慢だつた。

『文ちやん、いやよ、さう人の帶を引張つちや。』とお節は長い著物の裾を引摺りながら。

『お嫁に行くんだ、やい。やい。』

と文ちやんは滑稽な調子で、姉さんの方へ指差して、皆なを笑はせた。

『その著物でウマく坐れるか。』

いそがしさうに叔父さんはお節の仕度したところを見に來て言つた。斯の叔父さんが自分で著て居る禮服は十五年前に亡くなつた叔母さんと結婚した時からあるものだ。お節は極く張詰めた心で、やがて皆なと一緒に叔父さんの家の敷居をまたいだ。

一臺の馬車が子供等の遊んで居る狹い町中で停つた。お婿さんは外國仕立の新調のフロック・コオト、お嫁さんの方は華やかな櫛笄で髮を飾つて、一緒にその馬車から下りた。新夫婦は結婚の翌日諸方へ禮廻りをして、午後の一時頃に叔父さんの家へ來た。

『長ちやん。』

とお節は車から下りると、直ぐ子供に聲を掛けた。

『これが文ちやんだネ。』

お婿さんは早や子供の名前を聞いて知つて居て、片手に外套を持ち、片手に子供の手を引きながら門の内へ入つた。

お節が旅館から妹へ通じて寄した電話で、叔父さんのところでは馳走振の鰻飯を冷くして待つて居た。お婿さんの外國土産などもそこへ取出された。叔父さんは片附けた二階へ新夫婦を案内して、そこでお腹の空いた人達に先づ晝飯を振舞つた。叔父さんとお婿さんの間には十年も附合つて居る人達のやうな話が始まつた。

『文ちやんも欲しいの？殘したんでも、姉さんのだから食べて頂戴な。』

とお節は自分の食べ殘した物を持つて、それから下座敷に居る妹や子供等と一緒

に成つた。

『立派な兄さんぬえ。』

斯の妹の一語は何れ祝はれるよりも姉に取つて嬉しかつた。

二階では話がはずんで、まだこれから根岸の伯母さんの方へ廻り外にもう一軒禮に寄らなければならないところが有るのにと、終にはお節が心配し始めたほどで有つた。

『俥ッて言ふと途中で車夫などを取替へる面倒が起りますし、ナカ〳〵一日で東京を廻るなんて譯にゆきません。馬車の方が反つて簡單です。左樣思つて借りて來ました。』

お婿さんは外國で苦勞して來た人らしいことを言つて、叔父さんと一緒に階下へ來てまで種々な話をした。

『長ちやん、一緒に馬車で行きませうか。』

左樣いふお婿さんの調子には、內地にばかり引込んで居る若者と違つて、コセコセして居ないやうなところが有つた。

お節は夫の外套を持つて車に上つた。

『文ちやん、復た來ますよ。』

と彼女が幌の內から顏を出して子供の方を見た頃は、車は動き始めた。

それから四五日の間を、お節はお婿さんと一緒に新婚の旅で暮して、お媚さんの生家の方にも居て、復た一旦東京の方へ引返して來た。最早お婿さんでも無かつた。旦那さんで可かつた。旦那さんはつめ先の用で、旅からまた旅に出掛けなければ成らない程の多忙しい身を持つて來て居た。で、一月ばかりの留守の間、お節は叔父さんの家の方へ預けられることに成つた。旦那さんが獨りで遠い旅に

立つ日、お節は旅館の方から妹の側へ引移つて來た。結婚したばかりの旦那さんは復た旅立の仕度にいそがしかつた。發つにも叔父さんの家から發つた。

『まるで叔父さんのところはお前達の家みたやうなものだ。』

と叔父さんはお節やお榮に話して笑つた。

新しい細君に成つて歸つて來たお節は、何となく容子も大人びた。それに張詰めた氣は、まだ緩まないといふ風で旦那さんに代つて訪ねなければ成らない家があり、言付けられた用があり、書くべき手紙の數からして增えた。新たに親が出來、弟が出來、妹が出來た。

旅館に滯在するお父さんが鈴木の家の樣子などを聞きに來ると、お節は叔父さんのお母さん(彼女の祖父さんの妹)に何處か似たやうな快活な調子で地方にある大きな家庭の光景を話して聞かせた。

『榮ちやん、何を其樣に考へ込んでるんだネ――』

とある日、叔父さんは臺所へ來て言つた。お節は外出して居なかつた。

『姉さんのことぢやないか。』と復た叔父さんが立つて居て言つた。『――姉さんも變つて來たよ。』

『お嫁さんに成れば皆な變るつて言ひますけれども、あんなに急に變らうとは思はなかつた。』とお榮が答へた。

『仕方が無いサ――姉さんは最早お前さんの姉さんぢや無くて、兄さんの姉さんなんだもの――妹の懷には居ようたつて居られない人なんだもの。』

叔父さんは勝手に近く置いてある鼠不入の前へ行つて立つた。

『こゝにお金を置くよ。』

と、その上に月々の會計のうちを置いた。

『一旦嫁に行つた人を預つたのは俺の手落ちだつた。どうしても節は鈴木の方に置くべき人だ。』

斯う叔父さんは言つて居たが、しかし急激な動搖――新婚の爲に起つて來た――が次第に沈まり、張詰めた氣も緩むにつれて、お節は平素の調子を回復した。

矢張お節はお節であつた。何となく彼女はサバけて來た。のみならず、焦々した學校時代などには半分夢中で附合つて居た人、名前は知らなくても毎日叔父さんの家の前を通る人、噂に聞いた人、其他種々な女の人を眞實に見分るやうに成つ

た。例へば同じ學校時代から續いた友達でも、田舍から養生に出て來て居る人とか――養子が出て行つて了つた後で、獨りで嬰兒を擁へて居る人とか――まだ何處へも嫁がずに長唄の稽古に通つて居る人とか――醫者の家に雇はれて、立派にして町を歩いて居る人とか――

遠い旅に出掛けた旦那さんからは途中からよく便りが有つた。六月の二十日頃に出た手紙は、海の暴れるのと霧が深いのとで未だ同じ港に滯在して、目的の地を蹈むことも出來ずに居ると言つて寄した。お節は待遠しい思をした。旦那さんが叔父さんの家へ預けて置いて行つた外國製の立派な鞄を見るにつけても、彼女は表の庭口の方へ行つて見た。八手の葉は傘でもひろげたやうに大きく成つた。開けひろげてある庭の入口を通して、直ぐ向ふに看屋の店頭が見える。鮭などが吊るしてある乾いた町へは急に夏らしい雨が來た。

板圍ひをした家々は見る間に濡れて行つた。往來へ向いた窓も戸も、廂も、乾燥し切つた瓦屋根も。お節はしばらくそこに立つて、ボンヤリと腕組して居る看屋の小僧の顏などを眺めながら、旅にある夫の事を思ひやつた。雨に打たれる塵埃の臭氣は部屋の内までも入つて來た。引返して勝手の方へ行つて見ると、叔父さんは流許で雨を見て居るし、長ちやんは板の間へ畫學紙と色鉛筆を持出して何かしきりと子供らしい畫をかいて居る。お榮は草花の鉢を取込んだところであつた。

『鈴木さんはまだ旅舍に逗留して居るんださうだなあ。あんなに長くなるんなら、叔母さんの生家へ紹介して遣るんだつた。』と叔父さんが言つた。

『ほんとに。』とお節も思ひやるやうな眼付をする。

お榮は姉の前へ手にした鉢を置いた。叔父さんはその方を見て、

『何だッけねえ、その罌粟みたやうな奴は。叔父さんは何度聞いても忘れちまう。』

『アネモネぢや有りませんか。』とお節が笑つた。

『むゝ、アネモネさ。お前達はよくそれでも其樣な名前を知つてるよ。』

『花の名ぐらゐ知らなくッて——ねえ、榮ちやん。』とお節は妹に。

『叔父さん、これを御覽なさい、甘い椿のやうな香氣がするでせう。』とお榮はチユウリップの咲いた鉢を持つて來て見せた。

『左樣言へば、お肴屋さんへ來て居た小さな娘は奈何したらう。』と話し〳〵叔父さんは水道の水で手を洗つて『——お前達のところへよく髮を結つて貰ひに來た。まるで俺の家は幼稚園だ。でも彼樣いふ娘も一寸めづらしいナ。皆なに厭がられて居ながら自分ぢや一番可愛がられてる積りかなんかで、有るぜ。どうかすると左樣いふ人は有る。そこへ行くと鈴木さんなどは年は若くても物が分つてらあね。』

お節は何か言ひかけたが、急に長ちやんがそれを遮つた。

『默つといで——默つといで——學校の先生と大將と何方が强い？』

斯の子供の『何方が强い』には娘達はさん〴〵弱らせられて居る。

『お前の旦那さんはナカ〳〵話せる。』と復た叔父さんはお節に話した。

『それぢや、今度歸つて來たら話して遣りませうッて。』

『叔父さんが褒めて居ましたでも、何だなあ、新婚早々直ぐに遠い處へ行かなくちやならないなんて、御役目とは言ひ乍ら殘酷な話だナ。』

『默つといで。』と長ちやんは姉さんに物を言はせなかつた。『巡査さんと兵隊さんと何方が强い？』

『何方も。』とお節は返事に困つた。

雨が小降に成つた。文ちやんは隣の家の小娘と一緒に傘をさしかけて表口から入つて來た。二度目にお節が斯の家へ預けられてからは、叔父さんはあまり子供を抱かせなかつた。

『關はないで置いて呉れ——關はないで置いて呉れ——獨りで遊ばせるやうな癖をつけて置かないと、後の者が困る。』

それを叔父さんに言はれる度に、お節は便りの無い子供を唯膝に腰掛けさせて、涙ぐんだ。

長いこと叔父さんの家で探して居た田舍出の婆やが來て臺所を稼ぐやうに成つてから、お節は一層快活に成つて行つた。賑かな笑聲が絶えなかつた。强壯一式を自慢にして來た婆やは、來たてには、いくらか姉さん達を馬鹿にした氣味であつたが、その若いものが『やはらかもの』でも何でもズン〳〵獨りで仕立てることを知つて居たには、眼を剝いた。裁縫の得意なお節は大抵のものは自分で造つた。彼女は以前から見ると、さう良い物でないまでも新しくて自分の好みに適つたやうな物を著て居た。細君と成つてから大分著物も出來た。妹の方はまだ質素な娘の服裝で居なければ成らなかつたが……

『榮ちやんが時々寢たりなんかするのは、私にはちやんと解つてる。』

とお節が言ふと、叔父さんは、

『生きてる人間だもの、それ位のことは有らあ。』

と言つて取合はなかつた。

途中で三週間近くも延びた旦那さんの旅の日數を勘定すると、お節は七月末あたりまでも叔父さんの家の世話に成つて居なければならなかつた。彼女は旦那さ

んの歸りを待佗びて、暑苦しくて堪らないやうな日には妹とかはりばんこに横に成つた。

『榮ちやん、叔父さんは？』

『お舟よ。』

七月に入つてからのある朝のことであつた。姉妹は流許で手洗をつかひながら話した。お榮の方は水道の前に蹲踞んで冷たい柔かな水でもつて寢起の顏を洗つて居た。お節は兩手をうしろの首筋の方へ廻して細い黃楊の櫛で髮をときつけながら立つて居た。物置の戸口と柱一つを界にして小窓が切つてある其外には手洗鉢が置いてある。お節は勝手の草履を穿いたまゝ其小窓のところへ行つた。無花果の枝、漆の葉、裏長屋の屋根などが雜然入組んで見える町裏を通して朝らしい光を帶びた鱗形の雲が望まれた。

勝手口の簾へ日が射して來た頃、叔父さんは汗ばんだ顏付をして舟漕ぎから歸つて來た。

『今朝の隅田川はまるで湖水のやうだつた。どうも實に好い心地だつた。』

と叔父さんは部屋の内まで冠つて入つて來た夏帽子を壁に掛けながら言つた。

『お舟はいかゝでした。』

と勝手の方から來て聲を掛けるお榮に挨拶した後、叔父さんはめづらしく活氣づいた調子であちこちと時計の下や佛壇の前を歩き廻つた。

『河の中流へ出て見ると、好いよ。都會の中の空氣とは思はれない。』

とお榮に言つて聞かせて、叔父さんはホッと荒い息を吐いた。

毎日々々二階に坐つて考へてばかり居た叔父さんが舟でも漕がうといふ人に成つたことは、姉妹のものを悦ばせた。お節は朝飯前の茶を入れて茶好きな叔父さんにすゝめた。

『斯ういふ好い運動が有るなら、もつと早く氣が附くんだッけ。野蠻人は必要に依つて動く。俺も矢張その方だ……奈樣にも斯樣にも仕樣が無くなつたもんだから始めた……この分ぢや、叔父さんも未だ死ねさうも無い……』

『死にさうな顏でも無いわ——ねえ榮ちやん。』とお節はやゝ皮肉な調子で。

『ほんとに串談ぢや無いよ。斯ういふことが有るが奈何だい——心を起さうと思へば、先づ身を起せッて。それだ。』と言つて叔父さんは熱心に姉妹の顏を眺めて『どうして少しばかり散歩なんかしたつて駄目サ……物を考へながら歩いてる……運動にも何にも成りやしない……そこへ行くと舟は好いよ……ア、向ふから帆

掛船が遣つて來たぞ、あいつに一つ衝突らないやうに、其樣なことを思ふだけサ……第一、河に近いのが何よりだ。いくら好い運動だつて近くなけりや駄目だね。』

お榮がそこへ朝飯の膳を運んで來た。姉は飯をつけて出し、妹は味噌汁を膳の上に置いた。

其朝は叔父さんは膳を前に置いて坐り直したり、飯を食ひかけては復た話を始めた。

『このまあ半歲ばかりの間、俺は一體何をして居たらう……ホ……十日も十五日も眞實にボンヤリして孤坐つてたことが有るんだよ、それでも自分ぢや何か爲て る積りかなんかで……そりや到底叔父さんの心持を節やなんかに話さうたつて、話せるもんぢやない……生の焰ッてことが有るが、叔父さんは生の氷といふことを經驗した。Ice of Life——榮ちやん、奈何だい、叔父さんの洒落は解るかい。』

姉妹は顔を見合せて、默つて微笑を換した。

長ちやんが表口から飛んで入つて來た。文ちやんも婆やに連れられて來た。

『何處へ行つてたの？さあ、御飯をお上り。』

と叔父さんが言つた。

『父さん、お舟――』と長ちやんは叔父さんの側へ行つて身を擦附けた。

『復たこの次に連れてツて下さいな。』

『叔父さん、私達も一度連れてツて下さいな。』

とお榮が賴んだ。

『連れてツて下さらないつて、ねえ榮ちやん、隨いてくからいゝ。叔父さんは三年も前から約束しといて、一度もお舟を奢つて下さらないんですもの。』

お節も物をねだるやうに言つた。

叔父さんの家から船宿のあるところまでは露路を通り抜けて行けば二町と無い位だ。屋根の上を鳴いて通る烏の聲を聞いたゞけでも、河に近く住む心地をさせる。

その翌朝早く姉妹は身仕度し、子供等にも單衣を著更へさせ、婆やに留守を賴んで置いて、冷しいうちに家を出た。長ちやんは近道をよく知つて居てズン〳〵先へ歩いて行く。皆な河の岸で一緒に成つた頃、その邊に遊んで居た子供は長ちやんを見つけて呼んだ。

『長ちやんは斯樣な方まで遊びに來るのよ。』

とお節は妹に話した。

叔父さんがよく借りて行くといふ船宿の子は長ちやんと同じ學校へ通ふ上の組の生徒であつた。其朝は割合に波の立つ日で、一時間ばかり水の上で搖られて復、

た舟から水の上、潮風の爲に皆なの著物はいくらかべト〳〵した。姉妹は子供等の手を引きながら、まだ戸を閉めた家のある町を廻つて歸つた。

『ア、草臥れた。』

とばかりでお節は部屋へ上ると直ぐ著物も著更へずに柱に倚凭る、お榮も酷くガツカリした樣子をして隅の方に足を投出す。二人とも溜息ばかり吐いた。

『そんなに皆な草臥れたのか。』

叔父さんは二人の樣子を見て笑つた。

『だつて、彼樣に舟が搖れるんですもの、もつと叔父さんは上手かと思つた。』とお節はそこへ身を投出すやうにして。

『そりやお前、今朝は風があつたからサ。ずつと吹きつけられちやつた。あの波ぢや堪らない。』

『でも、あの小僧さんの方は巧く漕いだわねえ。』とお榮はさも草臥れたらしく、肩まで一つ息をした。

『小僧さんが漕いだ時はあまり搖れなかつた。』

『さうかなあ。叔父さんの船頭には皆な懲りちやつたかなあ。』と言つて、叔父さんは頭を搔いた。

姉さん達がまだ舟に搖られて居るやうな眼付をして居る中で、長ちやんは床の間の方から机を持出した。それを部屋の眞中に覆して、早速舟を漕ぐ眞似を始めた。麻の夏蒲團は蓆筵の代りに成つた。小さな疊の上の船頭は團扇掛に長い尺度を結ひ著けて、それで櫓の形を造つた。

多分東京へ歸るのは八月の六日頃に成るだらう、と手紙で叔父さんのところへ言つて來た鈴木からは七月の末に急に電報を打つて寄した。その電報で、早や途中まで歸つて來て居ることが知れた。お節は妹と連立つて上野の停車場へ迎へに出掛けた。心待ちにした日よりは一週間ほど早く、遠い旅から歸つて來た人に逢ふことが出來た。夫は左程日に焼けもせず、相變らずの元氣で、東京へ著いた晩に旅館から叔父さんの家までお榮を送りに行つて、夜の十時頃までも叔父さんと二人で話し込んだ位だ。

旦那さんと一緒に復た旅館の方へ移つてからのお節は、今度は自分等二人の本當の旅仕度やら買物やらで、急にいそがしい身に成つた。その中でも妹の顏を見に叔父さんの家へ立寄つて、

『兄さんは矢張叔母さんの生家へ知らずに買物に行つたのよ。三度も。なんでもハイカラな娘が居たなんて——必とお君さん(叔母さんの姪)のことよ。』

斯樣な話をして置いて、またそこ〳〵に引返して行つた。

ある日は髮を結ひに寄つた。我儘の言へる妹の傍で、お節は髮結が來るまでの僅かばかりの時を送らうとして、

『榮ちやん、御免なさいよ、すこし横に成るから——草臥れたやら、眠いやらで。「意氣地が無いね」なんて、兄さんに笑はれちやつた。』

いよ〳〵遠いところへ行くといふ前の日には妹のところへ來るには來たが、物の十分と話して行かなかつた。

お父さんは到頭一夏旅館に滯在して、新夫婦しての旅立を見送らうと言つて吳れた。お節が旦那さんと一緒に東京を發つにも矢張叔父さんの家から發つことに成つた。

『人一人送り出すといふのはナカ〳〵容易ぢや有りません。』

と叔父さんは二階から降りて、お節の髪を丸髷に結ひに來た髪結に話した。

黄色く塗更へたばかりの深い床の壁には、長ちやんが鉛筆でもつて、大きな波だの舟だの變な顔の曲つた船頭だのを一面に畫いて了つた。その側で、旦那さんはお節の丸髷の出來るのを待ちながら、

『私が今行つてるところは、外國と言つても非常に單調な、極く寂しい感じのするところなんです。何か宗教でも無ければ居られないやうな處なんです。』

若い輝きをもつた大きな目は言葉で言へないところを補つた。

『宗教と言ひますと。』と叔父さんは問返した。

『まあ自分は自分だけの宗教に安心を求めるんですネ――他力とでも言つたやうな。』斯う旦那さんが答へた。

根岸では伯母さんも姉さんも停車場まで見送つて呉れるといふ。叔父さんの家では、叔父さん一人だけ留守居で、餘のものは皆な送つて行くことに成つた。婆やまで仕度した。

若い細君に似合はしいお節の髪が出來た。

『文ちやん、もう一度抱つこして見ませう。』

と言つて年少の子供を抱きあげ、それから長ちやんの方も抱いて見た。

『ほんとに二人とも大きく成つた。』

と復たお節が言ふと、長ちやんは鼻へ皺を寄せて、さも嬉しさうな容子をした。

『大きくなつたと言はれるのが其樣に嬉しいの？』

とお榮もその側に居て言つた。賴んで置いた車夫が來てそろ〳〵旅の鞄などを運び始めた。

足

袋

足袋

『比佐さんも好いけれど、アスが太過ぎる……』

仙臺名影町の吉田屋といふ旅人宿兼下宿の奥二階で、そこからある學校へ通つて居る年の若い教師の客をつかまへて、頰邊の紅い宿の娘が其樣なことを言つて笑つた。シとスと取違へた訛のある仙臺辯で。

斯の田舍娘の調戯半分に言つたことは比佐を喫驚させた。彼は自分の足に氣がついた……堅く飛出した『つとわら』の肉に氣がついた……怒つたやうな靑筋に

氣がついた……彼の二の腕のあたりはまだ〳〵纖細い、生白いもので、これから漸く肉も著かうといふところで有つたが、その身體の割合には、足だけはまるで別の物でも繼ぎ合はせたやうに太く頑固に發達して居た……彼は眞實に喫驚した。

散々歩いた足だ。一年あまりも心の暗い旅をつゞけて、諸國の町々や、港や、海岸や、それから知らない山道などを草臥れるほど歩き廻つた足だ。貧しい母を養はうとして、僅かな錢取のために毎日二里ほどづゝも東京の市街の中を歩いて通つたこともある足だ。兄や叔父の入つた未決檻の方へもよく引擦つて行つた足だ。歩いて歩いて、終には奈樣にも斯樣にも前へ出なく成つて了つた足だ。日の映つた寢床の上に器械のやうに投出して、生きる望みもなく震へて居た足だ……

その足で、比佐は漸くこの仙臺へ辿り著いた。宿屋の娘にそれを言はれる迄は

實は彼自身にも氣が著かなかつた。

こゝへ來て比佐は初めて月給らしい月給にもありついた。東京から持つて來た柳行李には碌な著物一枚入つて居ない。その中には洗ひ晒した飛白の單衣だの、中古で買求めて來た袴などがある。それでも母が旅の仕度だと言つて、根氣に洗濯したり、縫ひ返したりして呉れたものだ。比佐の敎へに行く學校には澤山亞米利加人の敎師も居て、皆な揃つた服裝をして出掛けて來る。なにがし大學を卒業して來たばかりのやうな若い亞米利加人の服裝などは殊に目につく。左樣いふ中で、比佐は人並に揃つた羽織袴も持つて居なかつた。月給の中から黑い背廣を新規に誂へて、降つても照つてもそれを著て學校へ通ふことにした。しかし、その新調の背廣を著て見ることすら、彼には初めてだ。

『どうかして、一度、白足袋を穿いて見たい。』

そんなことすら長い年月の間、非常な贅澤な願ひのやうに考へられて居た。でも、白足袋ぐらゐのことは叶へられる時が來た。

比佐は名影町の宿屋を出て、雲齋底を一足買ひ求めて來た。足袋屋の小僧が木の型に入れて指先の形を好くして呉れたり、滑かな石の上に折重ねて小さな槌でコン〳〵叩いて呉れたりした、その白い新鮮な感じのする足袋の綴ぢ紙を引き切つて、甲高な、不恰好な足に宛行つて見た。

『どうして、田舍娘だなんて、眞實に馬鹿に成らない……人の足の太いところなんか、何時の間に見つけたんだらう……』

醜いほど大きな足をそこへ投出しながら、言つて見た。

仙臺で出來た同僚の友達は廣瀨川の岸の方で比佐を待つ時だつた。漸く貧しいものに願ひが叶つた。初めて白足袋を穿いて見た。それに輕い新しい麻裏草履を

も穿いた。彼は足に力を入れて、往來の土を踏みしめ〳〵、雀躍しながら若い友達の方へ急いだ。

岩石の間

岩石の間

懐古園の城門に近く、桑畠の石垣の側で、櫻井先生は正木大尉に逢つた。二人は塾の方で毎朝合せて居る顔を合せた。

大尉は塾の小使に雇つてある男を尋ね顔に、

『音は奈何しましたらう。』

『中棚の方でせうよ』櫻井先生が答へた。

中棚とはそこから數町ほど離れた谷間で、新たに小さな鑛泉の見つかつたところだ。

淺間の麓に添うた傾斜の地勢は、あだかも人工で掘割られたやうに、小諸城址の附近で幾つかの深い谷を成して居る。谷の一つの淺い部分は耕されて舊士族地を收圍いて居るが、その桑畠や竹藪を背にしたところに櫻井先生の住居があつた。先生はエナアゼチックな手を振つて、大尉と一緒に松林の多い谷間の方へ長大な體軀を運んで行つた。

谷々は綠葉に包まれて居た。二人は高い崖の下道に添うて、耕地のある岡の上へ出た。起伏する地の波はその邊で赤土まじりの崖に成つて、更に河原續きの谷底の方へ落ちて居る。崖の中腹には、小使の音吉が弟を連れて來て、道をつくるやら石塊を片附けるやらして居た。音吉は根が百姓で、小使をするかたはら小作を作るほどの男だ。その弟も屈强な若い百姓だ。

兄弟の働いて居る側で先生方は町の人達にも逢つた。人々の話は鑛泉の性質、新浴場の設計などで持切つた。千曲川への水泳の序に、見に來る町の子供等もあつた。中には塾の生徒も遊びに來て居て、先生方の方へ向つて御辭儀した。生徒等が戯れに突落す石は、他の石にぶつかつたり、土煙を立てたりして、ゴロ〳〵崖下の方へ轉がつて行つた。

掘起された岩の間を廻つて、先生方はかはる〴〵薄暗い穴の中を覗き込んだ。浮き揚つた湯の花はあだかも陰氣な苔のやうに周圍の岩に附著して、極く靜かに動搖して居た。

新浴場の位置は略崖下の平地と定つた。荒れるに任せた谷陰には椚林などの生ひ茂つたところもある。櫻井先生は大尉を誘つて、あちこちと見て廻つた。今ある自分の書齋——その建物だけを、先生は斯の鑛泉側に移さうといふ話を大尉に

した。

對岸に見える村落、野趣のある釣橋、河原つゞきの一帶の平地、遠い近い山々——それらの眺望は先生方を悦ばせた。日あたりの好いことも先生方を悦ばせた。斯の谷間は割合に豐饒で、傾斜の上の方まで耕されて居る。眼前に連なる青田は一面綠の波のやうに見える。士族地からこゝへ通つて來るといふことも先生方を悦ばせた。あの樹木の蔭の多い道は大尉の住居からも左程遠くはなかつた。

その翌日から、櫻井先生は塾の方で自分の受持を濟まして置いて、暇さへあればこゝへ見廻りに來た。崖下に浴場を經營しようとする人などが廻つて來ないことはあつても、先生の姿を見ない日は稀だつた。そして、そこに土管が伏せられるとか、こゝに石垣の石が運ばれるとか、何かしらづゝ變つたものが先生の眼に映つた。河原續きの青田が黄色く成りかける頃には、先生の小さな別莊も日に日

に形を成して行つた。霜の來ないうちに早くと、崖の上でも下でも工事を急いだ。

雪が來た。谷々は三月の餘も深く埋もれた。やがてそれが溶け初める頃、復た先生は山歩きでもするやうな服裝をして、人並すぐれて丈夫な脚に脚絆み當て、持病のリヨウマチに侵されて居る左の手を懷に入れて歩いて來た。殘雪の間には、崖の道まで滲み溢れた鑛泉、半ば出來た工事、冬を越しても落ちずにある茶色な椚の枯葉などが見える。先生は霜のために危く崩れかけた石垣などまで見て廻つた。

斯の別莊がいくらか住まはれるやうに成つて、入口に自然木の門などが建つた頃には、崖下の浴場でもすつかり出來上るのを待たないで開業した。別に、崖の中途に小屋を建てゝ、鑛泉に老を養はうとする隱居さん夫婦もあつた。

春の新學年前から塾では町立の看板を掛けた。同時に、高瀨といふ新教員を迎へることに成つた。學年前の休みに、先生は東京から著いた高瀨をこゝへ案内して來た。岡の上から見ると中棚鑛泉とした旗が早や谷陰の空に飜つて居る。湯場の煙も薄く上りつゝある。

櫻井先生は、高瀨を連れて、新開の崖の道を下りた。先生がまだ男のさかりの頃、東京の私立學校で英語の教師をした時分、教へた生徒の一人が高瀨だつた。其後、先生が高輪の教會の牧師をして、かたはらある女學校へ教へに行つた時分、誰か櫻井の家名を繼がせるものをと思つて——その頃は先生も賴りにする子が無かつたから——養子の話まで仄めかして見たのも高瀨だつた。その高瀨が今度は塾の教員として、先生の下で働きに來た。先生から見れば弟子か子のやうな男だ。

石垣について、幾曲りかして行つたところに、湯場があつた。まだ一方には鉋屑の臭氣などがして居た。湯場は新開の畠に續いて、硝子窓の外に葡萄棚の釣つたのが見えた。青黑く透明な鑛泉からは薄い湯氣が立つて居た。先生は自然と出て來る樂しい溜息を制へきれないといふ風に、心地の好い沸かし湯の中へ身を浸しながら、久し振で一緒に成つた高瀨を眺めたり、田舍風な淺黃の手拭で自分の顏の汗を拭いたりした。假令性質は冷たくとも、兎にも角にも自分等の手で、各自に鍬を擔いで來て、斯の鑛泉の脈に掘當てたといふ自慢話などを高瀨にして聞かせた。

『正木さんなどは、まるで百姓のやうな服裝をして、ジャベルを擔いでは遣つて來たものでサ……』

何ぞといふと先生の話には、『正木さん、正木さん』が出た。先生は又、あの塾で一緒に仕事をして居る大尉が土地から出た軍人だが、既に恩給を受ける身で、讀み且つ耕すことに餘生を送らうとして、昔懷しい故鄕の城址の側に退いた人であることを話した。

『正木さんでも、私でも——矢張、この鑛泉の株主といふことに成つてます。』と先生は流し場の水槽のところへ出て、斑白な髮を濡らしながら話した。

東京から來たばかりの高瀨には、見るもの、聞くもの、新しい印象を受けるといふ風であつた。

二人は浴場を離れて復た崖の道を上つた。その中途にある小屋へ聲を掛けに寄ると、隱居さんは無慾な百姓の顏を出して、先生から預かつて居る鍵を渡した。

『高瀨さんに一つ、私の別莊を見て頂きませう。』

と言つて先生は崖に倚つた小樓の方へ高瀨を誘つて行つた。『これが湯の元です。』

といふところを通つた。先生は岩の間に造りつけてある黒い扉を開けて高瀬に見せた。そこには、隱れた地の底から涌いて來たまゝの鑛泉が淀んで居た。

『どれ、御案内しませう。まだ畳もすつかり入れてありません。』

先生は隱居さんから受取つた鍵で錠前をガチャ〳〵言はせて、誰も留守居のない、暗い家の中へ高瀬を案内した。閉めてあつた雨戸を繰ると、對岸の崖の上にある村落、耕地、その下を奔り流れる千曲川が青畳の上から望まれた。

高瀬は欄のところへ行つて、川向ふから傳はつて來る幽かな鷄の聲を聞いた。先生も一緒に立つて眺めた。

『高瀬さん、斯の家は見覺えがありませう――』

先生に左樣言はれると、高瀬にも覺えがある。高瀬は一度小諸を通つて先生の住居を訪ねたことがある。形は變へられたが以前の書齋だ。

『どうせ、斯の建物は斯うしてありますから、皆さんにお貸し申します……御入用の時は、何時でも御使ひ下さい。』

と言ひながら、先生は新規に造り足した部屋を高瀬に見せ、更に樓階の下の方までも連れて行つて見せた。そこは食堂か物置部屋にでもしようといふところだ。崖を崩して築き上げた暗い石垣がまだ其儘に顯はれて居た。

二人は復た川の見える座敷へ戻つた。先生は戸棚を開けて、煙草盆などを探した。

『しかし、先生も白く成りましたネ。』

と高瀬が言出した。

先生が長い立派な髯を生したのも斯の地方へ來て隱れてからだ。

年はとつても元氣の好い先生の後に隨いて、高瀨はやがて斯の小樓を出、元來た谷間の道を町の方へ歸つて行つた。一雨ごとに山の上でも溫暖く成つて來た時で、いくらか濕つた土には日があたつて居た。

『櫻井先生、あの高輪の方にあつた御宅は奈何成さいました。』

『高輪の家ですか。あれは君、實に馬鹿々々しい話サ……好い具合に人に胡麻化されて了ひました……』

高瀨は先生の高輪時代をよく知つて居る。あの形勝の好い位置にあつた、庭も廣く果樹なども植ゑてあつた、恐らく永住の目的で先生が建てた家を知つて居る。あの時代に居た先生の二度目の奥さんを知つて居る。あの頃は先生もまだ若々しく、時には奥さんに輕い洋裝をさせ、一緒に猿町邊を散歩した……先生にも左樣

いふ時代のあつたことを知つて居る。

話し〳〵二人は歩いた。

坂に成つた細道を上ると、そこが舊士族地の町はづれだ。古い屋敷の中には最早人の住まないところもある。破れた土塀と、その朽ちた柱と、桑畠に礎だけしか殘つて居ないところもある。荒廢した屋敷跡の間から、向ふの方に小諸町の一部が望まれた。

『淺間が燒けてますよ。』

と先生は上州の空の方へ靡いた煙を高瀨に指して見せた。見覺えのある淺間一帶の山脈は、旅で通り過ぎた時とは違つて、一層ハツキリと高瀨の眼に映つて來た。

先生の住居に近づくと、一軒手前にある古い屋敷風の門のところは塾の生徒が出たり入つたりして居た。寄宿する青年達だ。いづれも農家の子弟だ。その家の

一間を借りて高瀬はさしあたり腰掛に荷物を解き、食事だけは先生の家族と一緒にすることにした。横手の木戸を押して、先生は自分の屋敷の裏庭の方へ高瀬を誘つた。

先生の周圍は半ば農家のさまだつた。裏庭には田舍風な物置小屋がある。下水の溜がある。野菜畠も造つてある。縁側に近く、大きな鳥籠が伏せてあつて、その邊には鷄が遊んで居る。今度の奥さんには子供衆もあるが、都會育ちの色の白い子供などと違つて、『坊ちやん』と言つても强壯さうに日に燒けて居る。

東京の明るい家屋を見慣れた高瀬の眼には、屋根の下も暗い、先生のやうな清潔好きな人が、よく斯のむさくるしい爐邊に坐つて平氣で煙草が喫めると思はれる程だ。

高瀬の來たことを聞いて、逢ひに來た町の青年もあつた。どうして斯樣な田舍へ來て呉れたかなどと、挨拶も如才ない。今度の奥さんはミッション・スクウルを出た婦人で、先生とは大分年は違ふが、取廻しよく皆なを欵待した。奥さんは先生のことを客に話すにも、矢張『先生は』とか『櫻井が』とか親しげに呼んで居た。

『高瀬さんに珈琲でも入れて上げたら可からう。』

『私も今、左樣思つて——』

斯樣な言葉を奥さんと換した後、先生は高瀬と一緒に子供の遊んで居る縁側を通り、自分の部屋へ行つた。庭の花畠に接した閑靜な居間だ。そこだけは先生の趣味で淸淨に飾り片附けてある。唐本の詩集などを置いた小机がある。一方には先生の若い奥さんの時代からあつた屏風も立てゝある。其時、先生は近作の漢詩を取出して高瀬に見せた。中棚鑛泉の附近は例の別莊へ通ふ隱れた小徑から對岸の村落まで先生の近作に入つて居た。その年に成るまで眞實に落著く場所も見當ら

なかつたやうな先生の一生は、漢詩風の詞で、その中に言ひ表してあつた。

其晩、高瀬は隣の屋敷の方へ行つて、一時借りて居る部屋で、東京の友人に宛てた手紙を書いた。一間ほど隔てゝ寄宿する生徒等の何かゴト〴〵言はせる音がする。まだ他に部屋を仕切つて借りて居る人達もあると見え、一方の破れた襖の方からは貧しい話し聲がボソ〴〵ボソ〴〵聞える。旅の行李の側に床を敷いてからも、場所の違つたのと、鼠の騒ぐのとで、高瀬はよく寢就かれなかつた。彼の心はまだ半ば東京の方にあつた。自分のために心配して居て呉れる人達のことなどが、夜遲くまで、彼の胸を往來した。

朝早く高瀬は屋外に出て山を望んだ。遠い山々にはまだ白雪の殘つたところも

有つたが、淺間あたりは最早すつかり溶けて、牙齒のやうな山續きから、陰影の多い谷々、高い崩壞の跡などまで顯はれて居た。朝の光を帶びた、淡い煙のやうな雲も山巔のところに浮んで居た。都會から疲れて來た高瀬には、山そのものが先づ活氣と刺激とを與へて呉れた。彼は清い鋭い山の空氣を饑ゑた肺の底までも呼吸した。

塾で新學年の稽古が始まる日には、高瀬は知らない人達に逢ふといふ心を持つて、庭傳ひに櫻井先生を誘ひに行つた。早起の先生は時間を待ち切れないで疾くに家を出た。裏庭には奥さんだけ居て、主婦らしく畠を見廻つて居た。

『でも、高瀬さん、田舍ですね。後の方にある桑畠まで皆な斯の屋敷に附いてるんですよ――』

と奥さんは言つて聞かせた。

草の芽が見える花畠の間を通つて、高瀬は裏木戸から桑畠の小徑へ出た。その淺く狹い谷一つ隔てた岡の上が、直ぐ塾の庭だ。樹木の間から白壁だの教室の窓などが見えるところだ。高瀬は谷を廻つて、いくらか勾配のある耕地のところで先生と一緒に成つた。

『こゝへは燕麥を作つて見ました。私共の畠は學校の小使が作つてます。』

先生はその石の多い耕地を指して見せた。

塾の庭へ出ると、櫻の若樹が低い土手の上にも教室の周圍にもあつた。ふくらんだ蕾を持つた、紅味のある枝へは、手が屆く。表門の柵のところにはアカシヤが植ゑてあつて、その邊には小使の音吉が腰を曲め乍ら、庭を掃いて居た。一里も二里もあるところから通ふといふ近在の生徒などは草鞋穿でやつて來た。

まだ時が早くて、高瀬は先生の室を見る暇があつた。教室の上にある二階の角

が先生のデスクや洋風の書架の置並べてあるところだ。亞米利加に居た頃の樂しい時代でも思出したやうに、先生はその書架を背にして自分でも腰掛け、高瀬にも腰掛けさせた。

『好い書齋ですネ。』

と高瀬は言つて見て、窓の方へ行つた。蓼科の山つゞきから遠い南佐久の奥の高原地がそこから望まれた。近くには士族地の一部の草屋根が見え、ところ〴〵に柳の梢の薄く青みがゝつたのもある。遲い春が漸く山の上へ近づいて來た。

『高瀬さん、これを一つ君に呈しませう。』

と言つて先生が書架から取出したのは、古い皮表紙の小形の洋書だ。先生は鼻眼鏡を隆い鼻のところに宛行つて、過ぎ去つた自分の生活の香氣を嗅ぐやうに其の古い洋書を繰りひろげて見て、それから高瀬に呉れた。

正木大尉は幹事室の方に見えた。先生と高瀬と一緒にその室へ行つた時は、大尉は隅のところに大きな机を控へて居た。高瀬は、大尉とは既に近づきに成つて居た。

『正木先生は大分漢書を集めて被入つしやいます――法帖の好いのなども澤山持つて被入つしやる。』と先生は高瀬に言つた。『何かまた貴方も借りて御覽なすつたら可いでせう。』

『えゝ、まあボツ〳〵集めてます……なんにも子供に遺して置く物もありませんから、せめて書籍でも遺さうと思ひまして……』

大尉は黑い袴の中へ兩手を差入れながら笑つた。

其日、高瀬は始めて廣岡理學士に紹介された。上田町から汽車で通つて來るといふ。高瀬から見れば親と子ほども年の違つた學者だ。

『高瀬さんは三年といふ御約束で、私共の塾へ來て下さいました。』

先生は今度雇ひ入れた新教員のことを學士に話した。

初めての授業を終つて、復た高瀬が斯の二階へ引返して來る頃は、丁度二番の下り汽車が東京の方から著いた。盛んな蒸汽の音が塾の直ぐ前で起つた。年のいかない生徒等は門の外へ出て、いづれも線路側の柵に取附き、通り過ぎる列車を見ようとした。

『どうも汽車の音が喧しくて仕樣が有りません。授業中にあいつをやられやうものなら、硝子へ響いて、稽古も出來ない位です。』

大尉は一寸高瀬の側へ來て、言つて、一緒に停車場の方へ向いた窓から見下した。大急ぎで駈出して行く廣岡理學士の姿が見えた。學士は風呂敷包から古い杖まで忘れずに持つて、上田行の汽車に乘り後れまいとした。

これと觸違ひに越後の方からやつて來た上り汽車がやがて汽笛の音を殘して、東京を指して行つて了つた頃は、高瀨も塾の庭を歸つて行つた。周圍にはあたかも船が出た後の港の靜かさが有つた。塾の庭にある櫻は濃い淡い樹の影を地に落して居た。谷づたひに高瀨は獨り桑畠の間を歸りながら、都會から遁れて來た自分の身を考へた。彼が近い身の邊にあつた見せかけの生活から——甲斐も無い反抗と心勞とから——其他あらゆるものから遁れて來た自分の身を考へた。もつと自分を新鮮に、そして簡素にすることは無いか。そのために、彼は他にもあつた教師の口を斷り、すこし土でも掘つて見ようと思つて、わざ〳〵斯の寂しい田舍へ入つて來た。

『高瀨さん、一體貴方はお幾つなんですか——』

櫻井先生の奥さんは庭づたひに隣の家の方から廻つて來た高瀨に尋ねた。奥さんは緣側のところに出て、子供に鷄を見せて居た。

高瀨は庭に立ちながら、『二十八です。』と答へた。

『まだお若いんですねえ。』

『左樣言へば、奥さんはお幾つです。女の方の年齡といふものは、よく分らないものですネ。』

『私ですか——貴方より二つ上——』

奥さんは聞かなくても可いことを鑿つて聞いたといふ顏付で、やゝ皮肉に笑つて、復た子供と一緒に鷄の方を見た。淡黃な色の雛は幾羽となく母鷄の羽翅に隱れた。

先生が庭を廻つて來た。町の方に見つけた借家へ案内しよう、といふ先生に隨いて、高瀬はやがて斯の屋敷を出た。

城門前の石碑のあるあたりから、鐵道の線路を越え、二人は砂まじりの窪い道を歩いて行つた。並んだ石垣と桑畠との見える小高い耕地の上の方には大手門の殘つたのが裏側から望まれた。先生はその高い瓦屋根を高瀬に指して見せた。初めて先生が小諸へ移つて來た時は、その太い格子の篏つた窓と重い扉のある城門の樓上が先生の假の住居であつたといふ話をして聞かせた——丁度、先生はお伽話でもして聞かせるやうに。

坂道を上ると、大手の跡へ出る。士族地の方へ行く細い流が其邊の町の間を流れて來て居る。二人は廣岡理學士の噂などをしながら歩いた。

先生は思ひやるやうに、

『廣岡さんも今、上田で數學の塾を開いてますが、餘程の逆境でせう……まあ、私共も先生に同情して、いくらかの時間を助けに來て頂くことにしたんです……それに、君、吾々の塾も中學の設備をして、認可でも受けようといふには、肩書のある人が居ないと一寸これで都合が惡いからネ。』

高瀬も笑つた。

細い流について行つたところに、本町の裏手に續いた一區域がある。落葉松の垣で圍はれた草葺屋根の家が先生の高瀬を連れて行つて見せたところだ。近くまで汁粉屋が借りて居たとかで、古い穴のあいた襖、煤けた壁、汚れた障子などが眼につく。炬燵を切つたあたりは疊も燒け焦げて、紙を貼り著けてある。住み荒した跡だ。

『まあ、斯樣なものでせう。』

と先生は高瀬に言つて、一緒に奥の方まで見て廻つた。

『一寸、今、他に貸すやうな家も見當りません……妙なもので、これで壁でも張つて、畳でも入れ替へて御覧なさい、どうにか住めるやうに成るもんですよ。』

と復た先生が言つた。

同じ士族屋敷風の建物でも、これはいくらか後で出來たものらしく、蠶の種紙をあきなふ町の商人の所有に成つて居た。高瀬はすこしばかりの畠の地所を附けてこゝを借りることにした。

小使の音吉が來て三尺四方ばかりの爐を新規に築き上げて呉れた頃、高瀬は先生の隣屋敷の方からこゝへ移つた。

家の裏には別に細い流があつて、石の間を落ちて居る。山の方から來る荒い冷い性質の水だ。飲料には用ひられないが、砂でも流れない時は顔を洗ふに好い。

そこにも高瀬は生のまゝの刺激を見つけた。斯の粗末ながらも新しい住居で、高瀬は婚約のあつた人を迎へる仕度をした。月の末に、彼は結婚した。

長く東京で年月を送つて來た高瀬には、塾の周圍だけでも眼に映るものが多かつた。庭にある櫻の花は開いて見ると八重で、花束のやうに密集つたやつが教室の窓に近く咲き亂れた。濃い花の影は休みの時間に散歩する教師等の顔にも映り、建物の白い壁にも映つた。學生等は幹に隠れ、枝につかまり、まるで小鳥かなんどのやうに其下を遊び廻つて戯れた。

『廣岡先生も隨分闊はない人ですネ。』

と高瀬が櫻井先生と正木大尉との居る前で言ふと、大尉は笑つて、

『關はないんぢやなくて、關へないんでせう……』

と言つた。左樣いふ大尉は著物から羽織まで惜げもなく筒袖にして、塾のために働かうといふ意氣込を示して居た。

斯の半ば家庭のやうな學校から、高瀨は自分の家の方へ歸つて行くと、賴んで置いた鍬が屆いて居た。塾で體操の教師をして居る小山が屆けて呉れた。小山の家は町の鍛冶屋だ。チョン髷を結つた阿爺さんが鍛つて呉れたのだ。高瀨はその鐵の目方の可成あるガッシリとした柄のついた鍬を提げて、家の裏に借りて置いた畠の方へ行つた。

不思議な風體の百姓が出來上つた。高瀨は頰冠り、尻端折りで、股引も穿いて居ない。それに素足だ。柵の外を行く人はクス〳〵笑つて通つた。とは言へ高瀨は關はず働き始めた。掘起した土の中からは、どうかすると可憐な穎割葉が李の

種について出て來る。彼は地から直接に身體へ傳はる言ひ難い快感を覺えた。時には畠の土を取つて、それを自分の脚の弱い皮膚に擦り著けた。

塾の小使も高瀨には先生だつた。音吉は見廻りに來て、鍬の持ち方から敎へた。毎日のやうに高瀨は塾の受持の時間を濟まして置いて、家へ歸れば斯の畠へ出た。ある日、音吉が馬鈴薯の種を籠に入れて持つて來て見ると、漸く高瀨は畠の地ならしを濟ましたところだつた。彼の妻——お島はまだ新婚して間もない髮を手拭で包み、紅い色の腰卷などを見せ、土掘りの手傳ひには似合はない都會風な風俗で、土のついた雜草の根だの石塊などを運んで居た。

『奥さん、御精が出ますネ。』

と音吉は笑ひながら聲を掛けて、高瀨の掘起した畠を見た。サクの切り方が淺かつた。音吉は高瀨から鍬を受取つて、もつと深く切つて見せた。

『この邊は、まるで燒石と砂ばかりのやうなものでごわす。上州邊と違つて碌な野菜も出來やせん。』

と音吉が言つた。

彼は持つて來た馬鈴薯の種を植ゑて見せ、猶、葱苗の植ゑ方まで敎へた。

斯の高瀨が僅かばかりの野菜を植ゑ試みようとした畠からは、耕地つゞきに商家の白壁などを望み、一方の淺い谷の方には水車小屋の屋根も見えた。細い流で近所の鳴らす鍋の音が町裏らしく聞えて來るところだ。激しく男女の勞働する火山の裾の地方に、高瀨は自分と妻とを見出した。

塾では更に校舍の建增を始めた。敎員の手が足りなくて、翌年の新學年前には

廣岡理學士が上田から家を擧げて引移つて來た。

子安といふ新敎員も、高瀨が東京へ行つた序に賴んで來た。子安は、高瀨も逢つたことが無い。人の紹介だ。塾では奈樣な新敎員が來るかと皆な待受けた。子安が著いて見ると案外心易い、少壯な學者だ。

斯うなると敎員室も大分賑かに成つた。櫻井先生はまだ壯年の輝きを失はない眼付で、大きな火鉢を前に控へて、盛んに話す。正木大尉は正木大尉で强い香のする刻煙草を卷きながら、よく『軍隊に居た時分』を持出す。時には、音吉が鈴を振鳴しても、まだ皆な火鉢の側に話し込むといふ風であつた。

『正木さん、一寸この眼鏡を掛けて御覽なさい。』

『まだ私は老眼鏡には早過ぎる――ヤ、これは驚いた――斯う側へ寄せたよりも、すこし離した方が猶よく見えますナ――廣岡先生、いかゞ。』

『成程、よく見えます。』

『ヒドイものですナ――』

斯樣な話をしても、時は樂しく過ぎた。

近くて湯のある中棚は皆なの交歡に適した場所だつた。子安がいくらか土地に馴染んだ頃、高瀨も誘はれて塾から直ぐに中棚の方へ歩いて行つて見た。子安が東京から來て一月ばかり經つ時分には藤の花などが高い崖から垂下つて咲いて居た谷間が、早や木の葉の茂り合つた蔭の道だ。暗いほど深い。

岡の上へ出ると、なまぬるい微かな風が黃色くなりかけた麥畠を渡つて來る。麥の穗と穗の擦れる音が聞える。强い、掩ひ冠さつて來るやうな叢の香氣は二人を沈默させた。二語、三語物を言つて見て、復た二人とも默つて歩いた。

崖の道を降りかけて、漸く二人は笑ひ出した。隱居さんの小屋のあたりで、湯

場の方から上つて來る正木大尉の奧さんにも逢つた。大尉の奧さんは湯上りの好い顏色で、子供を連れて、丁寧に二人に挨拶して通つた。

浴場には櫻井先生も廣岡學士も來て居た。先生は身體を拭いて上りかけたところで、學士だけ鑛泉の中に心地よささうに入つて居た。硝子戸の外には葡萄の蔓も延び〳〵として、林檎の植ゑられた畠なども見える。

『子安君はナカ〳〵好い身體ですネ――』

と學士に言はれて、子安は隨分苦學もして來たらしい締つた毛脛を撫でた。

『奈何です、我輩の指は。』

と其時、學士は左の手をひろげて、半分しかない藥指を出して見せた。

『ホウ。』と子安は眼を圓くした。

『一寸氣が著かないでせう。これにはそも〳〵歷史がある――ベエスの記念で

サ。』

學士は華やかな大學時代を想ひ起したやうに言つて、その骨を挫かれた指で熱球を受け損じた時の眞似までして見せた。

三人が連立つて湯場を出、櫻井先生の別莊の方へ上つて行つた時は、先生は皆なを待受顏に窓に近い庭石に水をそゝいで居た。先生は石垣の上に試みたアカシヤの挿木を高瀨に指して見せた。門の内には先生の好きな花も植ゑられた。

別莊の入口には樓の名を彫つた額も掛つた。明るく深い綠葉の反射は千曲川の見える座敷に滿ちて、そこに集つた湯上りの連中の顏にまで映つた。一年に二度づゝ黃色くなる欄の外の眺めは綠に調和して畫のやうに見えた。先生は茶を入れて皆なを欵待しながら、青田の時分に聞える非常に澤山な蛙の聲、夕方に見える對岸の村落の灯の色などを語り聞かせた。

間もなく三人は先生一人を斯の隱れ家に殘して置いて、町の方へ歸つて行つた。學士がユックリ〳〵歩くので他の二人は時々足を停めて待合はせては復たサツサと歩いた。

『しかし、女でも何でもよく働くところですネ。』と子安は別れ際に高瀨に言つた。

高瀨も佇立つて、『畢竟、よく働くから、それで斯う女の氣象が勇健いんでせう。』

『左樣です。働くことはよく働きますナ……それに非常な質素なところだ……ですけれど、高瀨さん、チアムネスといふものは全く斯の邊の娘に缺けてますネ。』

子安は心から出た聲で快活に笑つた。『まるで、ゴツ〳〵した岩みたやうな連中ばかりだ。』と彼は附添した。

『しかし、君、その岩が好くなつて來るから不思議だよ。』と高瀨は戲れて言つた。

子安は先へ別れて行つた。鐵道の踏切を越した高い石垣の側で、高瀬はユックリ歩いて來る學士を待受けた。

『高瀬さん、私も小諸の土に成りに來ましたよ。』

と學士は今迄にない忸々しい調子で話し掛けて、高瀬と一緒に石垣側の段々を貧しい裏町の方へ降りた。

『……私も今、朝顔を作つてます……上田ではよく作りました……今年はウマくいくか奈何か知りませんがネ、まあ見に來て下さらんか。』

斯う歩き〳〵高瀬に話し掛けて行くうちに、急にポツ〳〵落ちて來た。學士は家の方の朝顔棚が案じられるといふ風で、大急ぎで高瀬に別れて行つた。

大きな石の砂に埋つて居る土橋の畔あたりへ高瀬が出た頃は、雨が彼の顔へ來た。貧しい家の軒下には、茶色な——茶色などいふよりは灰色な荒い髪の娘が立つて、ションボリと往來の方を眺めて居た。高瀬は途を急がうともせず、顔へ來る雨を寧ろ樂みながら歩いた。そして寒い凍え死ぬやうな一冬を始めて斯の山の上で越した時分には風邪ばかり引いて居た彼の身體にも、いくらかの抵抗する力が出來たことを悦んだ。ビツショリ汗をかきながら家へ戻つて見ると、その年も畠に咲いた馬鈴薯の白い花がうなだれて居た。雨に打たれる乾いた土の臭氣は新しい書籍を並べた彼の勉強部屋までも入つて來た。

七月に入つて、廣岡理學士は荒町裏の家の方で高瀬を待受けた。高瀬の住む町からも左程離れて居ないところで、細い坂道を一つ上れば體操教師の家の鍛冶屋の店頭へ出られる。高い白壁の藏が並んだ石垣の下に接して、竹藪や水の流に取圍かれた位置にある。田圃に近いだけに、濕氣深い。

『お早う。』

と高瀬は聲を掛けて、母屋の横手から裏庭の方へ來た。

深い露の中で、學士は朝顔鉢の置並べてある棚の間をあちこちと歩いて居た。

丁度學士の奥さんは年長のお嬢さんを相手にして開けひろげた勝手口で働いて居たが、其時庭を廻つて來た。

奥さんは性急な、しかし良家に育つた人らしい調子で、

『宅ぢや斯の通り朝顔狂ですから、小諸へ來るが早いか直ぐに庭中朝顔鉢にしちまひました——斯の棚は音さんが來て造つて呉れましたよ——まあ斯樣な好い棚を——』

と高瀬に話した。奥さんはユックリ朝顔も眺めなれないといふ風に言つたが、夫の好きな花に趣味も持たない人では無いらしかつた。彼女は學士が植ゑて樂む種

種な朝顔の變り種の名前などまでもよく諳記んじて居た。

『高瀬さんに一つ、私の大事な朝顔を見て頂きませうか。』

と學士が言つて、數ある素燒の鉢の中から短く仕立てた『手長』を取出した。學士はそれを庭に向いた縁側のところへ持つて行つた。鉢を中にして、高瀬に腰掛けさせ、自分でも腰掛けた。

奥さんは子供衆の方にまで氣を配りながら、

『これ、繁、塾の先生が被入しつたに御辭儀しないか——勇、お前はまた何だッて其樣なところに立つて居るんだねえ——眞實に、高瀬さん、私も年を取りましたら、氣ぜはしくなつて困りますよ——』

奥さんの小言の飛沫は年長のお嬢さんにまで飛んで行つた。お嬢さんは初々しい頰を紅めて、客や父親のところへ茶を運んで來た。

斯の子供衆の多勢ゴチャ〳〵居る中で、學士が一服やりながら朝顔鉢を眺めた時は、何もかも忘れて居るかのやうであつた。

『今咲いてますのは、ホンの丸咲か、牡丹種ぐらゐなものです。』と學士は高瀨に言つた。『眞實の獅子や手長と成つたら、どうしても後れますネ。そのうちに一つ塾の先生方を御呼び申したい……何がなくとも皆さんに集つて頂いて、これで一杯進げられるやうだと可いんですけれど……』

翌朝高瀨は塾へ出ようとして、例のやうに鐵道の踏切のところへ出た。線路を渡つて行く塾の生徒などもあつた。丁度そこで與良町の方からやつて來る子安に逢つた。毎時言ひ合せたやうに皆なの落合ふところだ。高瀨は子安を待合せて、

一緒に塾の方へ歩いた。

線路側の柵について先へ歩いて行く廣岡學士の後姿も見えた。

『廣岡先生が行くナ。』と高瀨が言つた。

子安も歩き〳〵、『なんでもあの先生が上田から通つて被入つしやる時分には、大變お酒に醉つて、往來の雪の中に轉がつて居たことがあるなんて――そんな話ですネ。』

『私も聞きました。』

『どうして廣岡先生のやうな人が斯樣な地方へ入り込んで來たものでせう。』

『それは、君、誰も知らない――』

塾の門前に近いところで、二人は學士に追ひ附いた。

朝顔の話はそこでも學士の口から出た。

『高瀬さん、今朝も咲きましたよ。』

『どうも先生の朝顔は六ケしくツて、私にはまだよく解りません。』と高瀬は笑ひながら言つた。

『町の方でポツ〳〵見に來て下さる方もあります……好きな人もあるんですネ……しかし私はまだ、斯の土地にはホントに御馴染が薄い……』

學士は半ば獨語のやうに言つた。

正木大尉が桑畠の石垣を廻つてニコ〳〵しながら歩いて來た。皆な連立つて教員室の方へ行つて見ると、櫻井先生は早くから來て詰掛けて居た。先生は朝のうちに一度中棚まで歩きに行つて來たとも言つた。

塾の庭にある樹木の緑も深い。清しさうなアカシヤの下には石に腰掛けて本を開ける生徒もある。濃い櫻の葉の蔭には土俵が出來て、そこで無邪氣な相撲の聲

が起る。斯の山の上へ來て二度七月をする高瀬には、學校の窓から見える谷や岡が餘程親しいものと成つて來た。その田圃側は、高瀬が行つては草を藉き、土の臭氣を嗅ぎ、百姓の仕事を眺め、畠の中で吸ふ嬰兒の乳の音を聞いたりなどして、暇さへあれば歩き廻るのを樂みとするところだ。一度消えた夏らしい白い雲が復た窓の外へ歸つて來た。高瀬はその熱を帶びた、陰影の多い雲の形から、青空を流れる遠い水蒸氣の群まで、見分けがつくやうに成つた。

休みの時間毎に、高瀬は窓へ行つた。極く幼少い時の記憶が彼の胸に浮んで來た。彼は自分もまた髪を長くし、手造りにした藁の草履を穿いて居たやうな田舍の少年であつたことを思出した。河へ抄ひに行つた鰍を思出した。榎の樹の下で檀鳥が落して行つた青い斑の入つた羽を拾つたことを思出した。栗の樹に居た蟲を思出した。その蟲を踏み潰して、緑色に流れる血から糸を取り、酢に漬け、引

き延ばし、乾し固め、それで魚を釣つたことを思出した。彼は又、生きた蛙を捕へて、皮を剝ぎ、逆さに棒に差し、蛙の肉の一片に紙を添へて餌をさがしに來る蜂に與へ、そんなことをして蜂の巣の在所を知つたことを思出した。彼は都會の人の知らない蜂の子のやうなものを好んで食つたばかりでなく、田圃側に葉を垂れて居る『すいこぎ』、虎杖、それから『すい葉』といふ木の葉で食べられるのを生でムシャ〳〵食つたことを思出した。

高瀨の胸に眠つて居た少年時代の記憶はそれからそれと復活つて來た。彼は幾年となく思出したことも無い生れ故郷の空で遠い山のかなたに狐火の燃えるのを望んだことを思出した。氣味の惡い夜鷹が夕方にはよく頭の上を飛び廻つたことを思出した。彼は初めて入學した村の小學校で狐がついたといふ生徒の一人を見たことを思出した……

學士が窓のところへ來た。

『廣岡先生の御國はどちらなんですか。』と高瀨が聞いた。

『越後。』

と學士は答へた。

晝過に高瀨が塾を出ようとすると、急に門の外で、

『斯の野郎打殺して呉れるぞ。』

と呼ぶ聲が起つた。音吉の弟は人をめがけて大きな石を振揚げて居る。

『あれで、冗談ですせ。』

と學士もそこへ來て言つて、高瀨に笑つて見せた。

荒い人達のすることは高瀨を呆れさせた。しかしその野蠻な戯れは都會の退屈な饒舌にも勝つて彼を悦ばせた。彼はしばらく斯の地方に足を留め、心易い先生

方の中で働いて、もつと〳〵素朴な百姓の生活をよく知りたいと言つた。谷の向ふの谷、山の向ふの山に彼の心は馳せた。

それから二年ばかりの月日が過ぎた。約束の任期が滿ちても高瀨は暇を貰つて歸らうとは言はなかつた。『勉强するには、田舍の方が好い。』そんなことを言つて、反つて彼は腰を落著けた。

更に二年ほど過ぎた。塾では更に教室も建增したし、教員の手も增した。日下部といつて塾のためには忠實な教員も出來たし、洋畫家の泉も一週に一日か二日程づゝは小縣の自宅の方から通つて來て吳れる。さかし以前のやうな賑かな笑ひ聲は次第に減つて行つた。皆な默つて働くやうに成つた。

教員室は以前の幹事室兼帶でも手狹なので、二階の角にあつた教室をあけて、そつちの方へ引越した。そこに大きな火鉢を置いた。鐵瓶の湯はいつでも沸いて居た。正木大尉は舶來の刻煙草を卷きに來ることもあるが、以前のやうにはあまり話し込まない。幹事室の方に籠つて、暇さへあれば獨りで手習をした。櫻井先生は用にだけ來て、音吉が汲んで出す茶を飲んで、復た隣の自分の室の方へ行つた。受持の時間が濟めば、先生は頭巾のやうな隱士風の帽子を冠つて、最早若樹と言へないほど鬱陶しく枝の込んだ庭の櫻の下を自分の屋敷かさもなければ中棚の別莊の方へ歸つて行つた。

子安も默つて了つた。子安は町の醫者の娘と結婚して、士族屋敷の方に持つた新しいホームから通つて來た。後から仲間入をした日下部——この教員はまた性來默つて居るやうな人だ。

斯の教員室の空氣の中で、廣岡先生は由緒のありさうな古い彫のある銀煙管の音をポン〳〵響かせた。高瀬は癖のやうに肩を動つて、甘さうに煙草を燻して、樓階を降りては生徒を敎へに行つた。

ある日、高瀬は受持の授業を終つて、學士の敎室の側を通つた。學士も日課を濟ましたところであつたが、まだ机の前に立つて何か生徒に說明して居た。机の上には大理石の屑、鹽酸の壜、コップなどが置いてあつた。蠟燭の火も燃えて居た。學士は手にしたコップをすこし傾げて見せた。炭素がその玻璃板の間から流れると、蠟燭の火は水を注ぎ掛けられたやうに消えた。

高瀬は戸口に立つて眺めて居た。

無邪氣な學生等は學士の机の周圍に集つて、口を開くやら眼を圓くするやらした。學士がそのコップの中へ鳥か鼠を入れると直ぐに死ぬといふ話をすると、そ

れを聞いた生徒の一人がすつくと起立つた。

『先生蟲ぢやいけませんか。』

『えゝ、蟲は鳥などのやうに酸素を欲しがりませんからナ。』

問を掛けた生徒は、つと敎室を離れて、窓の外の桃の樹の側に姿を顯した。

『ア、蟲を取りに行つた。』

と窓の方を見る生徒もある。庭に出た青年は櫻の枝の蔭を尋ね廻つて居たが、間もなく戻つて來て、捕へたものを學士に勸めた。

『蜂ですか。』と學士は氣味惡さうに言つた。

『怒つてる——螫すぞ〳〵。』

と口々に言ひ騷いで居る生徒の前で、學士は身を反らして、螫されまいとする樣子をした。蜂はコップの中へ押し入れられた。それを見た生徒等は意味もなく笑

つた。『死んだ、死んだ、』と言ふものもあれば、『弱い奴』と言ふものも有つた。蜂は眞理を證するかのやうに、コップの中でグル〳〵廻つて、身を悶えて、死んだ。

『最早マイりましたかネ。』と學士も笑つた。

間もなく學士は高瀨と一緒に成つた。二人が教員室の方へ戻つて行つた時は、誰もそこに殘つて居なかつた。櫻井先生の室の戸も閉つて居た。

正木大尉も歸つた後だつた。學士は幹事室に預けてある自分の弓を取りに行つて、復た高瀨の側へ來た。

『奈何です、弓は。是節はあまり御彎きに成りませんネ。』

誘ふやうに言ふ學士と連立つて、高瀨はやがて校舍の前の石段を降りた。

生徒も大抵歸つて行つた。音吉が獨り殘つて教室々々を掃除する音は餘計に周

圍をヒツソリとさせた。音吉の妻は子供を背負ひながら夫の手傳ひに來て、門に近い教室の内で働いて居た。

學士は親しげな調子で高瀨に話した。

『音さんの細君はもと正木先生の許に奉公して居たんですッてネ。音さんが先生の家の畠を造りに行くうちに、畢竟出來たんでせう……先生があの二人を夫婦にしてやつたんでせうネ。』

二人が塵拂の音のする窓の外を通つた時は、岩間に咲く木瓜のやうに紅い女の顏が玻璃の内から映つて居た。

新緑の頃のことで、塾のアカシヤの葉は日にチニ〳〵する。藪のやうに茂り重なつた細い枝は見上るほど高く延びた。

高瀬と學士とは懷古園の方へ並んで歩いて行つた。學士は弓を入れた袋や、弓掛、松脂の類を入れた鞄を提げた。古い城址の周圍だけに、二人が添うて行く石垣の上の桑畠も往昔は嚴しい屋敷のあつたといふ跡だ。鐵道のために種々に變へられた、砂や石の盛り上つた地勢が二人の眼にあつた。

馬に乘つた醫者が二人に挨拶して通つた。土地に殘つた舊士族の一人だ。

學士は見送つて、『あの先生も鷄に、馬に、小鳥に、朝顏——何でもやる人です。菊の頃には菊を作るし。よく何處の田舍にも彼樣いふ御醫者が一人位はあるもんです。「……なアに、他の奴等は、ありや醫者ぢやねえ、藥賣だ、……とても、話せない……」なんて、エライ氣焰だ。でも面白い氣象の人で、近在へでも行くと、藥代が無けりや畠の物でも何でも可いや、葱が出來たら提げて來い位に言ふものですから、百姓仲間には受が好い。奇人ですネ。』

左樣いふ學士も維新の戰爭に出た經歷のある人で、十九歲で初陣をした話がよく出る。塾では、正木大尉はもとより、櫻井先生も舊幕の旗下の一人だ。

懷古園とした大きな額の掛つた城門を入つて、二人は青葉に埋れた石垣の間へ出た。その邊は晝休みの時間などに塾の生徒のよく遊びに來るところだ。高く築き上げられた、大きな黑ずんだ石の側面はそれに附著した古苔と共に二人の右にも左にもあつた。

舊足輕の一人が水を擔いで二人の側を會釋して通つた。

矢場は正木大尉や櫻井先生などが發起で、天主臺の下に小屋を造つて、楓、櫟などの綠に隱れた、極く靜かな位置にあつた。丁度そこで二人は大尉と體操の教師とに逢つた。まだ他に顏觸も一人二人見えた。一時は塾の連中が擧つてそこへ

集つたことも有つたが、次第に子安の足も遠くなり、櫻井先生もあまり顔を見せない。高瀨が園内の茶屋に預けてある弓の道具を取りに行つて來て學士に交際ふといふは彼としてはめづらしい位だ。

『そも〳〵大弓を始めてから明日で一年に成ります。』と仲間うちでは遲く始めた體操の教師が言つた。

『一年の御稽古でも、しばらく休んで居ると、まるで當らない――なんだか冗談のやうですナ。』强弓をひく方の大尉も笑つた。

何となく寂びれて來た矢場の中には、古城に滿ち溢した荒廢の氣と、鳴を潜めたやうな松林の靜かさとに加へて、そこにも一種の沈默が支配して居た。皮の剝げたほど古い欅の若葉を通して、淺間一帶の大きな傾斜が五月の空に横はるのも見えた。矢場の後にある桑畠の方からはサクを切る百姓の鍬の音も聞えて來た。

そこは灌木の藪の多い谷を隔てゝ、大尉の住居にも近い。

學士は一番弱い弓をひいたが、熱心でよく當るやうに成つた。的も自分で張つたのを持つて來て、掛け替へに行つた。

『こりや驚いた。尺二ですぜ。しつかり御頼申しますぜ。』と大尉は新規な的の方を見て矢を番つた。

『ポツン。』と體操の教師は混返すやうに。

『左樣はいかない。』

大尉は弓返りの音をさせて、神經的に笑つて、復た沈鬱な無言に返つた。

桑畠に働いて居た百姓もそろ〳〵歸りかける頃迄、高瀨は皆なと一緒に時を送つた。學士はそこに好い隱れ家を見つけたといふ風で、愛藏する鷹の羽の矢が白い的の方へ走る間、一切のことを忘れて居るやうであつた。

大尉等を園内に殘して置いて、學士と高瀨の二人は復た元來た道を城門の方へとつた。

途中で學士は思出したやうに、

『……私共の勇のやつが、あれで子供仲間ぢやナカ〳〵相撲が取れるんですとサ。此頃もネ、弓の弦を褒美に貰つて來ましたがネ、相撲の方の名が可笑しいんですよ。何だつて聞きましたら――岡の鹿。』

トボケて學士は舌を出して見せた。高瀨も子供のやうに笑出した。

『兄のやつも名前が有るんですよ。貴樣は何とつけたと聞きましたら、父さんが弓が御好きだから、よく當るやうに、矢當りとつけましたとサ。矢當りサ。子供といふものは眞實に可笑しなものですネ。』

斯ういふ話を高瀨に聞かせながら歸つて行くと、丁度城門のあたりで、學士は

弓の仲間に行き逢つた。舊士族の一人だ。斯の人は千曲川の谷の方から網を提げてスゴ〳〵と戻つて來るところだつた。

『此節は弓も御廢しでサ。』

とその人は元氣な調子で言つて、更に語を繼いで、

『もう私は士族は駄目だといふ論だ。小諸ですこし骨ッ柱のある奴は塾の正木ぐらゐなものだ。』

學士と高瀨はしばらくその人の前に立つた。

『御覽なさい、御城の周圍にはいよ〳〵滅亡の時期がやつて來ましたよ……これで二三年前までは、川へ行つて見ても鮎やハヤ(鮠)が捕れたものでサ。いくら居なくなつたと言つても、まだそれでも二三年前までは居ました……此節はもう魚も居ません……この松林などは、へえもう、疾くに人手に渡つて居ます……』

口早に言つてサッサと別れて行く人の姿を見送りながら、復た二人は家を指して歩き出した。實に、學士はユックリ〳〵歩いた。

烏帽子山麓に寄つた方から通つて來る泉が、田中で汽車に乘るか、又は途次寫生をしながら小諸まで歩くかして、一週に一二度づゝ塾へ顏を出す日は、まだそれでも高瀨を相手に話し込んで行く。斯の畫家は歐羅巴を漫遊して歸ると間もなく眺望の好い故郷の山村に畫室を建てたが、引込んで研究ばかりして居られないと言つては、やつて來た。

高瀨は斯の人が來ると、百姓畫家のミレエのことをよく持出した。そして泉から佛蘭西の田舍の話を聞くのを樂みにした。高瀨は泉が持つて居る種々なミレエ

の評傳を借りて讀み、時にはその一節を泉に譯して聞かせた。

『君は山田君が譯したトルストイの「コサックス」を讀んだことがあるか。コウカサスの方へ入つて行く露西亞の青年が寫してあるネ。結局、百姓は百姓、自分等は自分等といふやうな主人公の嘆息であの本は終つてるが、吾儕にも矢張彼樣いふ氣分のすることがあるよ。僕などはこれで隨分百姓は好きな方だ。生徒の家へ行つて泊まつて見たり……人に話し掛けて見たり……まあいろんな機會を見つけて、音さんの家の蒟蒻の煮附まであそこの隱居やなんかと一緒に食つて見た……どうしてもまだ百姓の心には入れないやうな氣がする。』

斯う高瀨は泉に話すこともあつた。

相變らず皆な默つて働いて居る塾の方から、高瀨は家へ歸らうとして、午後の砂まじりの道を歩いた。停車場前へ出た。往來の兩側には名物うんどん、牛肉、

馬肉の旗、それから善光寺詣の講中のビラなどが若葉の頃の風に嬲られて居た。ふと、その汽車の時間表と、ビイルや酒の廣告と、食物をつくる煙などのゴチャゴチャした中に、高瀬は學士の笑顔を見つけた。

學士は『ウン、高瀬君か』といふ顔付で、一店頭の土間に居る稼ぎ人らしい内儀さんの側へ行つた。

『お内儀さん、今日は何か有りますかネ。』

と尋ねて、一寸そこへ來て立つた高瀬と一緒に汽車を待つ客の側に腰掛けた。

極く服裝に關はない學士も、その日はめづらしく瀟洒なネクタイを古洋服の胸のあたりに見せて居た。そして高瀬を相手に機嫌よく話した。どうかすると學士の口からは輕い佛蘭西語などが流れて來た。

『そこはあまり端近です。まあ奥の方へ御通りなすつて——』

と亭主に言はれて、學士は四邊を見廻はした。表口へ來て馬を繋ぐ近在の百姓もあつた。知らない旅客、荷を負つた商人、草鞋掛に紋附羽織を著た男などが此方を覗き込んでは日のあたつた往來を通り過ぎた。

『廣岡先生が上田から御通ひなすつた時分から見やすと、御陰で吾家でもいくらか廣くいたしやした。』

斯う内儀さんも働きながら言つた。

そのうちに學士の誂へた銚子がついて來た。建增した奥の方の部屋に小さなチヤブ臺を控へて、高瀬は學士とさしむかひに坐つて見た。一口やるだけの物がそこへ並んだ。

學士は斯の家の子のことなどを親達に尋ねながら、手酌で始めた。

『高瀬君、まあ話して行つて下さいナ。こゝは心易い家でしてネ、それにお内儀

さんがあの通り如才ないでせう、つい前を通ると斯樣ことに成つちまうんです。』

『私も小諸へ來ましてから、いくらかお酒が飲めるやうに成りました。』

『でせう。一體に斯の邊の人は强酒です。どうしても寒い國の故でせうネ。これで塾では誰が强いか。正木さんも强いナ。』

高瀨は酒が欲しくないと言つて唯話相手に成つて居た。彼は學校通ひの洋服のポケットから田舍風な皮の提げ煙草入を取出した。都會の方から來た頃から見ると、髮なども長く延ばし、憂鬱な眼付をして、好きな煙草を燻し〳〵學士の話に耳を傾けた。

『どうでせう、高瀨君、今度塾へ御願ひしました倅の奴は。あれで弟と違つて、性質は溫順な方なんですがネ。彼は小學校に居る時代から圖畫が得意でして、その方では何時でも甲を貰つて來ましたよ。私が倅に、お前は何に成るつもりだッて聞きましたら、僕は大きく成つたら、泉先生のやうに成るんだなんて……あれで物に成りませうか……』

學士はチビリ〳〵やりながら、言葉を繼いだ。

『妙なもので、家內はまた莫迦に弟の方を可愛がるんです。弟の言ふことなら何でも聞く。私がそれぢや不可と言ふと、そこで何時でも言合でサ……家內が、父さんは繁の贔負ばかりして居る、一體父さんは甘いから不可、だから皆な言ふことを聞かなくなつちまうんだ、なんて……兄の方は弱いでせう、つい私は弱い方の肩を持つ……』

學士は頬と言はず額と言はず顏中手拭で拭き廻した。

『云かし、高瀨君、どうして斯樣なに御懇意にするやうに成つたかと思ふやうですネ……貴方のところでも、今、お子さんはお二人か……實際、子供は骨が折れ

ますよ。お二人位の時はまだそれでも宜う御座んす。私共を御覧なさい、あの通りウヂャ〳〵居るんですからネ……加に、大飯食ひばかり揃つて居て。』と言ひかけて、學士は思ひ出したやうに笑つて、『まさか、子供に向つて、そんなに食ふな、三杯位にして控へて置けなんて、親の身としては言へませんからナ……』

包み隱しの無い話は高瀨を笑はせた。學士は更に、

『ホラ、勇の下に女の兒が居ませう。上田で生れた兒です……眞實に親の言ふことなどは聞かない……苦しい時代に出來た兒は彼樣いふものかと思ひますネ……ウヂャリ放しに育つた兒ですからネ……子などに關つては居られなかつたんです……玄かし、考へて見ると、私の家内もよくやつて來ましたよ。貧苦に堪へる力は家内の方が反つて私より强い……』

しばらく石のやうな沈默が續いた。そのうちに微かに醉が學士の顏に上つた。

學者らしい長い眉だけホンノリと紅い顏の中に際立つて斑白に見えるやうに成つた。學士は樂しさうに兩手や身體を動かして、胡坐にやつたり、坐り直したりしながら、高瀨の方を見た。そして話の調子を變へて、

『左樣言へば、佛蘭西の言葉といふものは妙なところに洒落を含んでますネ。』と言つて、二三の連がつた言葉を巧みに發音して聞かせた。

『私も一つ、先生のお弟子入をしませうかネ。』と高瀨が言つた。

『え、すこし御遣りなさらないか。』

『今私が讀んでる小說の中などには、時々佛蘭西語が出て來て困ります。』

『ほんとに、御一緒に一つ遣らうぢやありませんか。』

佛蘭西語の話をする時ほど、學士の眼は華やかに輝くことはなかつた。

やがて高瀨は斯の家に學士を獨り殘して置いて、相生町の通りへ出た。彼が自

分の家まで歩いて行く間には、幾人となく田舍風な挨拶をする人に行き逢つた。長い鬚を生した人はそこにもこゝにも居た。

休みの日が來た。

高瀨が馬場裏の家を借りて居ることは、最早假の住居とも言へないほど長くなつた。彼は自分のものとして自由にその日を送らうとした。

南の障子へ行つて見た。濡縁の外は落葉松の垣だ。風雪の爲に、垣も大分破損んだ。毎年聞える寂しい蛙の聲が復た水車小屋の方からその障子のところへ傳はつて來た。

北の縁側へ出て見た。腐りかけた草屋根の軒に近く、毎年蟲に食はれて弱つて

行く林檎の幹が高瀨の眼に映つた。短い不恰好な枝は、その年も若葉を著けた。微かな甘い香がプンと彼の鼻へ來た。彼は縁側に凭れて、五月の日のあたつた林檎の花や葉を見て居たが、妻のお島がそこへ來て何氣なく立つた時は、彼は半病人のやうな、逆上せた眼付をして居た。

『なんだか、俺は——氣でも狂ひさうだ。』

と串談らしく高瀨が言ふと、お島は縁側から空を眺めて、

『髮でも刈つて被入つしたら。』

と輕い返事をした。

急に大きな蜜蜂がブーンといふ羽の音をさせて、部屋の中へ舞ひ込んで來た。お島は急いで晝寢をして居る子供の方へ行つた。庭の方から入つて來た蜂は表の方へ通り抜けた。

『鞠ちやんは奈何したらう。』と高瀬が斯の家で生れた姉娘のことを聞いた。

『屋外で遊んでます。』

『また大工さんの家の娘と遊んでゐるぢやないか。彼の娘は實に驚いちやたつあんな荒い子供と遊ばせちや困るナア。』

『私も左樣思ふんですけれど、泣かせられるくせに遊びたがる。』

『今度誘ひに來たら、斷つちまへ。——吾家へ入れないやうにしろ——眞實に、串談ぢや無いぜ。』

夫婦は互に子供のことを心配して話した。

血氣壯んなものには靜止して居られないやうな陽氣だつた。高瀬はしばらく士族地への訪問も怠つて居た。去かし其日は塾の同僚を訪ふよりも、足の向くまゝに、好きな田圃道を歩き廻らうとした。午後に、彼は家を出た。

岩と岩の間を流れ落ちる谷川は到るところにあつた。何度歩いても飽きない道を通つて、赤坂裏へ出ると、青麥の畠が彼の眼に展けた。五度熟した麥の穗は復た白く光つた。土塀、白壁の並び續いた荒町の裏を畠づたひに歩いて、やがて小諸の町はづれにあたる與良町の裏側へ出た。非常に大きな石が畠の間に埋まつて居た。その邊で、彼は野良仕事をした居る町の青年の一人に逢つた。

最早青年とも言へなかつた。若い細君を迎へて寵を持つた人だ。しばらく高瀬は畠側の石に腰掛けて、その知人の畠を打つのを見て居た。

その人は身を斜めにし、うんと腰に力を入れて、土の塊を堀起しながら話した。風が來て青麥を渡るのと、谷川の音と、その間には蛙の鳴聲も混つて、どうかすると二人の話はとぎれ〳〵に通ずる。

『櫻井先生や、廣岡先生には、せめて御住宅ぐらゐを造つて上げたいのが、私共

の希望なんですけれど……町のために御苦勞願つて……』

とその人は畠に居て言つた。

別れを告げて、高瀬が戻りかける頃には、壯んな蛙の聲が起つた。大きな深い千曲川の谷間はその鳴聲で滿ち溢れて來た。飛彈境の方にある日本アルプスの連山にはまだ遠く白雪を望んだが、高瀬は一つ場處に長く立つてその眺望を樂まうともしなかつた。不思議な寂寞は蛙の鳴く谷底の方から匍ひ上つて來た。恐しく成つて、逃げるやうに高瀬は妻子の方へ引返して行つた。

『父さん。』

と呼ぶ子供を見つけて、高瀬は自分の家の前の垣根のあたりで鞠子と一緒に成つ

た。

『鞠ちやん、吾家へ行かう。』

と慰撫めるやうに言ひながら、高瀬は子供を連れて入口の庭へ入つた。そこには畠をする鍬などが隅の方に置いてある。お島は上り框のところに腰掛けて、二番目の女の兒に乳を呑ませて居た。

『鞠ちやんは、先刻姉や(下婢)と一緒に懷古園へ遊びに行つて來ました。』

とお島は夫に話して、復た乳呑兒の顏を眺めた。その兒は乳房を押へて飲むほどに成身して居た。

『俺にもお呉れやれ。』と鞠子は母が口をモガ〳〵させるのに目をつけた。

『オンになんて言つちや不可の。ね。私に頂戴ッて。』

お島はなぐさみに鰐を嚙んで居た。乳呑兒の乳を放させ、姉娘に言つて聞かせ

て、爐邊の戸棚の方へ立つて行つた。

『さあ、パン上げるから、お出。』と彼女は娘を呼んだ。

『うゝん、鞠ちやんパンいや――鰯』

と鞠子は首を振つたが、間もなく母の傍へ行つて、親子でパンを食つた。

『鞠ちやんに呉れる〳〵ッて言つて、皆な母ちやんが食つて了ふ。』と鞠子は甘えた。

斯の光景を笑つて眺めて居た高瀬は自分の方へ來た鞠子に言つた。

『これ、惡戯しやち不可よ。』

『馬鹿、やい。』と鞠子はあべこべに父を嘲つた。――これが極く尋常なやうな調子で。

高瀬は歎息して奥へ行つた。お島が茶を入れて夫の側へ來た時は、彼は獨り勉

強部屋に坐つて居た――何事もせずに唯、坐つて居た。

『なんだか俺は心細く成つて來た。仕方が無いから、斯うして坐つて見てるんだ。』

と高瀬は妻に話した。

その日の夕方のことであつた、南の戸袋を打つ小石の音がした。誰か屋外から投げ込んでよこした。

『誰だ。』

と高瀬は障子のところへ走つて行つて、濡縁の外へ出て見た。

『人の家へ石など放り込みやがつて――誰だ――惡戯も好い加減にしろ――眞實に――』

忌々しさうに言ひながら、落葉松の垣から屋外を覗いた。惡戯盛りの近所の小娘が、親でも泣かせさうな激しい眼付をして――そのくせ、飛んだ器量好しだが

――横手の土塀の方へ隱れて行つた。

『どうして斯の邊の娘は、斯う荒いんだらう。男だか女だか解りやしない。』

斯う高瀨は濡縁のところから、垣根越しに屋外に立つて居るお島に言つた。

『大工さんの家の娘とはもう遊ばせないッて、先刻誘ひに來た時に斷りましたら、今度は鞠ちやんの方から出掛けて行きました……必と喧嘩でもしたんでせう……石などを放つて……女中でも子守でも斯の邊の女は、そりや氣が荒いんですよ……。』

お島は奈何することも出來ないやうな調子で言つて、夕方の空を眺めながら立つて居た。暮色が迫つて來た。

『鞠ちやん、吾家へお入り。』と彼女はそこいらに出て遊んで居る子供を呼んだ。

『オバケ來るから、サ吾家にお出。』と井戸の方から水を汲んで來た下女も言葉を

掛けて通つた。

山家の娘らしく成つて行く鞠子は、とは言へ親達を泣かせるばかりでも無かつた。夕飯後に、鞠子は人形を抱いて來て親達に見せた。そして、『お一つ、笑つて御覽。』などと言つて、その人形をアヤして見せた。

『かアさん、かさん――やくらか、やくや――ほうちさ、やくやくう――おんこしやこ――もこしやこ――』

何處で敎はるともなく、鞠子は斯樣なことを覺えて來て、眠る前に家中踊つて歩いた。

五月の町裏らしい夜は次第に更けて行つた。お島の許へ手習に通つて來る近所の娘達も、提灯つけて歸つて行つた。四邊には早く戸を閉めて寢る家も多い。沈まり返つた屋外の方で、高瀨の家のものは誰の聲とは一寸見當のつかない呼聲を

聞きつけた。

『高瀬君――』

『高瀬、居るか――』

聲は垣根の外まで近づいて來た。

『ア。』

と高瀬は聞耳を立てゝ、そこにマゴ〳〵して震へて居る妻の方へ行つた。お島が庭口へ下りて戸を開けた時は、廣岡學士と體操教師の二人が暗い屋外から舞ひ込むやうに入つて來た。

高瀬は洋燈を上り端のところへ運んだ。馬場裏を一つ驚かして吳れようと言つたやうな學士等の紅い磊落な顔がその灯に映つた。二人とも脚絆に草鞋掛といふ服裝だ。

『これ、水でも進げナ。』

と高瀬が妻に吩附けた。

お島はやゝ安心して、勝手口の方から水を持つて來た。學士は身體の置き處も無いほど醉つて居たが、でも平素の心を失ふまいとする風で、朦朧とした眼を瞪つて、そこに居る夫婦の顔や、洋燈に映るコップの水などをよく見やうとした。

學士のコップを取らうとする手は震へた。お島はそれを學士の方へ押しすゝめた。

『どうも失禮……今日は二人で山遊びに出掛けて……酩酊……奥さん、申譯がありません……』

學士は上り框のところへ手をついて、正直な、心の好さゝうな調子で、詫びるやうに言つた。

體操の教師は磊落に笑出した。學士の肩へ手を掛けて、助けて行かうといふ心づかひを見せたが、その人も大分上機嫌で居た。

よろ〳〵した足許で、復た二人は舞ふやうに出て行つた。高瀬は屋外まで洋燈を持出して、暗い道を照らして見せたが、やがて家の中へ入つて見ると、餘計にシーンとした夜の寂寥が殘つた。

何となく荒れて行くやうな屋根の下で、其晩遲く高瀬は枕に就いた。時々眼を開いて見ると、部屋の中まで入つて來る饑ゑた鼠の朦朧と、しかも黑い影が枕頭に隱れたり顯れたりする。時には、自分の身體にまで上つて來るやうな物凄い恐怖に襲はれて、眼が覺めることが有つた。深夜に、高瀬は妻を呼起して、二人で臺所をゴト〳〵言はせて、捕鼠器を仕掛けた。

その年の夏から秋へかけて、塾に取つては種々な不慮の出來事があつた。廣岡學士は荒町裏の家で三月あまりも大患ひをした。誰が見ても助かるまいと言つた學士が危く一命を取留めた頃には、今度は正木大尉が倒れた。大尉は奥さんの手に子供衆を遺し、仕掛けた塾の仕事も半途で亡くなつた。大尉の亡骸は士族地の墓地に葬られた。子供衆に遺して行つた多〳〵の和漢の書籍は、親戚の立會の上で、後仕末のために糴賣に附せられた。

櫻井先生の長い立派な鬚は目立つて白くなつた。毎日、高瀬は塾の方で、深い雪の積つて行くやうな先生の鬚を眺めては、また家へ歸つて來た。生命拾ひをした廣岡學士がよく〳〵酒に懲りて、夏中奥さん任せにしてあつた朝顔棚の鉢を片附け、種の仕分をする時分に成ると、高瀬の家の屋根へも、裏の畠へも、最早激

しい霜が來た。風も來た。土も、岩も、人の皮膚の色までも、灰色に見えて來た。日光そのものまで灰色に見える日があつた。そのうちに思ひがけない程の大雪がやつて來た、戸を埋めた。北側の屋根には二尺ほども消えない雪が殘つた。鷄の聲まで遠く聞えて、何となくすべてが引被らせられたやうに成つた。灰色の空を通じて日が南の障子へ來ると、雪は光を含んでギラ〳〵輝く。軒から垂れる雫の音は、日がな一日單調な、佗しい響を傳へて來た。

冬籠りする高瀬は火鉢にかじりつき、お島は炬燵へ行つて、そこで凍える子供の手足を暖めさせた。家の外に溶けた雪が復た積り、顯はれた土が復た隱れ、日の光も遠く薄〻射すやうに成れば、二人は子供等と一緒に半ば凍りつめた世界に居た。雲ともつかぬ水蒸氣の群は細線の群合のごとく寒い空に懸つた。劒のやうに北側の軒から垂下る長い光つた氷柱を眺めて、漸の思で夫婦は復た年を越した。

更に寒い日が來た。北側の屋根や庭に降つた雪は凍つて、連日溶くべき氣色もない。氷柱は二尺、三尺に及ぶ。お島が爐邊へ行つて子供に牛乳を呉れやうとすると、時にはそれが淡い綠色に凍つて、子供に飲ませることも出來ない。臺處の流許に流れる水は皆な凍りついた。貯へた野菜までも多く凍つた。水汲に行く下女なぞは頭巾を冠り、手袋をはめ、寒さうに手桶を提げて出て行くが、それが歸つて來て見ると、手の皮膚は裂けて、ところ〴〵紅い血が流れた。斯うなると、お島は外聞なぞは關つて居られなく成つた。どうかして子供を凍えさせまいとした。部屋々々の柱が凍み割れる音を聞きながら高瀬が讀書でもする晩には、寒さが彼の骨までも滲み徹つた。お島はその側で、肌にあて〻、子供を暖めた。

斯の長い〳〵寒い季節を縮こまつて、あだかも土の中同樣に住み暮すといふことは、一冬でも容易でなかつた。高瀬は妻と共に春を待ち佗びた。

絶頂に達した山の上の寒もいくらかゆるんで來た頃には、高瀬も漸く蟲のやうな眠から甞出して、復た周圍を見廻すやうになつた。その年の寒さには、塾でも生徒の中に一人の落伍者を出した。

遽かに復活るやうた暖い雨の降る日、泉は亡くなつた青年の死を弔はうとして、わざ〳〵小縣の方から汽車でやつて來た。その青年は、高瀬も四年手掛けた生徒だ。泉と連立つて、高瀬はその生徒の家の方へ歩いて行つた。

赤坂といふ坂の町を下りやうとする途中で、廣岡學士も一緒に成つた。

『なにしろ、十年來の寒さだつた。我輩なぞはよく凍え死なゝかつたやうなものだ。若い者だつて斯の寒さぢや堪りませんナ。』

と學士は言つて、汚れた雪の上に降りそゝぐ雨を眺め〳〵歩いた。

漸く顯れかけた暗い土、黄ばんだ竹の林、まだ枯々とした柿、李、其他三人の

眼にある木立の幹も枝も皆な雨に濡れて、黑々と穢い寢恍顔をして居ない者は無かつた。

大きな洋傘をさしかけて、坂の下の方から話し〳〵やつて來たのは、子安、日下部の二人だつた。塾の仲間は雨の中で一緒に成つた。

有望な塾の生徒を、しかも十八歳で失つたといふことは、そこへ皆なの心を集めた。暮に兄の仕立屋へ障子張の手傳ひに出掛け、それから急に床に就き、熱は肺から心臓に及び、三人の醫者が立會で心臓の水を取つた時は四合も出た。四十日ほど病んで死んだ。斯う學士が立話をすると、土地から出て植物學を專攻した日下部は亡くなつた生徒の幼少い時のことなどを知つて居て、十歳の頃から病身な母親の世話をして、朝は自分で飯を炊き母の髪まで結つて置いて、それから小學校へ行つた……病中も、母親の見えるところに自分の床を敷かせてあつた、と

話した。

式は生徒の自宅であつた。そこには櫻井先生を始め、先生の奥さんも見えた。正木未亡人も部屋の片隅に坐つて、頭を垂れて居た。塾の同窓の生徒は狹い庭に傘をさしかけ、縁側に腰掛けなどして居た。

亡くなつた青年が耶蘇信者であつたといふことを、高瀨はその日初めて知つた。黑い布を掛け、青い十字架をつけ、牡丹の造花を載せた棺の側には、櫻井先生が司會者として立つて居た。讃美歌が信徒側の人々によつて歌はれた。正木未亡人は宗教に心を寄せるやうに成つて、先生の奥さんと一緒に讃美歌の本を開けて居た。先生は哥林多後書の第五章の一節を讀んだ。亡くなつた生徒の爲に先生が弔ひの言葉を述べた時は、年をとつた母親が聖書を手にして泣いた。

士族地の墓地まで、しと〳〵降る雨の中を高瀨は他の同僚と一緒に見送りに行つた。松の多い靜かな小山の上に遺骸が埋められた。墓地では讃美歌が歌はれた。そこの石塔の側、こゝの松の下には、同級生などが佇立んで、斯の光景を眺めて居た。

ある日、薄い色の洋傘を手にしたやうな都會風の婦人が馬場裏の高瀨の家を訪ねて來た。この流行の風俗をした婦人は東京から來たお島の友達だつた。最早山の上でもすつかり雪が溶けて、春らしい温暖な日の光が青い苔の生えた草屋根や、毎年大根を掛けて干す土壁のところに映つて居た。

丁度、お島は手拭で髮を包んで、入口の庭の日あたりの好いところで餘念なく張物をして居た。彼女の友達がそこへ來た時は、『これがお島さんか』といふ顏付

をして、暫く彼女を眺めたまゝで立つて居た。

お島は急いで張物板を片附け、冠つて居た手拭を取つて、六年ばかりも逢へなかつた舊の友達を迎へた。

『まあ、岡本さん――』

とその友達は、お島がまだ娘で居た頃の姓を可懷しさうに呼んだ。

一汽車待つ間、話して、お島の友達は長野の方へ乘つて行つた。その日は日曜だつた。高瀬は淺黄の股引に、尻端を折り、腰には手拭をぶらさげ、憂鬱な顏の中に眼ばかり光らせて、他から歸つて來た。お島は勝手口の方へ自慢の漬物を出しに行つて來て、爐邊で夫に茶を進めながら、訪ねて呉れた友達の話をして笑つた。

『私が面白い風俗をして張物をして居たもんですから、吃驚したやうな顏してましたよ……』

『そんなに皆な田舍者に成つちやつたかナア。』

と高瀬も笑つて、周圍を見廻した。煤けた壁のところには、歲暮の景物に町の商家で出す暦附の板繪が去年のや其の前の年のまで、子供の眼を悅ばせるために貼附けて置いてある。

『でも、貴方だつて、小諸言葉が知らずに口から出るやうですよ。人と話をして被入つしやるところを側から聞いてますと――「ようごわす」だの――「めたくゝ」だの――』

『お前もナカ〳〵隅へは置けなく成つたよ。』

二人とも鼻へ皺を寄せて笑つた。

『お前のお友達は、それで何て言つたネ。』と高瀬は聞いた。

『旦那さんが今洋行してますから、ちと高瀬さんにも遊びに被入しつて下さいつて。』

『俺にか。旦那さんが居るから遊びに來いッてんなら解つてるが、旦那さんが留守だから遊びに來いは可笑しいぢやないか。』

復た二人は笑つた。

鞠子は大工さんの家の娘にも劣らないほど、いたづらに成つた。北風が來れば、槲の葉が直ぐ鳴るやうな調子で、

『畜生ッ。打つぞ。』

髪を振つて、娘は遊び友達の方へ走つて行つた。

突貫

突貫

……

私は今、ある試みを思ひ立つて居る。もし斯の仕事が思ふやうに捗取つたら、いづれそれを持つて山を下りようと思ふ。けれども斯のことは未だ誰にも言はずにある。

今日まで私は酷だ都合の好いことを考へて居た。自分の目的は目的として置いて、衣食の道は別にするやうな方針を取つて來た。それが自分の目的に一番適つたことだと信じて來た。しかし私は斯の考への間違つて居ることを悟つた。私の教員生活も久しいものだ。斯樣な風にしてずる〳〵に暮して行く月日には全く果しが無い。私は今日までの中途半端な生活を根から覆して、遠からず新規なものを始めたいと思ふ。私は他人に依つて衣食する腰掛の人間でなくて、自ら額に汗する勞働者でなければ成らない。

東京の友人が戰地へ赴く前に寄した別離の手紙は私の心に強い刺戟を與へた。私も一度は從軍記者として出掛けたいといふ希望を起したが、斯ういふ田舍に居てその機會を捉へることは、所詮不可能だとあきらめた。私には私の氣質に適つたことが有る。私は今度の戰爭の中で、自分の思ひ立つた仕事を急がなければ成らない。

私の寫實的傾向が產み出した最初の產物は先づ發賣禁止に成つた。こゝの分署の巡査が町々の書店を廻つてあの雜誌を押收して行つた、その時の光景は忘れることが出來ない。しかし、それらの打擊も、私が斯の狹い噂好きな地方で風俗壞亂の人として見られたといふことも、言はゞ一時的のものに過ぎなかつた。唯、私は人の知らないことで、未だに心を苦めて居ることが有る。あの雜誌が發賣禁止に成ると間もなく、ある日、櫻井先生の奧さんが私に向つて、『――貴方は私共の家のことを御書きに成つたさうぢや有りませんか。』と言つた時は、私はぎよッとした。私は先生の先の奧さんの若い生活のある一部のさまを拜借したことを白狀する前に、あの作物がいかに先生夫婦の心を傷けたかといふことを思つて見た。

『何卒、私の書いたものをよく讀んで見て下さい。』左樣言つて置いて奧さんの前を引退つた。あの心地は今だに續いて居る。私は幾分なりとも物の精髓に觸れやうとして、妙に自分を肩身の狹いものとした。

同じ傾向から殆んど雙生兒のやうにして產み出した作物の中に、私はある線路番人のことを寫した。毎日主人の子供を負つて鐵道の踏切のところを通る下婢のことを書いた。錯々と水を擔いで遠い井戸から主人の家へ通ふ娘のことを書いた。その娘が線路番人に腕力で捩ぢ伏せられて――終には娘の方から番人と夫婦に成りたいといふことを親の許へ言ひ込んで來て、到頭土地にも居られずに主人の家を飛出したといふ話を書いた。私は唯ありふれたことを書いた。娘から見れば、番人の方は阿爺と言つても好い程の年配だ。私はその通り書いた。私は無いものを有るやうに見せる手品師では無い。現に番人がその話を自慢に吹聽したといふ

ではないか。それを聞いた時は工夫の群まで笑つたといふではないか。斯の眞晝中、私達の鼻の先で行はれたことを寫して、どうしてそれで斯う自分の氣が咎めるだらう。

それからしばらくの間、私は成るべくあの鐵道の踏切のところを通らないやうにして居た。塾へ行くにも、小諸の城門の方へ取らないで、別の踏切を通ることにしてた。稀に大手の湯などで彼の番人に逢つて、先方から田舍風に挨拶された時は、私は名のつけやうの無い恐怖を覺えた。最早あの話を讀んだ人も忘れる頃だ。今日は塾へ出やうとして、青葉に埋れた石垣の間を通つて、久し振で城門前の踏切へ出た。並行したレールは初夏の日を受けて磨ぎすましたやうに光つて居た。不圖、その線路の側で、饅頭笠を冠つて居る例の番人に逢つた。私は身を縮めずに其番小屋の側を通れなかつた。

斯樣なことを話したら、人は笑ふだらう。實際私の始めたことは斯ういふ不思議な性質のものだ。

塾へ行くと、毎日のやうに私は櫻井先生と顏を合せた。あの發賣禁止に成つた作物を出してから、どうも私は以前のやうな親しみをもつて先生に話し掛けることが出來ない。先生は相變らず自分の子のやうに私を見て居るし、私の方でも先生をお父さんのやうに思つて居る。それは以前に何の好みもなくて雇はれて來た子安君達とは違ふ。それで居ながら私達の間には妙に奧齒へ物の挾まつたやうなものが出來た。どうかすると私は人並すぐれて背の高い先生の後姿を見て居るうちに、『君は實に怪しからん男だ』といふ先生の聲を聞くやうな氣がする。奧さんと違つて、先生は私に向つて何事も言はない。けれども私はそれを讀むことが出來る。私の始めたことは舊師にまで背くやうな結果を持ち來した。その意味から

言つても、誰か適當な教師を自分の代りに探して置いて、斯の住慣れた土地を去りたいと思ふ。

私が今、どれほど僅かな生活費で自分の家を支へて居るかといふことを打ち明けたら、定めし甥などは驚くだらう。私は今までよりはずつと少い報酬を受けて居るかはりに、受持の時間をも減して貰つて居る。それを自分の仕事に費つて居る。戰爭以來、郡から塾への補助は絶えた。町からの支出される金も餘程削られた。私達は俸給の高に應じてそれ〴〵受ける分を少くした。今日の場合、殊に私達の學校の性質から言つても、斯の乏しさは忍ばなければ成らない。

教員室へ來て見ると、長いテエブルの周圍は戰爭の話で持切つて居る。實際夢

中に成つて居る世間の人の話を聞くと、私達の發狂しないのが不思議な位だ。塾の體操教師は、いづれ自分も遠からず召集を受けるであらうと言つて居た。

教室の方へ降りやうとして、私は二階にある窓の一つへ行つた。長く延びた庭のアカシヤの枝を通して混雜した停車場の光景が見える。日下部君も私の側へ來て、一所に窓の外を眺めて、

『此節は毎日のやうに兵士が通りますネ。』

と言つた。斯の植物の教師の學者らしい靜かな容子を見るほど、私を安心させるものは無い。

午後の講義を始める頃、停車場の方で起る物凄い叫び聲は私達の教室へ響けて來た。朦々とした汽車の煙は柵を越して硝子窓の外までやつて來て、一時教室の内を薄暗くした。生徒も心を沈著けて碌々勉强することが出來ないといふ風だ。

でも此節はいくらか慣れて、斯の混雑の中で、講義を續けることが出來る。

塾から家の方へ歸つて行くと、馬場裏の町には近所の人達が細い流のところに集つて居て、そこでも戰爭の噂が絶えない。本町の方からは號外賣が鈴を振鳴して息を切つて駈出して來る。あの鈴の音は私の耳に著いて了つた。

塾を卒業した生徒の一人が私の家の門口へ別離を告げに來た。近在の村の青年だ。紋附の羽織に脚絆掛、草鞋穿といふ服裝でやつて來て、三月ばかりもしたら出征の兵士の仲間に加はるであらうといふ。私は落葉松の垣の外へ出て、明日入營するといふ青年の後姿を見送つた。

隣の小母さんの家と私の家の間に竹の木戸が出來てから、よく小母さんは裏づ

たひに柿の樹の下から桑畠を廻つてお島のところへ話しに來る。小母さんの立話を聞けば、川上といふ邊鄙な村の方で、ある若い百姓が結婚したばかりに出征することゝ成つた。お嫁さんは野邊山が原まで夫を見送りに隨いて來て、泣いて別離を惜んだ。若い二人は人目も恥ぢずに手を取つて泣いた。それを見て人々は笑つた。南佐久の奥の方の話だ。小母さんはいそがしい手間で、門口に張物をして居るお島に田舍らしい話をして聞かせた、復た土壁づたひにいそ〳〵と隣の勝手口の方へ戻つて行つた。

しばらく私の裏の野菜畠の手入もしない。塾の音さんが時々見廻りに來て呉れるのに任せてある。自分の鍬は入口の庭の隅に立て掛けたまゝだ。畠も荒れた。しかし私は今、それを顧る暇が無い。

暗い煤けた部屋の天井の下に、私は眠り難いやうな心地で一夜を送つて、長いこと床の上に洋燈の火を見つめたが、今朝に成つて眼が覺めて見ると、夜明けがたの夢が未だ私の頭腦の内部に働いて居る。水車小屋を隔てゝ相生町の通の方には、ザワ〳〵ザワ〳〵人の通る足音を聞く。お島が屋外から子供を抱いて戻つて來て今日は斯の町からも召集されて行く人のあることを私に告げた。

停車場の方ではめづらしく喇叭の音が起つた。私は靜かな北向の障子に對つて、紙を展げて見た。私が寫さうと思つて居る千曲川の川上から川下までのことが一息に私の胸に浮んで來た。私は小諸の町裏にある田圃側に身を置いて居るやうな氣がする。そこで、青麥の穗と擦れる音や、サクを切る百姓の鍬の音や、傾斜の石の間に落ちる温んだ水の音や、その細い谷川の水に混つて砂の流れる音までも

聞くやうな氣がする。百姓が居る。働き疲れて草の上にあふむきに倒れて居る。若い細君らしい人が居る。畠の中で肥つた胸のあたりをあらはして、子供に乳を吸はして居る。草を負つて通る年をとつた女もある……

私は又、遠い烏帽子が嶽の麓にある牧場に身を置いて居るやうな氣もする。牧夫が居る。牛の群が見える。私の側には一緒に根津村から出掛けて行つた畫家の泉君が居る。赤く咲いた山躑躅の花は私の眼にある……

凄まじい叫び聲が起つた。私はそれを停車場の方で聞くのか、自分の頭腦の内部で聞くのか解らないやうな氣がして來た。

夏休も近づいた。私は自分の仕事のためにいろ〳〵心配しなければ成らないこ

とがある。多分函館の阿爺に話したら、私の願ひは聞いて貰へるだらう。けれども手紙でも駄目だ。その相談のためには、どうしても自分で出掛けなければ成らない。

津輕海峽を越さう。それより外に私は現在の沈滯した生活を突き破る方法が無い。

いよ〳〵函館へ向けて小諸を發つ。斯の旅の危險であるか奈何かは、東京まで行つて見た模樣でなければ解らない。兎に角、小諸を發つことにする。

東京へ著いた。カアキイ色の軍服は初めて私の眼に映つた。神田の宿へ來て見ると、戰爭の芝居の噂などがされて居る。大陸の方で砲火を交へて居る最中に、それが直に芝居に仕組まれて舞臺に上るといふことは、妙に私の旅情をそゝつた。

青森から先の航海が絶えて居るや否やは東京の旅舍でも解らない。兄も久し振で逢ひに來て、氣を著けて行けと言つて呉れた。定期船は出るらしい。今度の旅には初めて函館を見て、親戚の人達に逢ふといふ樂みがある。私は行けるところまで行つて見る。

青森へ著いた。信州の方へ度々手紙を寄した未知の若い友は、その人の友達と二人で旅舍に私を待つて居て呉れた。

青い深い海が斯の旅舎の二階から見える。『ごめ』が窓の外に飛んで居る。港内に碇泊する帆船の帆柱が見える。時刻さへ來れば、私は函館行の定期船に乘込むことが出來る。

微風

到頭函館へ來た。

海上も先づ無事。今度の旅には私に取つて忘れることの出來ないものが澤山ある。長らく山の上に引籠つてばかり居た私は、こゝへ來て、廣濶とした海國の人の氣象に觸れた。そればかりでなく、わざ〳〵こゝまでやつて來た旅の目的をも果すことが出來た。『自分で書いたものを出版するといふのも一種の實業だ、要るといふ時に電報を一つ打つてよこせ、金は直ぐ送らう。』函館の阿爺はいかにも堅い商人らしい調子で私の望みを容れて呉れた。

突貫

末廣町には阿爺の家の懇意な陶器屋がある。そこの旦那に誘はれて養育院を見に行つた。私は貧しい子供を前に置いて、小さなお伽話を一つした。丁度その話をして聞かせて居る最中に、尋常ならぬ屋外の樣子で、敵の艦隊が津輕海峽を通過ぎたことを知つた。私は三日ばかり早く函館へ著いて好かつた。

歸りに乘つた駿河丸は敵艦に追掛けられたといふ船だ。危いところを脱れたことを同じ船の上で笑話のやうにするのを聞いて來て、私は小諸の家の方へ引返してから其話をお島にして聞かせた。

私が眞實に小諸を去らうと思ひ立つて居ることは塾の同僚に知れて來た。その

中でも『高瀬君、高瀬君』と言つて頼りにして呉れる廣岡學士の年をとつた顔を眺め、さも力を落して居るらしい先生の容子を見ると、このまゝ塾を置いて皆なを振捨てゝ行かれないやうな氣がする。私が斯の寂しい田舍へ入り込んで來てから、あの老學士と懇意にするやうに成つたのは、たゞ先生が正直で、生徒思ひで、學者らしい性質の人だといふのみでは無い。私は斯の淺間の裾の地方に櫻井先生や故正木大尉のやうな隱れた人物を置いて考へるよりも、泉君のやうな畫家や子安君のやうな少壯な學者を置いて考へるよりも、一番廣岡先生のやうな服裝にも振にも關はない、何もかも外部へ露出して居るやうな、貧乏してそれで猶自ら棄てずに居るやうな人を置いて考へたい。

私は田舍へ物を考へに來たけれども、斯ういふ地方に居て考へれば考へるほど、沈默するより他に仕方が無いといふことを知つた。私は廣岡先生のやうな心の置けない人と一緒に地酒でも汲んで、先生の身上話でも聞かずには居られなかつたのだ。

『高瀬君も行つて了ふかナア。』

斯う先生に言はれると、私も返す言葉が無い。先生は私の爲にも考へて居て呉れられる筈だ。周圍の事情にばかりさう心を奪はれて居る時では無い。

黄ばんだ秋の末の日が最早私の眼にある。何となくそこいらが黄ばんで見える。土まで黄色く見える。激しい霜の爲に燒け爛れたやうに成つた土は寒い日影の方に震へて居るやうに見える。

一頃の熱狂に比べると、町もシーンとして來た、小諸停車場の前で吹く喇叭の

音が町の空に響き渡つた。入營するものを寄せ集めの相圖だ。相生町の坂の方からは、送別の旗を先に立て、近在の壯年らしい連中がいづれも美しく飾つた馬に載せられて、村の人達に前後を護られながら、靜々と引かれて來た。停車場前の空地には、既に馬から下りて、見送りの人々に挨拶する壯年もあつた。斯の混雜の中を潛り拔けて、私は途中で一緒に成つた廣岡學士と共に塾の體操教師を探した。いよ／＼體操教師も召集に應じて出發することに成つた。

塾の同僚は體操教師の周圍に集つた。

『私などは、へえ召集されたところで、御留守居役の方ですから――』

斯う體操教師は言つて、力强く私の手を握つた。

『小山さん――』

と背の低い子安君は群集の中を分けて來て、體操教師に別離の握手を求めた。

私達は押出されるやうにして一緒にプラットフォームの方へ動いた。例の線路番人が立つて居る方角からは、矢張入營する人達を乘せた汽車がやつて來て、停車場の前で停つた。窓々の硝子戸を開けて呼びかはす聲、別離を告げる聲、無事を祈る聲、帽子を振る音、旗を振る音、汽車がプラットフォームの側を離れる頃にはすべてそれらのものが一緒に成つて、悲しい壯んな生命掛けの叫び聲がそこにあるだけだつた……

私の仕事も大分捗取つた。私の眼前には油のやうに流れて行く千曲川の下流の水がある。霙が蕭々降つて居る。對岸の蘆、河の眞中にある洲、水に近い楊などは白い雪に埋れて、何となく深い物の奥の知れない方から水勢が押し寄せて來て

居るやうに見える。高い岸の上の休茶屋には川船を待つ人達が居る。そこには私が小諸から連立つて行つた二人の娘が居る。紺色に染めた眞綿を龜の甲のやうに背中に負つて、手拭を頭に卷きつけて、私達に茶をすゝめて呉れる休茶屋の婆さんが居る。

戸の外へも早や深い雪が來た。桑畠も、水車小屋の屋根も白く埋れた。そこいらは一面に覆ひ冠せられたやうに成つた。

斯の降り積つた雪の中で、今夜は戰勝の祝ひがある。酸漿提灯を點けて小學校の廣庭へ集らうとする町の人達が家の横を通る。

『あー俺の作つてやつた拙い歌を皆なで歌つてるやうだね。』

と私はお島に言つて、南向の雨戸を開けて見た。暗い雪に包まれた相生町の通りの方には紅い灯がいくつも〳〵動いて見えた。

『萬歳――萬歳――』

雪に籠つた叫び聲を私は自分の部屋の方に坐りながら聞いた。

机に對つて、復た私は鉛筆の尖端を削り始めた。今度の長物語を書くには、私は本町の紙店で幅廣な方の罫の入つた洋紙を買つて來て、堅い鉛筆でそれに記しつけることにして居る。眼を瞑ると、川船があらはれる。霙は雪に變りつゝある。それが川船の窓のところへ飛んで來たり、水の上へ落ちて消えたりして居る。一緒に船に乘つた娘は、一人は私の家の大屋さんの娘で、一人はその友達だ。立てば頭のつかへるほどな低い船室で、乘客は互に膝と膝を突合せて行つた。激い水瀬の石の間を乘つて行つた時は私達の身體が跳つて、船は覆へるかと思ふほどの騒ぎをした。左樣かと思ふと、ゆるい流れのところへ出て、岸から垂下る楊の枯枝がバラ〳〵船の屋根へ觸つたり、船頭が漕いで行く艫の音が水に響いて聞えた

りした。あの船の窓から高い岸の上を通る雪仕度の人を見ることが出來た。それから私達は船橋の下なぞを潜り抜けたことも有つた。あの時はずつと川下の方まで乘つて行つて、小諸邊とは餘程樣子の變つた飯山の町を見た。

『萬歲――萬歲――』

長い行列が雪の中を遠ざかつて行くのを聞きながら、私は自分の眼にあることを紙に寫して見た。私は戰爭を外に見て、全く自分の製作に耽るほど靜かな氣分には成れない。私の心は外物の爲に刺戟され易くて困る。私の始めたことは私の心を左樣靜かにさせては置かないやうなものだ。

漸く長い冬を漕ぎ抜けることが出來た。しばらく床場へも行かないと思つて居るうちに、私の頭の髮は鶉のやうに成つた。今日は久し振りで延びた髭を剃つた。これで淸々した。

私の長い仕事は一年近くかゝつて漸く半分しか出來ない。私は學校を一方に控へて居る。これが精一ぱいだ。斯の仕事を持つて山を下りるとしたところで、これから先一年といふものは奈何しやう、奈何してその間妻子を養つて行かう。復た一つ心配にぶつかつた。斯の町にいくらか私を知つて居て呉れる人がある。私はその人に自分の志望を話して見るつもりだ。

斷られた。

志賀に居る友達に相談して見るより外に道が無くなつた。牧野さんこそは眞實

に私の力に成つて呉れさうな人だ。私は一週間もそのことを考へた。そして毎日出掛けて行かうとしては、毎日思ひ止つて居る。いかに私が今こゝで挫折したくないからと言つて、それを話すといふは容易でない。

お幸さんは女ながらに私の知己の一人だ。牧野さんの細君より一つ年の下な若い叔母さんだ。あの人も志賀へ遊びに行きたいと言ふから、誘ふことにしたら、この雪に出掛けるか、途中の激寒を奈何すると家の人に笑はれたと言つて、見合せるといふ話に來た。お幸さんはショウルにくるまつて、その中に肩から顏まで埋めて、寒さうに震へながら戻つて行つた。

私は牧野さんに話して見ることに決心した。單獨で雪を衝いて倒れるところまで行つて見る。

昨日から今日へかけて、これほど私は自分の弱いことを經驗したためしは無い。洋服で出掛けて行つたのも一つは自分の不覺であつたが、岩村田で馬車を下りる頃には私の身體は最早水を浴びせ掛けられたやうに成つて居た。恐しい寒氣だつた。私は馬車の内で著て居る洋服の外套を脱いで、それで腰から下を温めて見たり、復た筒袖に手を通して肩の方を包んで見たりした。まだそれでも岩村田の町はづれにある休茶屋へ寄つて焚火で身體を温めて行つた頃は好かつたが、そのうちに私は身體の關節の一つ〳〵が凍り著くほどの思をした。行く人も稀な雪の道——つく〴〵私はその眺めが自分の心の内部の景色だと思つた。時々眠くなるやうな眩暈がして來て、何處かそこへ倒れかゝりさうに成つた。私は未だ曾て經驗したことのない戰慄を覺えた。終に息苦しく成つて來た。まるで私の周圍は氷の

世界のやうだつた……お幸さんなどを連れなくて眞實に好かつた。もし一緒だつたら、それこそ二進も三進もいかなかつたかも知れない。二人で雪の中に凍えたかも知れない……左様でなくてすら、あの際涯の無い白い海のやうなところで、もうすこしで私は死ぬかと思つた……私は身體が寒いばかりだとは思はなかつた。心が寒かつた……漸く自分で自分の身體を堅く抱き締めるやうにして、心覺えの道を進んで行つた……私の足許には汎濫の跡の雪に掩はれたのがあつた。それが起伏する波のやうに見えた。私はその中へ滑り込まないやうに氣をつけながら、前へ、前へと辿つて行つた……前へ……前へ……

死の床

死の床

『柿田さん、なんでもかんでも貴方に被入しつて頂くやうに、私が行つて院長さんに御願ひして來て進げる――左樣言つて、引受けて來たんですよ。』

流行の服裝をした女の裁縫師が、あの私立病院の應接間で、日頃好きな看護婦の手を執らないばかりにして言つた。

柿田は若い看護婦らしい手を揉み乍ら、

『多分行かれませう。丁度今、私も手が空いたばかし……先刻貴方から電話を掛

けて下すつた時院長さんにも伺つて見たんです。病院の規則としては御斷りするんだけれど、まあ他の方でないからッて、院長さんも左樣仰るんですよ。』

『左樣して下さいな。貴方のやうな方に來て頂くと、奈樣に病人も喜ぶか知れません。』

『大變ですね……何ですか私でなけりや成らないやうですね。』

『いえ、是非貴方に御願ひして來て呉れろッて、病人も賴むんです。それでわざわざ參上つたんです。私が貴方をよく知つてることを病人に話したもんですから……私は柿田さんが大好きッて……。』

二人の女は應接間の腰掛に腰掛けながら、互に快活な聲で笑つた。

裁縫師の調子は、病人が賴みたいと言ふよりは、自分が賴みたい、と聞えた。

それほど斯の女は柿田を最負にして居た。

院長にも柿田を借りることを頼んで置いて、裁縫師は歸つて行つた。

その翌日から、柿田は裁縫師の極く懇意なといふ家へ行つて、寢て居る内儀さんの傍で、看護することに成つた。柿田が一目見た時の内儀さんは、頰骨の尖つた、顔色の蒼ざめた、最早助かりさうも無い病人で有つた。でも氣は極く確かで、寢ながら種々なことに注意して、人に嫌がられまいとする樣子さへ見えた。

そこは大經師とした看板の出してある家だ。病人の寢床は二階に敷いてあつたから、柿田は物を持運ぶ爲に、高い天井に添うて樓階を昇つたり降りたりした。

鋭い病人の神經は、眼に見えない階下のことを手に取るやうに知つて居た。亭主が店で何をして居るか、弟子が何をして居るか、女中が臺所の方で何をして居るか、そんなことは内儀さんには見透すやうによく解つた。時々、内儀さんは櫛卷にした病人らしい頭をすこし擡げて、種々雜多な物音、町を通る人の話聲、遠い

電車の響までも聞いた。表の入口にある硝子戸の音がしても、直にそれが店の用事の人か、それとも自分のところへ見舞ひに來て呉れた客か、と耳を澄ますといふ風だ。

近くに住む裁縫師は殆んど毎日のやうに見舞ひに來た。内儀さんとは、若い時からの知合で、それに斯の女の出して居る洋服店は經師屋の家作だつた。裁縫師は病人の寢床の側で、白い被服を著けた柿田の樣子を一緒に眺めて、

『奈何です、好い看護婦さんでせう。』

と言つて聞かせるばかりでなく、どうかするとそれを亭主の居る前でも言つた。

柿田が斯の家の者に取つて、無くて成らない人のやうに思はれて行つた頃は、内儀さんの病は餘程重かつた。ある日、柿田が病人の枕許で、寢亂れた髮の毛を解かして遣つて居ると、そこへ内儀さんが元世話に成つたといふ家の御隱居さん

が見舞ひに來た。

御隱居さんは柿田にも丁寧に挨拶した後で、病人の方を見て、

『斯ういふ方に附いて居て頂いて、何から何まで御世話をして貰へれば、お前さんも不足は無いでせう。』

『え丶、それは私も難有いと思つて居ますよ。眞實に柿田さんは好くして下さるんですからね。』

斯樣な話をするうちに、內儀さんの尖つた頰にはめづらしく血の氣が上つて來た。その紅味が反つて病的にも見えた。內儀さんは骨と皮ばかりの瘠せ細つた兩手を掛蒲團の上に力なげに載せて、

『御隱居さんの前ですけれど、私がこ丶へお嫁に來た時分……あの頃は、著物らしい著物と言つたら、一枚も持たず……晴衣に著る物でも、帶でも、箪笥でも、

皆なこ丶へ來てから自分で丹精した物ばかりなんですよ……まあ、御主人樣の御蔭で、斯うして人樣が被入つて下すつても恥しくない迄に、店も大きくなつて……。』

『あ丶、左樣とも。眞實にお前さんは出世しましたわね。どうして、お力さんはナカ〳〵の遣り手だなんて、よく吾家へ來る人がお前さんの噂サ、その度に、私は自分の鼻が高くなりますよ。』

『御隱居さんに左樣言つて頂くと……猶更……折角是迄にして……是迄に辛苦して……。』

『まあ、左樣氣を御揉みでないよ。お前さんは自分で壽命を縮めるんですよ。』

『しかし御隱居さん、私も今こ丶で死にたくは御座いません……』

內儀さんは兩手を顏に押宛て丶泣いた。

最早斯の病人は六ケしいと言はれた頃から、まだ幾日となく同じやうな容體が續いた。柿田は家のもの皆なから好かれて、田舍出らしい女中ばかりでなく、店のものからも慣々しく言葉を掛けられた。時には、階下へ降りて、亭主が襷掛で弟子を相手に働いて居る方へ行つて、大きな板の上に裏打される表具を眺めたり、高い壁に添うて下張されてある繪を見せて貰つたり、二年越もしくは三年越に貯へてあるといふ古い糊の講釋を聞いたりして、復た二階へ戻つて來て見ると、何時でも病人の顏色が惡かつた。左樣いふ時には、內儀さんは極りで痙攣風に身體を震はせて居た。

二階に、柿田が病人と二人ぎりで居ると、階下から種々な話聲が途切れ〳〵に聞える。トン〳〵トン〳〵と店の方で打つ經師屋らしい糊刷毛の音は、寢屏風のあたつた內儀さんの身體に響けて來る。柿田が手傳つて、寢返りを打たせて遣ると、內儀さんは枕に耳を押しつけて——丁度、電話口へ身體を持つて行つたやうにして——その枕に傳はつて來る話聲に聞入つた。

寢て居る病人の方は、起つたり坐つたりして看護して居る柿田の氣の著かないやうなことまで聞いた。

『柿田さん、今店で貴方の御噂してますよ……。』

と病人は言つて聞かせて、自分の色艶の無い細い手と、柿田の若い看護婦らしい手とを見比べる。柿田が階下へ藥の瓶などを取りに行つて來ると、內儀さんは神經質らしい眼を光らして居ることもある。そして、何か斯う待受けて居たかのやうに、無心に潮紅する少婦の表情を讀まうとした。

例のやうに、復た裁縫師が見舞ひに來た。亭主も病人の容體を心配して、二階へ上つて來た。床の上の人はスヤ〳〵眠つて居る樣子なので、成るべく眠らせる

が可いと言ひ合つて、皆な枕頭で話して居た。急に病人は大きく眼を見開いて、裁縫師と看護婦と、それから亭主の顔とを見比べた。

『お力さん、夢でも御覽なすつたの。』

と裁縫師は舊馴染の側へ寄つて言つた。

病人の額には冷い汗が流れて居た。それを柿田は濕したガアゼで拭ひ取つて遣つた。

病人は、まだ自分が生きて居たかといふ風に、頭を擡げて部屋の内を見廻した。微かなヒステリィ風の笑が暗い頰に上つた頃は、全くの正氣に復つて居た。斯の氣丈夫な内儀さんは、自分が死んだ後の後妻のことまでも心配して、御隱居さん始め、裁縫師にも宜敷頼むと言出した。

『左樣貴方は氣を揉むから不可んですよ。』

と裁縫師は慰め顔に言つた。亭主は枕頭に首を垂れて、默つて坐つて居た。看護婦は又手持無沙汰の氣味で、用事にかこつけて階下へ降りて行つた。

御隱居さんも一寸樣子を見に來た。裁縫師は階下で人を避けて、御隱居さんと二人ぎり病人のことを話した。

『お力さんも最早長いことは無さゝうですね。』と裁縫師が言つた。

『左樣サ……。』と御隱居さんも聲を低くして、『それはさうと、柿田さんを彼樣して附けて置いても可からうか……。』

御隱居さんがまだ半分しか言はないうちに、その意味は裁縫師の方へ通じた。

『ぢや、あの人を出さないやうにしませうか。』

と言つて、裁縫師は御隱居さんと顔を見合せて笑つた。

『お前さんは何處へ行くの。』

と御隱居さんが言葉を掛けた頃は、裁縫師は柿田の腕をしつかり捉へた。それを親しげに組合せるやうにして、物をも言はせず經師屋の外の方へ連れ出した。

『まあ、奈何したの……私を何處へ連れてくの……。』

と柿田は呆れた。

『何でも可いから、一緒に被入つしやい。私の店へ行つてすこし御休みなさい。』

裁縫師は女同志一緒に身を寄せて、しばらく他の話をしながら町を歩いて行つたが、そのうちに女らしく笑出した。

『柿田さん、貴方が側に附いて居たんぢや、どうしてもあの病人が死に切れないんですよ。』

『まあ……。』と復た看護婦は呆れて、『私が看病に來なけりや、彼の病人が助からないやうなことを、貴方は言つといて……私が側に居れば、今度はまた死に切れ

ないなんて……貴方は何を言ふの。』

二人の女は子供のやうに笑つた。

裁縫師が柿田を自分の家に休ませて置いて、復た經師屋の方へ引返して見ると、二階には病人と御隱居さんと二人だけ居た。柿田の姿が見えないといふことは、病人を安心させて置かなかつた。半死の内儀さんはブル〳〵震へながら疊の上を這つて行つて、樓階のところから階下を覗いて見た。

燈火

燈火

飯島夫人――榮子は一切の事を放擲する思をした後で、子供を東京の家の方に殘し、年をとつた女中のお鶴一人連れて、漸く目的とする療養地に著いた。箱根へ、熱海へと言つて夫や子供と一緒によく出掛けて行つた時には、唯無心に見て通り過ぎた相模の海岸にある小さな停車場、そこへ夫人はお鶴と二人ぎり汽車から降りた。

夫人はまだ若かつたが、子供は三人あつた。新橋を發つから汽車中言ひ暮して

來たそれらの可愛いものからも、夫からも、彼女は隔絶れたところへ來た。

『母さん來たよ。』

と夫人は、斯の海岸に著いたことを子供に知らせるやうに、獨り口の中で言つて見た。そして周圍を見廻して寂しさうに微笑んだ。

停車場側に立つて車を待つ間、夫人はお鶴の前に近く居ながら、病院のあるといふ場處を大凡の想像で見當を附けて見た。二筋の細い道が左右にあつた。その一つは暗い松林に連なり、一つは舊い東海道の町へでも出られさうな幾分か空の開けた方へ續いて居る。惡く狡れた眼附の車夫が先づ車を引いて來て、夫人が思つたとは反對の方角を指して見せて、その病院も、夫人がこれから行つて先づ宿を取らうとする蔦屋も、松林の彼方にあたると言つて聞かせた。一帶に引續いた遠見の綠は沈鬱で、それに接した部分だけ空は重い黃色に光つて見えた。

間もなく三臺の車がそこへ揃つた。一臺には荷物を積んだ。それを先頭にして、夫人とお鶴とを乗せた車は順に砂地の道を軋り始めた。

『奥様、御寒か御座いませんか。』

とお鶴は車の上から聲を掛けた。

そよともしない松林、小鳥の聲一つ聞えない木立の奥には同じやうにヒヨロヒヨロと細く生えた幹が暗く並んで、引入れられるやうな靜かさが潜んで居た。細道の砂を踏む音をさせて、車夫等が進んで行つた時は、一層靜かな林の間へ出たつ海に近いことは感じられても、遠くの方は死んだやうに沈まり返つて、浪の音もしなかつた。

暮色が迫つて來る頃であつた。煙るやうな空氣はすべての物を包んだ。

そのうちに、車は病院の入口らしいところへ出た。松林の一區域を圍つて、白いペンキ塗の柱が建てゝある。薄明るい中を走つて來て、角の街燈に火を入れて行く人もあつた。

夫人は車の上からお鶴の方を顧みて、

『お鶴、こゝが病院の入口だよ、海濱院としてあるよ。』

と言つて聞かせたが、朦朧とした林の奥の廣さが想像されるのみで、建物は見えなかつた。

斯の一區域について折れ曲つて行つたところに、人家がゴチャ〳〵並んで居た。そこは海濱院の横手にあたつて、旅館の蔦屋だの、別莊風の建物だのが有るところだつた。車夫は梶棒を下した後で、そこゝに灯の泄れた家を指して見せて、病院通ひの患者が住むことを夫人に話した。

蔦屋には東京から出した荷物も屆いて居た。二階へ案内されてから、夫人は寒

い東京の方に置いて來た子供の噂をして、やがて途中のことまで思出したやうに、

『最早梅が咲いて居たつけねえ。』

とお鶴に言つて見た。お鶴はシッカリした體格の女で、肩幅などは下手な男に劣らないほどあつた。でも身體に似合はないやうな、優しい、サッパリとした聲で話す。

『奥樣、斯ういふ處へ被入しつた丈でも、もう御癒り遊ばしたやうな氣分がなさいますでせう。何ですか、東京から見ますと、御陽氣からして違ひますこと。』

『ほんとに、思ひ立つて出て來て、好かつた……女が家を措いて來るなんて、容易ぢや無いんだもの……斯ういふ處へ子供を連れて來て遊ばしたら、さぞ悦ぶだらうねえ……』

何かにつけて、夫人は子供のことを言つた。

榮子夫人は病のある人のやうにも見えなかつた。どちらかと言へば色の黑い、ソバカスなどの澤山顏にあらはれて居る婦人ではあつたが、その暗い斑點も邪魔に成らないほど若々しくて、それに女らしく快活なところがあつた。宿の女中が物を持運んで來る間ですら、夫人は靜止して居られないといふ風で、廊下の外へ出て、冷々とした空氣を呼吸した。宿の女中は欄のところへ來て、暗い大きな海濱院の建物を指して見せた。病院らしい窓々からは燈火が泄れて居た。

復た夫人は子供が側にでも居るやうに、

『病院だよ……母さんの病院だよ……今に母さんも、あの燈火の點いたところへ行くんだよ……』

斯う自分獨りぎりで言つて見た。

夕飯の後、蔦屋の内儀さんが上つて來て、種々と病院の話をした。大きな、肥

つた内儀さんで、客をそらさぬ世慣れた調子で、入院するに都合の好いことも聞かせたし、夫人の氣休めに成りさうなことも言つた。尤も、夫人は入院するばかりにして斯の海岸へやつて來たので、手續萬端は既にあらかた運んで置いた。夫人は東京の方で院長の診察をも受けて居た。彼女は名乘つて病院の受附へ行きさへすれば可い人であつた。

『奥樣、只今御熱は御座いませんか。』とお鶴が心配顔に尋ねた。

『そんなに惡かないんですよ。』と夫人は打消すやうに笑つて内儀さんの方を見た。『知らずに居れば、まだこれで普通な人の身體なんです……唯、時々熱が出まするもんですから、どうもそれが不思議だつて、懇意な醫者に言はれまして、初めて自分でも氣が著いたんです……早く今の中に癒せ、左樣宅も言ふもんですから……』

『しかし、奥樣、早く先生に診て頂いて好う御座いました——御家では大事な母さまですもの。』とお鶴が言つた。

『御心配なさることは有りませんよ。』と内儀さんは事もなげに言つて見せて、夫人の豐かな服裝や瀟洒としたものを著たお鶴の樣子までもヂロ〳〵眺めながら、

『入院なすつた方で、ずん〴〵快くなつた方はいくらも御座います。丁度奥樣位な年頃の方で——旦那樣もまだ御若い方なんですよ——御子さんも御有んなさる——もう一冬も越したら、いよ〳〵全快の免狀を頂いて歸れるなんて、左樣言つて悅んで被入つしやいます。その方は、入院なすつてから、大變御肥りなすつた。私見たやうに。何でも十五貫ぢやきかないなんて——』

『いくら肥つても、癒つた方が好う御座んすわねえ。』と言つて、夫人も女らしく笑つた。

其晩、夫人は夫へ宛てゝ手紙を書いた。お鶴は又、夫人の疲勞を休めさせるように、風邪を引かせないように、と種々に氣を配つて、早く横に成ることを夫人に勸めた。東京から屆いた荷物の中には、輕い柔かな小蒲團もあつた。それをお鶴は暖かな床の上に敷いて、その上に白い敷布を掛けながら、

『御嬢樣方は如何して被入つしやいませう。必と最早おねんねで御座いますよ。』

『今日はグズ〳〵言つたらうよ。』と夫人も思ひやるやうに、『皆なを困らせたらうと思ふよ。』

『えゝ、そりや、御慣れなさる迄は。でも、年長の御嬢樣はちやんと譯が解つて被入つしやいます。「母さまはキイキを癒しに被入つしやるんですよ。」と私が申上げましたら、「知つてるよ」なんて左樣仰いまして……あれを思ふと御可愛さうで御座います。』

『お鶴、そんな話は止さう。お前も今夜は早く御休み。』

止さう、止さうと言ひながら、夫人は子供の噂をした。

寢床に就いてからも、夫人は獨りで、『今日は温順しく御留守したかい……母さんの御留守したかい……』と繰返した。眼を閉りながら、一人づゝ子供の名を口の中で呼んで見た。

翌日の朝になると、前の晩に暗くてよく解らなかつた海濱院が蔦屋の二階から見えた。窓に燈火を望んだのは、幾棟かある西洋風の高い建物の一角であることが解つた。窓を開けて、何か朝日に干す人もあつた。白い被服を著けた看護婦も見えた。

午前に、夫人はお鶴を宿に殘して置いて、獨りで海の方へ歩きに行つた。患者等の借りて住む家まで見て廻つたと言つて、帕子に包んだものを提げながら戻つ

て來た。平素よりは顏のソバカスなども濃く多く顯れ、色もすこし蒼ざめて居た。

『柔かい雨でも降りさうな處だね。』

斯う夫人はお鶴の側へ寄つて言つた。お鶴は茶を入れる用意をして居たが、夫人の言つたことを聞咎めて、

『奧樣また雨が出ましたと。』と笑つた。

『私は雨が大好きサ……』

『よく左樣いふ方が御座いますよ。雨の降る日には用達に歩くのも好きだなんて。』

『今日のやうにカラツと晴れた日よりか、すこし曇つた方が、私には心地が好い。』

『左樣仰れば、御顏色はあまり好か御座いませんの。』

『顏色は宛に成らない。大變顏色が惡いなんて言はれる時でも、私は反つて氣分の好いことが有るよ。』

部屋の隅にある違ひ棚の上には姿見が置いてあつた。夫人はその方へ行つて、一寸自分の容貌を映して見て、復たお鶴の方へ來た。海岸で夫人は、餘程病氣の進んだらしい婦人が萎れて歩くのを見て、氣を惡くして歸つて來たが――肺の惡さうな人か、左樣で無いかは、夫人には直に見分がついた――しかし、それを言出さうとはしなかつた。夫人はお鶴と一緒に茶を飲みながら、オゾンを含むといふ樂しい海岸の空氣を吸つて來たこと、富士のよく見えたこと、子供に送らうと思つて小石を拾ひ集めて來たことなどを話した。

『お鶴、お前はこれから東京の方へ歸つてお呉れな。』

夫人は海岸の方から斯樣なことまでも考へて歸つて來た。

お鶴は心配して、『それで、奧樣は如何遊ばします？』

『ナニ、私のことは其樣に心配しなくても可いよ。それよりか子供を見て御呉れよ――私はこれから病院へ行きさへすれば可い人だ――最早こゝまで來たんだものゝ。』

『でも折角御供をして參りましたのに……「何だつて病院まで行かないんだ、何の爲に隨いて行つたんだ」なんて、必とまた私が旦那樣に叱られます――』

『大丈夫。そんな旦那樣ぢや無いから。何だか子供の方が氣になつて仕樣が無い……お前に行つて見て貰ふと、私は一番安心だ。家の方ぢや必と皆な困つてるよ。』

『それも左樣で御座います……』

お鶴も迷つて、如何して可いか解らないやうな顏付をした。宿の內儀さんが來ての話には、入院のことなら及ばずながら引受けた、夫人も寂しからうから、また子供衆でも連れて東京から訪ねて來るやうに、と言つて勸めて呉れた。

『もし病院の近所へ御家でも御借りなさるやうでしたら、また御世話を致します。坊ちやま方を御連れなさるが可う御座います。いくらも左樣して來て被入つしやる方が御座います。』

斯う內儀さんは話した後で、長く居る療養の客の中には松林の間に眺めの好い借屋を見立て、海に近く住んで見る人なぞもあるが、いづれも終には寂しがつて、復た人家の多い方へ引移つて來るといふ話をした。

到頭、お鶴は夫人の言葉に隨つた。荷物はすつかり引纏めて、いつ何時でも入院の出來るばかりにした。思の外、夫人は元氣で居るので、お鶴はやう〳〵安心したといふ風で、その日の午後の汽車で東京の邸の方へ歸ることにした。

『奧樣、奧樣、すつかり快く御成り遊ばして下さい。御身體が第一で御座いますよ……眞實に世の中は譯が解りません、御病氣さへなければ、もう申すところは

御座いませんのですけど……御家の方のことなぞは當分御忘れなさるが宜う御座います……奥様のは、あまり御氣を遣はうと爲さり過ぎる……』

斯う言つて別れて行くお鶴に、夫人は子供へと言つて海岸で拾つた小石なども持たせ、それからお鶴が車に乘るところまで見送つた。

『いづれ旦那様も御見えなさいますでせうよ。』

とお鶴の殘して言つた言葉がまだ耳にある頃は、夫人は、全く獨りで宿の二階の廊下のところに立つて居た。

庭の芝生に面した、天井の高い、古風な部屋が、夫人の胸に浮んだ。長唄の三味線などが置いてある。稽古本も置いてある。障子の嵌玻璃を通して射し込む光線はその部屋の中を寺院のやうに靜かに見せて居る。そこは夫人の姉さんがまだ斯世に居た頃の居間の光景だ。姉さんが相續した飯島の本家の奥の方の座敷にあ

たるところだ。夫人が養子の夫を迎へて分れて出る迄、娘の時代を送つた記憶の多い家の中だ。姉さんも矢張婿養子をして、夫婦の間に子まで有つたが、病氣するやうに成つてからといふものは、全く世の中と隔絶れ、僅かに長唄の三味線をさらつて薄命な一生を慰めて居た。あの靜かな居間に獨り閉ぢ籠つて自己の破滅を待つて居たやうな姉さんの姿を、夫人はまだあり〳〵と見ることが出來た。不幸な姉さんは死ぬまで長唄の三味線を離さなかつた。

榮子夫人が肺の惡さうな人を見ると直に眼が著くといふは、斯の姉さんの惡くなり始めから亡くなる迄を實地に見たからであつた。それがどうやら彼女自身の大事な身體にまで顯れかけて來た、脅すやうな定まりない體温、肉體の動搖と不安、悲しい幻滅……色の白い纖弱な姉さんと違ひ、もと〳〵夫人はそんな風に成りさうも無かつた人で、同じ姉妹でも斯うも違ふものかと娘時代には言はれたも

のだつた。

夫人には、日頃頼りにする佛蘭西語の教師があつた。B夫人といふ西洋の婦人だ。斯うして一切の事を放擲して來る迄には、何度そのB夫人の家の方へ足を運んで、決心を促して貰つたか知れなかつた。

午後のうちに夫人は海濱院の方へ行くことに定めた。

『母さん行くよ……キイキを癒して來るよ……』

と夫人は獨語のやうに言つて、病室の都合を尋ねたいと思ひながら蔦屋を出た。

妙に足が進まなかつた。靜かな松林の横手へ出ると、其朝海岸で逢つた萎れた女の患者の姿が夫人の眼にチラついた。これから行つて、彼樣いふ人達の中に交り、又知らない床の上に横に成るといふことは、夫人には堪へられなかつた。

用事に假托けて、夫人は蔦屋の方へ引返して了つた。

『奥樣、御忘れ物でも御座いましたか。』

と若い女中が聞いた。

部屋へ來ては氣休めに成るやうなことを言つて聞かせ、廊下へ出てはキャッキャッと笑ひ騷ぐ女中達に取繞かれながらも、夫人の耳は兎角患者の噂に傾いた。長い廊下へ出て、聞くともなしに耳を立てると、患者とは思へないほど爽快な聲で話す男の客がある。見舞にでも來た人があると見えて、病院生活の話が始まつて居る。十中の九までは傳染の憂ひが無いから、安心して話して行つて呉れと、正直な物の言ひ方をする人もあるものだ。それほど心の美しい人でも、斯氣な療養地へ來て居る悲しさには、親しい友達にまで氣を遣つて、健康な人の知らないところに苦勞すると見える。猶、聞けば、その男の客は斯樣な話もする。矢張海濱院へ入つて居た患者のことだ。若い人と見えて、海岸へ行つて石を投つて遊ん

だ。すると間もなく血を吐いて死んだ。

『よく人の死んだといふ話を聞きます。』

それを聞いて、夫人は自分の部屋の方へ忍ぶやうに歸つた。

夕方から、階下で蓄音機の音が起つた。若い女中が來て、好い器械を借りて來たから、と勧めて呉れたが、夫人は二階の廊下のところで欄に凭れながら聞いた。

屋外はそろ〳〵暗く成りかけて來た。復た夫人は海濱院の窓々に美しい燈火を望んだ。

お鶴は最早子供の側へ行つたらうか。それを夫人は思ひやつた。

『母さん……何故、あの燈火の點いたところへ早く行かないの……』

と一番年長の娘の尋ねるやうな聲が、夫人の頭腦の内部で聞えた。夫人はまた其返事でもするやうに、

『行くよ……行くよ……』

と口の中で言つて見た。

到頭、夫人はすこし氣分が好くないからといふ口實の下に、もう一晩蔦屋に泊ることにした。實際、身體にはすこし熱も出た。其晩は床の上へ倒れるやうに身を投げて、子供のことを思ひつゞけた。

『皆な温順しく御留守してますかい……さぞ母さんを捜してるだらうね……母さんはこゝに居ますよ……こゝに寢んねしてますよ……早く癒くなつて、皆なの側へ行かうねえ……御休み……御休み……』

榮子夫人は一層病院の方へ行きたくないやうな、と言つて今の中に病に勝たねば成らないといふ心地で、翌朝に成つて眼が覺めたが、疲れが出て復た一眠りした。九時過に、夫人は床を離れて、其日こそは入院するといふ堅い決心を定めた。

不思議にも、斯の決心がいざ病院の方へとなると鈍つた。二度も、三度も、夫人は行きかけては躊躇した。

『奥様、如何遊ばしました。』

と蔦屋の内儀さんが客の様子を見に來て言つた。患者を扱ひ慣れて居る斯の内儀さんは平氣なもので、言葉を繼いで、

『病院の方では、部屋を明けて御待ち申して居るさうです。院長さんも、飯島さんの奥さんは如何なすつたらうつて、私共へ言傳がありました。』

『どうしても私には病院の方へ行く氣に成れません……種々なことを考へるもんですからね。』

『左様仰る方も御座います。ナニ、被入しつて、慣れて御丁ひなされば、何でもありません。黴菌が病院中飛んでゞも居るやうに、慣れない方は思召すでせうが、そんな譯のものでは御座いませんサ。よく私は皆さんを病院の方へお連れ申します。それぢや、奥様も私と一緒に被入つしやい。』

内儀さんは世にありふれた事のやうに、意味もなく笑つて、夫人の荷物などは先へ屆けさせることにした。

宿の男が來て順に鞄だの、セル地の大きな袋だのを階下へ運んだ。

三日目の夕方に、漸く夫人は蔦屋を離れることに成つた。それも自分の力でなく、大きな肥つた内儀さんに助けられて、無理やりに引連れて行つて貰ふやうに。

『奥様、シツカリと私の肩へつかまるやうに成さいまし。』

と内儀さんは男のやうな聲を出した。

暗い松林の間からはチラ〳〵海濱院の燈火が見えた。サク〳〵と音のする砂の道を踏んで、夫人は内儀さんの肩に掛りながら、一歩づゝその光の方へ近づいて

行つた。

犬

犬

此節私はよく行く小さな洋食屋がある。あそこの鯛ちり、こゝの蜆汁、といふ風によく獵つて歩いた私は大きな飲食店などにも飽き果てゝ、その薄汚い町中の洋食屋に我儘の言へる隱れ家を見つけて置いた。青く塗つた窓際には夏からあるレエスの色の褪めたのが掛つて居る。十二月らしい光線は溝板の外の方から射し入つて、汚點の著いた白い布の掛つた食卓の上を照して居る。そこに私は下駄穿きのまゝ腰掛けた。

一生のさかりといふべき私の三十代は數日のうちに盡きやうとして居る。何となく靜止して居られないやうな氣がする。私は厭はしい日のみ續いた斯の一年を忘れるといふよりも、三十歳の終りのしかも誕生にあたる日に、用事ありげな人達が窓の外を往つたり來たりする寒い年の暮の空氣の中で、獨り半生の悔恨に耽らうとした。私は今日まで逢ひ過ぎるほど逢つたいろ〳〵な男や女の顏を見るにも堪へない。さうかと言つて、斯の洋食屋から半町とない大川の水が鐵橋の下にある石の柱の方へ渦卷き流れて行くその岸の引き入れられるやうな眺めを見るにも堪へない。眼前にあるソースや辛の入物だの、ごちや〳〵置べた洋酒の瓶だの、壁紙で貼りつめた壁だの、その壁にかゝる粗末の額、ビイルの廣告などは、反つて私の身を置く場所に適しかつた。

私は人並に賢い人間のつもりで居た。けれども今といふ今になつて、つく〴〵

自分の愚劣なことを知つた。私には何卒して一生のうちに自傳を書いて見たいといふ心があつた。恐らく斯の心は私ばかりではあるまいと思ふ。丁度私のやうにして半生を費して來たものは、自傳の到るところに得々として女の名を書きつけ容貌の好し惡し、氣立、年齡、觸れた肌のかず〳〵、其他愚かしいことの多ければ多いほど寧ろそれを誇りとしたであらうと思ふ。そして、讀返して見て、斯の通り自分が愚かしい、しかしこれより愚かでないと言へる人間があるか、と問ひ返すであらうと思ふ。世にこれほど自分の愚劣を表白することはあるまい。私は今に成つて、見物の喝采の前に自分の爲したことを舞臺の上で繰返して見せる年老いた毒婦の心を讀むことが出來る。

私には人に愛せらるゝ性質があつた、人の心を引くに足るだけの容貌もあつた。自分で言ふも異なものではあるが、私はよく手入れをした髮と、隆い筋の通つた

鼻と、淺黑くはあるがしかしきめの細い光澤のある皮膚とを持つて居た。のみならず、いかにせば斯の容貌を用ふべきかといふことをも知つて居た。私には又、若々しさがあつた。力があつた。殊に私は婦人の前で自分を大きくして見せ得る不思議な力と、慇懃を失はない程度で大膽に勝手に振舞ひ得る快活さとをも持つて居た。斯うして私は何事も自分等の爲ることを考へて見たことも無いやうな、慣れて知らずに居る人達に取卷かれて、唯青春の血潮の湧き立つまゝに快樂を追ひ求めた。私は求めたものが與へらるゝばかりでなく、求めないものまでも與へらるゝのを知つて、人知れず自分の幸福を思つて見た。私は自分の精力も根氣もすべて空しく費し盡すまゝに任せた。今のやうな悔恨、悲痛が、しかも斯の年頃に自分を待つことは知らずに。そのことに私が氣がついた時は、私は自分で自分を深く呪ふより外に仕方の無いやうなものと成つた。私は今、漸く三十代を終つた

ばかりの人間だ。それだのに、私の身體は最早老人のやうに變つて震へて來た。

白い汚れた前垂を掛けたボーイは私の前に肉差や匙を置いて、暗い暖簾の掛つた方から牡蠣のスウプを運んで來た。私は酒はあまり遣らない方だから、すこし甘口ではあるが白葡萄酒の玻璃盃に一ぱい注いであるのを前に置いて、それをすこしづゝ遣つたり、乳色のした牡蠣の汁を啜つたり、それから暖簾の奥の方でコツクのさせる物音や脂肪のヂリ〳〵煮える音を聞いたりしながら、夢のやうに過ぎ去つた年月のことを胸に浮べて見た。

ボーイが汁の皿と入れ替へてメンチ物を一皿持つて來た。私の心はずつと少年の昔に歸つて行つた。漸く物心のついた、まだ〳〵無邪氣な、幼い、物に驚き易い日のことに歸つて行つた。平素めつたに思出した例も無いやうなことが、しかも昨日あつたことゝ言ふよりも今日あつたことのやうに、生々と浮んで來た。

何事も知らずに世の中へ出て來た私を假りに生徒とすれば、その少年の生徒の前へ來て種々なことを敎へて呉れた敎師が誰だつたか、私は肉差の音をカチヤカチヤさせながら皿の上の料理を味ひ〳〵其樣なことを考へた。そして、その敎師が嚴格な目上の人達でなくて、つぎ〳〵に變つて行つた下婢であることを思出した。ある下婢は私の前に立つて、私が學校などで見たことも無いやうな本を懷から取出して見せたことも有つた。そして、これは女の持つものだといふことを私に話して聞かせて呉れた。ある下婢はまことに人の好いものでは有つたが、しかし心の浮々とした女で、長く奉公する間には幾度となく失策をして、その度に詫を入れて來た。私はその女のかんざしを挿した髮の上から鼠色の頭巾を冠つた形が端の尖つた擬寶珠によく似て居たことを覺えて居る。『あれがお由の色男だ』とその女の名を言つて、家の人が私にある時計屋の職人を指して見せたことが有つ

た。私は初めて『色男』といふ言葉を覺えた。ある下婢はまた、奉公するものに似合はないほどの器量好しで、髪なども黑く房々として居たが、時とすると私の見て居る前で主人に調戯はれて、『あれ、御新造さん、いけません』と叫ぶやうに言つたことがあつた。女は僅かの間しか奉公して居なかつたが、それと入れ替りに色の黑い、言葉に訛りのある、私の一番嫌ひであつた下婢が來た。田舍から奉公に來て居るとかで、時々亭主らしい百姓風の若い男がそつと訪ねて來た。そのことは家中の誰よりも一番よく私が知つて居た。といふは、下婢が私を前に置いて、半分述懷するやうな調子で、種々と男のことを私に話して聞かせたから。

私は愚かしいものだか、正直な人間ではあるつもりだ。しかし、私の記憶は私以上に正直だ。いろ〳〵な大人の爲ることを見たり聞いたりしても、其頃の私は直にそれを見做はうとはしないで、唯自分で自分に知れる程度に止めて置いた。

私の知らないやうなことを一番多く私に注ぎ込んで呉れたのは、一番私の嫌ひな下婢だつた。ある晩、私は女に呼び起されて、默つて寢た振をしながら獨りで可恐しく震へて居たことも有つた。女は間もなく暇を取つて男と一緒に國の方へ歸つて行つた。

その後へ頰の紅い、まる〳〵と肥つた、辛棒强く働く下婢が雇はれて來た。誰にでも好かれて、少年の私も一番よく馴染んだことを覺えて居る。斯の下婢は私のところへ來て、すこし皺枯れたやうな、女らしい聲で、みだらな流行唄をよく私に唄つて聞かせた。どうかすると女自身ですら自分の聲に聞き恍れるほど巧みに唄つた。私も耳を傾けて、知らない世界の方へ連れられて行くやうな氣がした。

ボーイが別の皿を運んで來た。丁度そこへ表口の溝板の方から犬が二匹ばかり電話口の前を廻つて私の腰掛けて居る側へ來た。皿の上のものを欲しさうな顏附

をして、側に附いて居られるのもうるさく、すこし追つて見た位で屋外へ出て行く樣子も無い。私は犬の方へ關はずにナイフを取上げた。二匹とも白いやつで、客のない食卓の下の方を嗅き尋ねるやうに歩き廻つて、復た私の物を食ふ側へ來た。

『まさか、犬から物を習つた覺えは無いよ。』

と私はそこに誰か話相手でもあるやうに、自分で自分に獨語を言つて見た。私が『まさか』と言つて見たのは、あの下婢ばかりでなくて、犬もまた自分の敎師であつたことを心の底に否むことが出來なかつたからで。

頭から目の上あたりまで白い毛の長く垂下がつた狆のすがたがはつきり胸に浮んで來た。屋の内で飼はれて居た獸は、ある時は少年時代の友達のやうに、ある時は極く無氣味なものゝやうに、私の眼前をよく往つたり來たりした。私は今でもあの小柄な、性質の賢い狆が、頭の毛を振つたり尻毛を振つたりしながら疊の上を歩き廻つたその足音を聞くことが出來るやうな氣がする。

『斯の犬には人間の言葉が解る。』

と言つて家のものは笑つたことすらある。それほどよく人に慣れて居た。あの首をすこし傾けて私達の前にかしこまつた樣子は、人の表情を讀むことを知つて居るとしか思はれなかつた。私はあの長い房々とした毛のかげにある怜悧さうな眼からよく涙の流れたことを覺えて居る。それから毛が汚れて穢くなつたと言つて、嫌がるやつを無理に盥に入れて、石鹼をつけてごし〳〵洗つて遣ると、鼻をクンクン言はせながら鳴き騷いだことを覺えて居る。濡れた時はずつと小さく見えた。その時ばかりは眼もあらはれた。毛の乾くのを待つて居られないといふ風に、家中馳けずり廻つて、小さな體を到るところに擦りつけて、ごろ〳〵部屋の内を轉

がつて歩いた。どうかすると、その濡れた毛を人の前でブル〳〵させて、無遠慮な雫を飛ばしてよごした。表の方に人でもあると、それが客であるか、家のものであるかは足音で聞き知つて居て、眞先に飛出して行くのもあの狆だつた。

呼ぶと、嬉しさうな聲で鳴いて、よく私の方へ來た。狆は私の手に抱かれながら、鼻と言はず、口と言はず、長い舌で私の顏中ベロ〳〵嘗め廻さなければ承知しなかつた。それが私に對する親愛の表情だつた。私はそれには閉口して、いつでも顏だけ除けては膝の上に乘せた。

斯の狆の種を得たいと言つて、同じやうな美しい毛並の牝を引連れて來る人もあつた。時とすると狆は人の習慣を無視する動物の本性に反つて、殆んど本能的に私のまはりを狂つて歩いた。私が人であるか犬であるかの見さかひすらも忘れて了つたかのやうに。

『お後は何にいたしませう。何かサッパリとしたものでも。』

とボーイは私の傍へ來て手をもみながら言つた。

急に日が濃く窓から射して來た。何となく部屋の板敷の日蔭に成つたところは寒く感ぜられた。私は耳が鳴つたり腰が痛んだりする自分に返つて、それが身に附き纏ふ持病のやうに離れないことを思つて見た時は、一種の惡寒を覺えた。洋食の出前持は堅い靴の音をさせながら溝板のところを出たり入つたりして居た。私は食卓の布の上に爪の延びた手を置いて、あの前垂掛で雜巾を手にしたやうな無智な下婢達と犬とから、斯うした自分を先づ敎育されたことを考へて、思はず微笑まずには居られなかつた。

ボーイは熱くした紅茶をこぼさないようにと用心しながら私の前へ持ち運んで來た。うるさい二匹の犬は私がそれを飲み終るまでも側に附いて眺めて居た。

沈

默

沈默

勝田君、すこし君の話をさせて呉れ給へ。妙な人を引合に出すやうだが、僕の兄貴の友達に和久井さんといふ人が有つた。兄貴の話に、和久井は奇體な男だ、是方が得意で居る時には決して寄り附きもしなければ訪ねても來ない、逆境と成ると『奈何だい』なんて言葉を掛けて訪ねて來る、和久井は左樣いふ男だと兄貴が言つた。丁度君がそれに似て居ると思ふ。勿論、君は君、和久井さんは和久井さんで、それに兄貴の話した場合と僕の言ふ意味とは違ふが、どうも其樣な風に

思はれて成らない。

僕は君のことを忘れて過す月日もある。思ひ出さないことも多い。しかし、どうかすると君がこつそり遣つて來て、細々と話相手に成つて呉れるやうな氣もする。

勝田君、斯樣なことを僕が言出したところで君は何事も答へる人では無い。君と僕との隔りは死んだ者と生きて居る者との隔りだ。丁度君が病氣で亡くなつた時は、僕は東京に居なかつたから、君の葬式にも行かなかつた。鈴木君は感心さね。どつと君が患ひ就いてからもよく訪ねて行つたといふでは無いか。君が死んだ後でも、いろ〳〵世話をしたよ。僕は鈴木君が雜誌に出した話を讀んで、君が病床の光景や、葬式の時の樣子を後で知つた。君の晩年に、ホラ、君の側で世話をした女の人——あの人に君が他から見舞の牛乳だか藥だかを取寄せさせて、

鈴木君達の居るところで、君はそれを細い管で吸つて見せて、どうせ助かる見込の無い枕頭でも君は他人の厚意を無にすまいとするやうに、細い心づかひをしたといふでは無いか。鈴木君は近頃に成つて復た君の話をある雜誌に載せた。その中に君の葬式のことが出て居た。君の時ほど寂しい葬式を送つたことも無いが、又、あれほど人の死んだのを送つて行くといふ氣のしたことも無い、としてあつた。鈴木君の話は短いが、感じはよく出て居た。君の葬式はさも有つたらうと思ふ。たしか君の死體は火葬場の方へ送られて燒かれたやうに覺えて居る。君の戒名は寺島さんが擇んで、いかにも君に適はしいものが命いた。そのことは鈴木君も言つて居た……沈默……沈默……君にあるものは唯沈默だ……君は最早永遠に無言な人だ……しかし勝田君、君が笑ふことも怒ることも出來た時分よりは反つて今に成つて餘計に君が僕に物を言ふとは、不思議ではないか……

勝田君、人は到底沈默に堪へられるものでは無い、僕はよく左樣思ふね。あの寂しい修道院の中に住んで、牛を飼つたり野原を開拓したりしながら無言の行をやるといふトラピストの僧侶達ですら、必とお腹の中で叫ばずには居られなからうと思ふ。いつぞやも鈴木君が僕のところへ來て、あの話上手な人が、自分ほど物を言つて居ながら、これで何事も言はないやうな氣もするといふ話が出た。そりや左樣だらう、僕なども言ひたいことがムヅ〳〵するほど有つて、こいつを言つたらさぞ胸がスーとするだらうと思ふやうな時でも、さて口に出して見ると、何時でも後でボンヤリして了ふ。心が默つてる。でも、どうかすると獨語を言つて居て、自分で氣がついて噴飯すことがある。その話を鈴木君にしたら、

『獨語は僕もよく言ふよ。』

と言つて鈴木君も笑つた。

勝田君、君が僕のところへ遣つて來て呉れるのは、多く斯ういふ時だ。日がな一日佗しい單調な物音が部屋の障子に響いて來たり、果しもないやうな寂寞に閉される思をしたりして、しばらく人も訪ねず、日のあたつた黄色い壁などを慰みに獨りで靜かに坐つて居るやうな時が有ると、復た君が細そりと背の高い體軀に黑い木綿の紋附羽織などを著て遣つて來て、何年となく忘れて居た僕の前に坐つて、白い、神經質らしい、しかし器用な感じのする手で、長く垂れ下つた額の髮を搔き分けながら、

『苦髮樂爪とも言ふし、樂髮苦爪とも言ふね。』

そんな調子で君が話しかけて呉れやうとは思ひがけなかつた。

勝田君、初めて僕が君の手紙を見たのは築地の佐藤君の家の二階だつた。そりや君の名前は疾うから聞いて居たさ。まだ君に逢はない前のことさ。君は小竹君の許へ會見を申込んだことが有るだらう。あの手紙を僕が封を切つて讀んだ。あの時分に僕等は鈴木君や佐藤君や小竹君などと一緒で雜誌を出して居たから、てつきり是は僕等の社の方へ來たんだ、左樣僕は一圖に思ひ込んで了つた。讀んで見ると、君から小竹君への私信だ。彼樣なそゝつかしいことをしたと思つたことは無いよ。丁度小竹君が佐藤君の家の二階へ見えたから、僕は顏を紅くして散々あやまると、小竹君はまた小竹君だ、僕等から見れば細君もあり子もある位の人だから、

『なあに、ラバアからでも來たんぢや有るまいし——』

左樣言つて、小竹君は輕く笑つて、君からの手紙を受取つた。

あの時は伊勢町の明石君も來て居た。君とラバア——小竹君の言草が面白いと言つて、明石君は手を打つて笑つた。明石君は若い時から直ぐ左樣いふところへ

氣が附いたからね。

『小竹君――どうだつたね、勝田君に逢つて見て。』

と後で僕が聞いて見た。君と小竹君と顔を合せるといふのは餘程僕等の好奇心を引いた。君もまた小竹君の家へ行つて隨分默つて坐り込んで居たと見えるね。多分君が小竹君に逢つたのは彼の時が最初で、そして終だつたらう。

小竹君は君を認めた一人だ。僕は左樣思ふ。その證據には、小竹君が君のことを書いたものを見ると分る。君もあれを讀んでから逢つて見る氣に成つたのだらう。まあ大抵のものなら、自分を認めて呉れたと思ふやうな人に對して、攻擊の態度には出ない。ところが君は激しい。君は後で小竹君のことを何と言つたね。小竹などは自分が泥溝の中へ陷沒ちて居て、他まで陷沒ちると言つて叫んで居る手合だ。眞實に、君には讓歩といふことが殆んど無いのだね。君はまた彼の時分

に羽振の好かつた人をつかまへて、毒吐いたことが有るだらう。比喩だなんて、何だ、これは。類の無い大きな鼬鼠を御覽じろと言ふから、見世物小屋へ入つて見ると、三尺ばかりの板に血を塗つて、それ鼬鼠〳〵と言ふやうなものだ。君のはあの調子だ。

去年の暮、僕はある雜誌に君の話をして、もつと君は認められても好かつた人だ、君は誤解された人だ、反抗の心に充ち溢れて居た君はどうかすると忿怒をもつて世の解誤に酬いた、これがます〳〵君の誤解された所以だと言つた。君の江戸趣味は迎へられても、君の神經質は世に容れられないものかも知れない。

勝田君、君の知つて居る頃から見ると、僕もこれで種々な話をするやうに成つたらう。一時は隨分僕も默つて居る方だつたからね。あの時分に今の僕だつたら、あるひは今日まで君があの時分の元氣で居たら、左樣思ふのが斯の生涯だらうか。

そんな風にしてすべての知人や、朋友や、親戚や、それから情人などが過ぎ行くのだらうか。

もし、假りに君が斯の世に生きながらへて居るとしたら、奈何なものだらう。恐らく僕は君に面と向つて斯樣な風には話せまい。昔は僕も長い〳〵手紙などをよく書いたものだが、年月の經つに隨つて段々短く成つて來た。用だけしか書かなく成つた。それも葉書で濟ませるところは成るべく簡短に。君から貰ふとしても、例の細い、特色のある字で、鈴木君と一緒に飯を食つてるが、やつて來ないか位に過ぎなからう。そこへ僕が出掛けて行つたとして、精々機嫌の好い君の口脣から酒の上の小唄の一つも聞いて、ヨウ〳〵めづらしく出ましたねなどと串談半分に戯れるに過ぎなからう。君が料理の通を振廻したところで、僕は聞いて居ることも有り、聞いて居ないことも有る。君は君で食ひ、僕は僕で食ふ。君は僕

を奴隷にし、僕を弄び、僕の生命にまで食ひ入らずには置かなからう。それなら、もう澤山だ。

だから僕は死んだ君がやつて來て、しみ〴〵と物を言つて呉れる方が可懷しい。孤獨の幻よ。今といふ今は何事でも自分の言ひたいと思ふことが自由に君に言へる。

君が知つて居る大學生で山村君といふ人が有つたらう。彼の若々しい眼ざしは君の記憶にもあるだらう。あの人も出世した。今では立派な御役人だ。しばらく僕も引込みきりで居るものだから、正月は一つ種々な家を訪ねて見やうと思つて、新年早々親戚廻りをして、根岸から谷中を通つて不忍の池の端へ出、あれから本郷へかゝつて牛込にある親戚の家まで行つた。暮から降つた雪は殘つて、山の手の樹木の間から眺めて行つた時は、平素隱れて氣のつかないやうな、町々の屋根

も白く顯はれ、何となく都會の眺望を變へて見せた。丁度山村君の家へも近かつたら、寄つて、二人で庭を眺めながら途次見て來た話をしやうとすると、柔い雪の印象の大部分は逃げて行つて了つた。どうも仕方の無いものだと僕は思つた。鈴木君も今では牛込の方だ。そこへも訪ねたいとは思つたが、日は短し、暮方で寒くは成つて來るし、それぎりにして家の方へ歸つて行つた。御茶の水橋にさし掛つた。湯島の方から見ると、白々と雪の積つた駿河臺が甲武線の石垣のところでクッキリと黑く落ちて居て、まるで大きな城郭を望むやうに思はれた。あの雪の中についた線、石垣の色、薄くて暗い町々のゴチャ〳〵と面白い眺望は、死んで居る君にでも話さなければ、とても生きて居る君などに話さうとしたところで、言へもしない。僕の見る光は君の見る光……僕の感ずる空氣は君の感ずる空氣……あの時、僕は死んだ甥のことも胸に浮べて、甥に斯の景色を見せたら、と思つた……君は知るまいが、僕はあの甥の眼を見るやうな氣もした……

勝田君、僕が本郷の森川町に居た時分には君もよく遣つて來たね。あの古い庭に向いた部屋を借りて居た時分が、そも〳〵君が僕のところへ來始めた頃ではないか。

森川町には僕の學校友達が居る。あの友達のところへ僕が金を借りに行つた時、『ほんとに貧乏な連中ばかりだなあ。何處を見渡したつて、金の有りさうな友達は一人も居やしない。』

斯う憐むやうに言つて、それからあの友達は君の噂もして、

『勝田には君、用心して交際ひ給へ。ウッカリすると彼の男には酷い目に逢ふぜ。』

左樣言ひながら快よく金を出して貸して呉れた。

君が惡人だといふ評判の傳はつて居ることを、僕は全く君に關係の無いあの友達の家へ行つて知つた。

佐藤君や鈴木君に君が交際するやうに成つたのも、あの頃だらう。

『でも、勝田のやうに捨鉢に成れば、あれも亦た面白い。ナカ〳〵彼樣は成れないものだよ。』

斯う佐藤君などは一方で君のことを言つて居た。僕等と違つて、君は疾くに一家を成して好い年配だつたのに、相變らず妻も迎へず、釜土も持たず、下宿の二階に臥たり起きたりして居た。その中で、君が自分の弟に學資を貢いで勉强させて居たことなどを知るものは、恐らく少數の人の間だけだつたらう。

君は僕が借りて居る部屋の外を廻つて、庭から上つて來て、時には長いこと默つて坐つて居た。よく彼樣に默つて人の部屋に居られると思ふほど默つて居た。

僕の貧しい本棚には種々な書籍が雜然と並べてあつた。君はそれを眺めて居て、

『和洋折衷だね。』

何か君は言つて見なければ蟲の納まらない人だ。

『ホ、萬葉集が有るね。一つ借りて行つて見るか。』

と言つて君は僕のところから持つて行つたことも有るが、しかし僕が知つてからの君は讀むことはあまりしなかつたやうだね。

『本なんか讀んだつて、讀まないたつて、同じだ。』

左樣いふことの言へる君の下宿へ大學生などが押し掛けて行つて、君にカブれて歸つて來るのを見た時は、確かに君はエライと思つたよ。

君は一度來出すと、續けて何度も何度も來る、來ないと成るとパッタリ來ない。

ある日も庭から僕の部屋へ上つて、誰かの噂をした後で、

『話せないやうな人間なら、玩弄物にでもするより外に仕方がない。』

直ぐに左樣だ。何だか君が薄氣味惡く成つて來たことも有つた。

『君は僕を弄ぶつもりかい。』

と僕が言つたら、君は笑つて居たではないか。

君も異人には感心したと見える。君が木村さんのところへ行つて、『ファウスト』の梗概を聞いて來た時には、全く君も感心した顏附で、

『どうも異人はエライ。彼樣いふことを考へてる——實は僕も、惡魔といふものを書いて見たいと思つたが、異人はもう疾くにそれを遣つてる。』

全く西洋の書籍に親まなかつた君が斯ういふことを言ふかと思ふと、僕は面白いと思つた。ほんとに君が小竹君だけの西洋の學問をして居たら、同じ君の洒落でも、もつと〳〵違つた言ひ廻しが出來たらうに。

『どうせ人間は一度は墮落する。同じ墮落するものなら、一人でも道伴のある方が好い——』

『それで君は僕のところへ遣つて來るのかい。』

あの時の話には思はず君も苦笑したつけ。

『僕は君、冷いかねえ——世間ではよく其樣なことを言つて僕を攻擊するが。』

と君が言葉を繼いで、輝いた眼で僕の方を見た時は、僕のところへ話し込みに來る君の心がいくらか通じたやうな氣もした。でも、僕には君が熱いとも冷いとも言へなかつた。君のは一緒こだから。

話の途中で、君は僕に紙を呉れと言つたらう。何をするのかと思つて僕が見て居たら、君はその紙を丁寧に細く疊んで、羽織の紐の乳のところに結び著けたらう。

『斯うして置けば大丈夫だ。』

と君は言つた。君は何か思出したことを後で忘れない爲に、さういふところへ細く氣の附く人だ。君の記憶力は非常に好かつた譯だ。

勝田君、君と佐藤君と僕と三人で目白の方まで歩きに行つたのは何時分だつたらう。あの時分の郊外は今から思ふと別の世界だ。目白には君の知らない學校などが建つし、家はドシ〳〵出來るし、驚くほどの開け方サ。あの日は隨分歩き廻つた。畠の中をぐる〳〵歩いたかと思ふと、杜のあるやうなところへも出たね。

君は人を馬鹿にして、

『深林の逍遙。』

すると佐藤君も噴飯して了つた。

世間見ずの僕には君の無遠慮な仕打が内々口惜しくて堪らなかつたから最初君に逢つた時分には『先生、先生』と君を呼ぶことにして居た。見給へ、君だつて『先生』と呼ばれてはあまり好い心地はしなかつたらう。だから僕はわざと呼んでやつた。斯い智慧は僕は小竹君から敎はつた。それを君に應用したのだ。尤も『先生』と呼ばれて君が迷惑するよりも、僕の方が先に草臥れた。郊外へ一緒に歩きに行く時分には、それは止しにした。

何處を奈何歩いたかと思ふほど歩き廻つて、僕等は赤羽の停車場へと出た。確か左樣だつたらう。あの停車場は赤羽だつたらうと思ふ。乾いた土、葦簾掛の休茶屋などはまだ僕の眼にある。君は休茶屋に腰掛けて居る客を見つけて、しばらく話しに行つて、やがて復た佐藤君と僕の立つて居る方へ戻つて來た。あの時、葦簾の影から君を見送りながら出て來た客の姿を眺めて、僕は一代に盛名のあつた人の末路を見た。何となく人目を避けて居るらしく、可傷しく見えた。過ぎし

春を忍ぶ老鶯の風情、僕は左樣思つた。でも君や僕等のやうな粗末な下駄は穿いて居なかつた。

『あんまり流行兒に成るから左樣だ。』

口にこそ出さなかつたが、君の眼附は確かに言つた。あの時ほど僕は君の平氣で居る樣子を見たことが無い。

佐藤君と言へば、あの溫厚な人が一頃書いたものは餘程激しいところを帶びて居た。一時は明石君や僕などと一緒にロセッチの愛の歌に讀み耽つた人が、

『ラブなんてものは飯を食ふやうなものだ。』

と言出して來た。その調子は一歩〳〵君に近づいて行つたかとも思ふ。しかし、もと〳〵佐藤君と君とは足場が違ふ。君は愛を無視して掛つて居るし、佐藤君の愛を看破しての論だ。だから佐藤君は左樣言ふだけにして止めて置いた。

『ほんとに、勝田のは飯でも食ひに行くやうだ。』

と言つて、佐藤君は君の態度の冷靜なのに感心したやうに僕に話した。丁度禪宗の坊さんでも褒めるやうに。

勝田君、君が人を褒めたのをめつたに僕は聞かない。誰に新體詩が解るものかの、誰はまるで殿樣だの、君の眼中には殆んど人が無かつたやうだ。實際、君はまた左樣信じて立つて居たんだらうね。君も寺島さんだけは褒めた。『寺島は感心だよ。』とよく君は言つた。

『大抵のものは途中まで行けば引返さないが、寺島だけは引返す。』

佐藤君が君に感心したとは別の調子で、君は寺島さんに感心して僕に話した。本郷は君の下宿のあるところで有りながら、君は酷く本郷を嫌つた。嫌ひながら住んで居たところが君だ。あの頃は僕等の仲間は大抵本郷に居た。

ある日、君は僕を誘ひに來て、一緒に大學の前へ出た。

『オイ、車夫、何處でも好いから本郷を離れて吳れ。』

と君が辻待の車夫に言ひ付けて車賃も定めずに引出させやうとした時は、車夫は酷く面喰つた顏附で、

『旦那、何方へ參りませう。』

と言つて、車の上に乘つて居る僕等の顏を見上げたではないか。

『何處でも好い。本郷を離れさへすれば好い。』

君の註文には車夫は一寸當惑の體で、僕等二人を乘せながら梶棒を揚げた。二人乘といふ車は、あの時分には簡便なものだつた。

君はよく彼樣いふ氣紛れなことをやつたね。車夫は本郷の通を引いて行つて、やがて切通坂を下りた。

あの時、君が僕を案内して吳れたのは隅田川の見える前川の下座敷だつた。あの駒形の鰻屋は僕は初めてだ。もう暮方で、燈火が點いた。女中が註文を聞きに來た。左樣、左樣、君は懷中をさぐつて、これで鰻を燒いて吳れと言ひながら紙幣を女中に渡したらう。一寸したことだが君の遣り方だ。

前川を出た頃は暗かつた。

『――そこいらをブラぐ〜歩かうぢやないか。』

と君が言ふから、僕も一緒に歩いて、淺草田町の蒲鉾屋の前あたりへ出た。一頃僕が三輪に住んだ時分はよくあの蒲鉾屋のある長い通から土手へかけて往來したものさ。寂しい貧しい感じのする、ところぐ〜に灯の泄れた、暗い人家の續いたところを横手に見て通つて、そのうちに明るい町へ出た。仁和賀のある頃には僕も三輪から踊り屋臺を見に歩き廻つたが、その見覺えのある高い幾層かの建物な

どが僕の眼に映つた。種々雑多な影が僕等の眼の前を往つたり來たりした。中には人の前に立つてはしこく案内顔に過ぎ行くものも有つた。君の洒落は宵闇と酒の醉とに紛れて入り込んで來たやうな人達だの、帽子面深に冠つた男だの、自分で自分のものを奈何使はうかと思案顔な若者だの、それらの人の中を極く平氣で見て歩いた。あの時僕等は西鶴の物語などを引合に出して細い小路から小路へと話し〳〵見て廻つたではないか。舊い芝居にでも有りさうな眩目しい色彩が行く先に展開したではないか。時には格子先に取りついて人を呼ぶ鋭い聲を聞いたではないか。散々君の御供をして歩き廻つて、終に淺草公園の方へ出た。君に言はせるとあれで矢張散歩かね。

駒形には君の死んだずつと後に成つて、僕の甥が住んだことがあつた。あの邊の町は君の氣に入りさうなところだ。あの古い鰻屋へも僕は行くことはあるが、

いつでも二階の座敷へばかり通つて、欄から直ぐ下の棧橋に繋いであるいけす舟や、流れて行く川の水などを見ては歸つて來る。去年の八月のはじめ、法事の歸りに客と下座敷へ集つて見ると、そこが初めて君の案内して呉れた部屋らしいのさ。その時は佐藤君も來て呉れた。あの床の間から部屋の間取の工合から、そこに置いてある白い衝立の古風な錦繪まで、一切江戸づくめな夏座敷で、佐藤君と君の噂をした。隅田川も最早君が知つて居る時分の隅田川では無い。白魚も居ない。でも涼しい川風は座敷の内へ通つて來た。瀟洒などは言つても、今の都會風の建て方から見ると、どこか無骨な、ガッシリとしたところが有る。彼樣いふ純粹な江戸風の殘つた家は今では東京の中でも左樣たんと有るまいと思ふよ。

勝田君、君には諸方の飲食店へ連れて行つて貰つたね。いつでも君にばかり奢らせた。君は殆んど僕の方で金を出さうとする餘地すらも與へなかつた。左樣言

へば、鈴木君や佐藤君と四人連で、公園で柔い牛肉を煮て食つたことが有るではないか。ヂリ〳〵甘さうな音のする中で、煮へるそばから氣の立つやうなやつを皆な盛んに食つた。二人づゝ牛鍋を控へて、鈴木君は佐藤君とさしむかひ、君は僕とさしむかひだつた。見て居ると、君は食ふばかりでなく煮るのが樂みといふ風で、白い葱を鍋の片隅に丁寧に積上げて見たり、白瀧は白瀧、燒豆腐は燒豆腐とそれ〴〵寄せて煮て、紅い生の肉が段々色の變つて來るのをヂッと見て居たりした。あれから僕等は二人づゝ車で本郷の方へ歸つて行つた。あの時は僕はすこしばかりの酒に苦しく成つて來て、君と一緒に乘つた車の上で吐瀉したことが有つた。

しかし勝田君、あの時分の血氣壯んな群の中に君を置いて考へるといふことは面白い。佐藤君の下宿へはよく連中が集つて話したが、どうかすると君は默つて

……氣味の惡いほど默つて、佐藤君の黃色い机の側に坐りながら皆なの話を聞いて居た。山村君などは大學の帽子を手にしてやつて來て、若々しい調子で話し込んだ時は、そこに居るもの丶耳を傾けさせずには置かなかつた。

默つて山村君の話などを聞いて居た君は終に何を言出すかと思ふと、

『さん〴〵物を思ひ給へ。』

それが君の言草だ。

何時だつたかも、山村君は君の噂をして、僕に向つて、

『あの勝田君の眼を見給へ――あんな恐しい眼が有らうか。』

と言つたことが有る。

君のやうに靜かに、しかも確かに斯の世を歩いて行つた人を僕はあまり見掛けない。――どうかすると、音もしないほど靜かに――忍び足で――

その調子で君は椎名のお茂さんの家へも訪れて行つたのだらう。

『まあ後學の爲だと思つて、一緒に來て見給へ。』

なんて君が僕を誘ひに來て言つて、夜更けて椎名の家の戸を叩いたことが有るではないか。

お茂さんはあの時奈何して居たらう。もう病氣で亡くなつた後だつたらうか。左樣だ。居ない筈だ。お母さんとお菊さんとから僕等は何か御馳走に成つた。

『ほんとに勝田さんは面白い。』

とお母さんが言つたことを僕は覺えて居る。椎名の家のためには多少君も迷惑を掛けたことも有らうが、しかし盡したこともよく盡したね。

お茂さんの葬式を出すといふ前の日かに僕は一寸椎名の家へ弔みを言ひに行つた。なんでも君が怒つて了つて手が著けられない、と言つてお菊さんは途方に暮れて居る。そこへ僕は飛び込んで行つた。話を聞いて居るうちに、露西亞煙草の粉が膝へ落ちて、僕の著物へは燒穴が出來た。では奈何すれば可いと言ふんですか、兎も角出すものは出すやうにするが好いぢや有りませんかと僕が聞いたら、女の一量見にも行かないとお菊さんが言ふものだから、その足で僕は君の下宿へ行つて見ると、君は君で勝手にするが好いといふ顔付で、說が行はれなければ退くより外は無いと言つて居る。それから僕は君を椎名の家へ引張つて行つて、お茂さんの棺の置いてある側で、君等の間へ入つたことが有つた。

それぎり僕は君等の處置に任せて置いて、口嘴を容れなかつたが、後に成つて君が僕のところへ來て、

『印紙の貼りッ放しはヒドい。』

と言つて笑つたらう。

あそこを僕はお菊さん達の女らしい、自然なところかとも思ふよ。年を取つたお母さんのことを考へて見給へ。女ばかりの世帶でよくあれまでにやつたと思ふね。

勝田君、君は僕の家で新花町の角へ引移つてからも訪ねて來たことが有らう。君が來て話して行つた隣の部屋には年增の女の笑ひ聲がした筈だが、君は氣が著かなかつたか。田舍の女には似合はないほどの洒落者だ。

『どうして、彼の人は苦勞人だ……』

と君が行つた後で、その女が君のことを評したよ。見る人が見れば、左樣いふものかしら、と僕は思つた。苦勞にも、君、いろ〳〵有るからっ

僕はあらゆる藝術を味へるだけ味はうといふやうな若い量見をもつて、いくらか取つて居た教師を辭し、東北の方から歸つてもう一度一書生の身に返つた。それが初めて君に逢つた頃の僕さ。僕がヴァザリの美術史などを開けて伊太利の文

藝復興期時代の文學と繪畫の關係を尋ねたいと思つたは、もうずつと以前からだ。詩人であると同時に美術家であつた P.R.B 社中の運動などは餘計に斯の心を深くさせた。君に逢つた頃はまた、しきりに文學と音樂とを並べて考へたい時代で、シユウマンの『音樂と音樂者』などはあの當時僕が讀み耽つた書籍の一つだ。一度思ひ立つたことは兎も角もそれを試みないでは居られないのが僕の性分だ。そこで僕は音樂の世界へもいくらか足を踏み入れた。僕は上野の音樂學校でそこに藏つてある圖書を獵ることを許された。バハの傳などが有つて、借りて讀んで見た。

斯ういふ僕の位置は我儘な氣樂なやうでも、苦しいことも多かつた。僕はあまり自分の爲たいことを爲ると言つて非難されると同時に、一方では眞實に自分をショパンやワグネルまで連れて行つて呉れるやうな人も見當らなかつたから。

もし僕が金に窮るやうなら助けやうか、と君が佐藤君を通じて言つて寄して呉

れたのも、あの新花町に母や兄と一緒に居た頃だつた。そりや君の厚意は感謝したさ。けれども僕だつて君が高利貸に苦められて居たことを知つて居る。左樣いふ深刻な性質の金で君が僕を助けやうと言つて呉れても、それは僕の本意で無いと思つたから、そのことを佐藤君に話して君に斷つた。

君は佐藤君に、

『どうせ僕だつて足りないさ——足りない序に、何とか仕やうぢやないか。』

と話したさうだね。

彼樣いふ君の行動は何となく今に成つて思ひ當る。君が椎名の家の方へ歩いて行つてお菊さん親子の力に成らうとした心は、やがて僕を助けやうと言つて呉れた心ではなかつたらうか……それほど君の心は寂寞を極めたものでは無かつたらうか……斯うして音のしないほど靜かに、忍び寄る雨のやうに、復た僕のところへこつそりやつて來て呉れるといふは昔ながらの無言な君ではないか……

姉さんが亡くなつてからのお菊さんも氣の毒なやうだつた。しばらく何處かの屋敷づとめなどに行つて居たことも有るではないか。秋葉の大將が心配して、獨りで椎名の家を立て通すなんて譯にも行くまいから、いつそ緣附いて、お母さんを安心させた方が好からうと成つたのだらう。それから君の方へ話が有つたのだらう。君も斷る位なら何故最初からお菊さん母子に彼樣に深切を盡したのかね。そこが君だ。君なら賴母しいと思ふやうな人でもなんでも、君は極く冷然として答をしたのだらう。

妙なもので、散々苦勞を仕拔いたお菊さんが今では立派な旦那さんが有り、子福者で、家は榮えて居る。お菊さんもなか〳〵やり手だね。安心し給へ。

同じ本郷の中でも君が動いた下宿の二階へ僕は訪ねたことがある。日がカンカ

ン部屋の障子へ射して朝といふよりは晝の方に近いほど明るい光の中で、

『今漸く起きたばかりだ。』

と言ひながら、君は小さい長火鉢の前に坐つて、例の長い髪を搔き上げた。朝寢て疲れたらしい君の容貌にはまだ夢の中の心地が殘つて働いて居るやうにも見えた。

部屋には飾りらしい飾りも無かつたが、でも瀟洒と取片附けてあつて、好い心地がした。君は何を待つとも無いやうな樣子で、長火鉢に掛けてある鐵瓶の湯を急須に移して、朝顏なりの茶呑茶椀に茶を注いで僕の前に置いた。

勝田君、あれきり僕は君に逢はないだらうか。それとも、ホラ、鈴木君や佐藤君と四人一緒に成つた時君は低い沈著いた聲で小歌か何かを口吟んで、なぐさみに僕等に聞かせたことが有らう。爽やかな笑ひ聲が君の神經質な口唇から泄れる

度に、病人のやうにデリケヱトな君の手まで動いた。あれが最後だらうか。

僕が東京を去るやうに成つてからも、一時絕えて居た君と鈴木君との交通が復た長く續いたやうだね。

『勝田は彼樣いふ男だけれど、復たやつて來るところが面白い。』

といふ意味の言葉を、たしか鈴木君の口から僕は聞いたやうに覺えて居る。

『何かにつけて思出すところを見ると、矢張彼の男には變つたところが有つたと見える。』

近頃に成つて鈴木君はそんな風に君の話をある雜誌に出したこともあるよ。

地方に行つて、僕は一度君の洒落を聞いた。三橋さん——誰が言出したのか、あの人は以前から若い翁のやうに呼ばれる——あの三橋さんが雜誌を出した時、昔のよしみに僕にも何か言へといふから、三橋さんも大變若返つたものだと僕が

書いて送つた。するとその次の月の雜誌を手にして見ると、君の洒落が載つて居る。君は僕の書いたものを引合に出して、彼の男があんなことを言つたが、三橋老人は決して若返つたとは見えない、彼の男も今では田舍の居候だ。山猿にしてはちと色が白過ぎるまでだ。あれを讀んだ時は、ア、勝田君はまだ〳〵達者で居るナ、と左樣僕は思つたよ。そして君の洒落を難有く頂戴した。何故といふに、僕の心は自分をあらはすに適當な清新な形式を探し求めて居る時だつたから――

勝田君、君も小田原へ行く頃には最早全く默つて了つた人のやうだつたね。戰士のやうに強い君の聲は段々短く、きれ〴〵に成つて行つて、終は僕の耳〳〵は聞えなく成つて了つた……深い深い雪の中に埋められた聲のやうに……

勝田君、あれほど强情を言ひ通して居た君が到頭降參して、世話する女の人と一緒に晩年を送つた。その話が近頃に成つて復た鈴木君と僕の間に出た。

『でも、勝田のやうな男が最後に極く平凡な女を見つけたところは面白い。』と鈴木君が言ふから、

『成程ねえ。大きに左樣だ。』と僕は鈴木君の言葉に感心した。

鈴木君は僕の顏を見て笑ひ出すぢやないか。『前に君の言つたことなんだよ。』

『左樣かナア。僕がそんなウマいことを言つたかナア。』

と言つて僕は半信半疑で笑つた。

どうも僕は自分で言つたことのやうな氣がしない。矢張鈴木君の言葉としか思はれない。よしこれが鈴木君の串談でないとしても、そのために長いこと思出しもしなかつた君の晩年が復た僕に光つて見えて來たとしたら、誰の言葉でも好い。

勝田君、僕は今、柳橋に近い町の中に住んで居る。種菓子屋の隱居さん夫婦がもと住んだといふ家を借りて居る。僕がこゝへ引移つて來た頃は、周圍は割合に

閑静な町で、古い商家のある町々に續いて、昔のまゝの板葺屋根さへつい此頃まで二階から見られた。僕の家の裏には常盤津林中のおかみさんも居るし、前には英一蝶の子孫の住む家もある。一つ通を置いて古い漢方醫の多紀の家のあともある。一中節の家元、長唄の師匠、その他音曲にたづさはる人々の住家も多い。斯ういふ町々に殘つた空氣はあるひは君の心を悅ばせるものが有らうかと思ふ。

しかし柳橋も變つた。船宿の窓の灯が裏河岸の水に映つたといふことなどは、もうずつと昔話に成つた、舊兩國の夜見世は淺草橋の通へ移り、橋も掛け替り、以前の廣小路の跡には君の知らない小さな公園が出來た。その爲に一部の狹斜の街は取拂はれて、僕が今住む方へ流れ込んで來た。町の三分の一は見る間に新しく建て直つた。僕の隣には待合が出來、筋向ふには藝者屋が越して來た。暗かつた細い路地々々は急に明るく成つた。を時の間にか僕の二階は三味線の音で取繞

かれた。

こゝへ來て僕は君の口からそく平といふ藝者の名を話のついでに聞いたことを思出した。君は若い時に、人に連れられて來て、斯の土地で多くの榮華と凋落とを見たといふ話を僕にしたことが有らう。山村君の所謂恐しい君の『眼』は左樣いふ中で早く開いたのではないか。そく平といふ女の名も今では極く僅かの人の口に殘つて居る。私がお酌の時分に、もうそく平さんは立派な姉さんでしたといふ女を見れば、白髮を染めて居るやうな人だ。君の名を記憶するやうな女は恐らく居まい。一頃兩國橋の畔に近いところに增田屋の看板が出て居たが、近頃ではそれも見えなく成つた。

勝田君、君は世と戰ひ、當時の文學者と戰ひ、迫り來る貧しさと苦痛とも戰ひ、しかも冷然として死んだ。斯樣な風に僕は君の一生をある雜誌に書いて見た。君

は微笑むだらうか。鈴木君の話に、勝田は陋巷に窮死したやうなことが世間では言ふが、どうして亡くなつた本所の家へ行つて見ると、勝田は勝田らしい家を見つけて居た、と僕に話したことも有るよ。

ある年、まだ僕の甥が生きて居た頃のことだ。いかに言つても僕は今の住居が狹くて困るものだから、河一つ越して本所の横網の方へ家を探しに出掛けた。河岸からすこし折れ曲つた町の中に、往來に向いて面白い窓のある、屋根の高い平屋を見つけた。裏の方へ廻つて見ると板塀で圍はれて庭も可成廣さうに見える。大屋さんも近いものだから、寄つて聞くと、部屋の數も相應にある。しばらく明けてあるからもし借りて呉れるなら屋賃はまけて置くといふ。大屋さんの娘は裏口の木戸を開けて僕を案内して呉れた。外から見掛けたより廣い家で、片隅の一部を仕切つて誰かに貸してある。庭の植木の間からそこに住む人の居ることが分る。戸を開けて上つて見ると、往來に接して窓のある部屋は茶の間に成つて居て、細い古風な戸棚などが壁の中に造りつけてある。何の部屋へ行つて見ても實に好く出來て居るが、なにしろ薄暗い、壁などまで黑ずんだ綠色に塗つたところさへある。そのうちに、しばらく人も住まないやうな陰森な感じが身を襲ふやうに遣つて來た。

何となく身内がゾーとして來て、僕は獨りで暗い戸棚などを見て居られなかつた。恐しさのあまり、その空屋を飛出した。

『奈何いふ家だらう。』

と僕は日の映つた裏の板塀の外へ出て、種々に想像して見た。

あまりに部屋々々が好く出來て居るので、それに僕は心を引かれた。歸りに大屋さんの家へ寄つて話して見ると、そこの娘の口から君の名が出て來た。

勝田君、君が最後に移つて住んだのは僕が見て來た家の一方に仕切つてあるところなんださうだね。僕はそれとは知らずに君が枕した部屋の隣を歩いて居た。尤も壁は厚くて殆んど隣の物音は聞えもしないほどヒッソリとして居たが。

それから二三日經つて、どうもまだ僕はあの家を斷念することが出來なかつた。甥を連れてもう一度一緒に見に行つた。甥の意見をも聞くつもりだつた。

『まあ、來て見給へ。』

と僕は甥を誘つて行つた。

『へえ、こゝが勝田さんの亡くなつた家なんですか。』

と甥は僕と一緒に往來に立つて隣の方の窓を外から眺めた。甥は君のことも蔭ながら知つて居たからね。

復た大屋さんの娘に戸を開けて貰つて僕等は表の入口から入つた。

『表の見附は何でもない家のやうで、内へ入つて見ると實に凝つたことがしてある——昔の人は考へて造つたものですナア。』

と言ひながら甥も見て廻つた。

『惜しいナア。いかに言つても暗いね。』

と僕は部屋々々へ甥を連れて行つた。その暗さは普通の暗さでなくて、妙に朦朧とした暗さだつた。身體の震へて來るやうな暗さだつた。

『下屋敷にでも造つたものだらうか。變に陰氣な家だね。』

『さうですねえ。』

『一寸、君、向ふの方を見給へ。何か芝居にでもあるお嬢さんが長い髪の毛を垂げて立つて居さうぢやないか。』

僕は茶の間の横の暗い突當りにある白い古風な襖を甥に指して見せた。甥も見

て笑ひもしなかつた。

『暗い。暗い。』

と甥も深い廂から日の光の射した縁側の方へ出て言つた。

『叔父さんの神經で厭だと思つたら、御止しなすつた方が好いでせう。』

斯う甥も言ふものだから、僕等は互に顔を見合せて、やがて復た二人で心地の好い日の映つた家の外へ出た。到頭僕は借りることを見合せた。

君が以前住んだといふ隣の家の勝手口からは、おかみさんらしい人が顔を出して、僕等の方を見て居た。

勝田君、甥も今では君と同じやうに最早斯の世には居ない人だ。それから復た僕の家では人數も小勢に成り、住慣れた今のところに落著くやうにも成つた。

夕日は二階の部屋に滿ちて來た。壁も、障子も、僕の眼前にあるものは何もか

も深い色に輝いて來た。一度聞えなく成つた君の聲は此節復た僕の耳に聞えて來た。下座敷には今、遠い旅から歸つて來た人が居る。十年の餘も音信を聞かなかつた人が居る。その年老いた客のために、僕は夕飯の仕度をさせやうと思ふ。

左樣言へば勝田君、君は以前とすこしも變らないではないか——殆んど舊のまだ——君よりはずつと年少であつた僕などが、髪の剛い故か、餘計に白いやつが目立つと此節では言はれて居るのに、君の長い髪の毛は何時までも黑々として見える——

無言の人

無言の人

麹町の見附内にある教會堂では、質素な弔ひの儀式が濟んだ。風琴の前に腰掛けて居た婦人は讃美歌の譜を閉ぢて、元の席に戻つた。親戚一同の代りとして起つた人が、會葬者の方へ向いて、丁寧に挨拶し、猶墓地は青山であるけれども、遠方のことでもあり、見送りは御斷りする、それが親戚一同よりの願ひであると述べた。

黑い布を掛け、二つの花輪を飾つた寢棺はアルタアの下に置いてあつた。その

中には肺病で亡くなつた耶蘇信徒の遺骸が納めてあつた。やがて寢棺は牧師や友人などに前後左右を持ち支へられて、中央の腰掛椅子の間を通り、壁に添うて會堂の出入口の方へ運ばれて行つた。

斯の寢棺に手を掛けて行つた二人の男が引返して來ると、灰色な壁のところには一人の仲間も立つて居た。斯の三人は亡くなつた信徒の舊友で、一緒に同じ學校を卒業したのは二十一年も前に當つた。

『吾儕の仲間はこれだけかい。』

と一人が言つて、同窓の友達を探すやうな眼附をした。

『誰かまだ見えさうなものだ。』

と他の一人も言つた。

會葬の爲に集つた人達は思ひ〳〵に散じつゝあつた。しばらく三人の舊友は會

堂の内に殘つて、歸り行く信徒の群などを眺めて立つて居た。二階樓敷風に出來た柱の下の方から來て、三人の立つて居るところに近づいたのは、親戚の代りに挨拶を述べた人だ。以前の學校の幹事さんだ。

『遠藤も可哀さうなことをしました。』

幹事さんは三人に挨拶した後で、亡くなつた信徒のことを言つた。

『遠藤君は子供は幾人あつたんですか。』と一人が尋ねた。

『四人。』

と幹事さんは言つて見せて、『後がすこし困るテ』といふ言葉を殘しながら、三人に別れて行つた。

『一寸、牧師さんに挨拶して來るか。』

と一人は言出した。

牧師は風琴の置いてある方に手を拱いて腰掛けて居た。亡くなつた人の爲には、極く若い學生時代に教を說いて聞かせるから、今また弔ひの說教までして面倒を見た牧師だ。舊友等は連立つて挨拶に行つた。

『先生、私の顏が御分りになりますか。』

『えゝ分ります。』

と牧師も笑つて挨拶した。

三人が歸りかけた頃は、會葬者は大抵出て行つて了つた。人氣の少い會堂の建物だけ殘つた。正面にある尖つたアーチ風の飾、高い壁、質素なアルタア、すべてまだ割合に新しく見えて心地の好いペンキの色で塗つた柱と柱の間には澤山腰掛椅子が並べてある。模倣の樣式で成立つて居るやうな建物の內部には左右の壁に瀟洒な梯子などを渡して、新意を加味したところも有つた。窓々に射す五月の

光線はアルタアの横にある大きな花瓶の花や葉に映つて、高い天井の下を靜かに見せた。一方の出入口に近い壁の側には、信徒らしい二人の女が並んで立つて居た。こゝは亡くなつた遠藤が生前來てはよく腰掛けたところだ。

早や棺も墓地の方へ舁がれて行つた後だ。會堂の前には車に乘らうとする女連が殘つて居た。三人は一緒に石階を降りた。

青山まで行かうといふものも有つたが、そこで御免蒙つて、三人とも見附をさして歩いた。久し振で一人の仲間の家の方へ誘はれて行つた。

『何年振で會堂へ來て見たか……矢張會堂の内は靜で好いネ。』

『僕も復た來やうかナ。』

『あの教會は、僕が以前籍を置いたとこだ。』

『君は左樣だつけネ。』

『兎に角、靜かな場所の一つだよ……人が居ないと、猶好い……』

話し〳〵行くうちに、三人は舊い見附跡に近い空地のところへ出た。風の多い塵埃の立つ日で、黄ばんだ煙が渦を卷いてやつて來る。其度に三人は背中をそむけて、塵埃の通り過ぎるのを待つた。

蒸々と熱い日あたりは三人の眼にあつた。牧師がアルタアの上で讀んだ遠藤の畧傳——四十五年の平凡な人の一生——互にその舊友のことを思ひながら、城下らしい地勢の殘つたところについて、緩漫な坂の道を靜かに上つて行つた。

『先刻の説教も惜しいことに、終の方へ行つてすこし誇張した氣味だネ。』

『でも、まだ彼の牧師だから、あれだけに厭味がなく聞かせるんだよ。下手な牧師ど來て見給へ——貴方がたも教を信じて置かないと、斯う成りますよ。左樣いふ調子だ。』

『牧師も彼樣なれば立派なものだ。感心した。矢張年を取らんけりや駄目だネ。』

『今日は、あまり説教などを聞きたくなかつた。もつと僕は悼むやうな言葉でも聞きたかつた……吾家からやつて來る途中では、しきりに遠藤君の死んだことを考へたつけが、會堂へ入つてから反つて其樣な心が起らなかつた……』

『一體、あの祈禱といふものは變なものだネ。』

『しかし會堂へ行つて一番聞いて見たいのは、祈禱だよ……あれで、教會の内がもつと樹蔭のやうな清しい氣分のするところだつたら好からうと思ふネ。』

『左樣あるべき性質のものだらう。』

同じ會堂でも、簡素を重んずる新教の方と、人の官能に訴へる部分の多い、色彩とか音樂とか、香料とかに富んだ舊教の方との比較などをして、それを佛教の寺院に宛嵌めて見たり、中世の教會を引合に出したりして、思ひ〳〵のことを話して行くうちに、三人は長い坂の道を餘程上つた。

『先刻、僕が吾家から出掛けて來ると、丁度御濠端のところで皆なに遭遇した。僕は棺に隨いて會堂までやつて行つた。』

『ア、、さう……』

『面白い話がある。一體、君と僕とは何方が宗教に返るポッシビリチイが有るだらう、とK君が聞くからネ——遠藤の許で一緒に成つた時の話サ——そりや僕の方が有ます、と言つたサ。』

『さあねえ……』

『するとK君が、「左樣ですか、私共から見ると丁度反對に考へられます」ッて……何故と言ふに、君は耶蘇教を惡く言ふが、僕は好いとも惡いとも言はない……惡く言ふだけ、まだ君の方には脈が有るかと思ふとサ……』

何時の間にか土手の向ふに青葉まじりの町々を望むところへ出た。

『吾儕のクラスでは、最早幾人亡くなつてる？』

『二十人の卒業生の中が、四人缺けて居たんだらう。遠藤君を入れて五人目だ。』

『まだ誰か死んでやしないか。もつと居ない樣な氣がするぜ。』

『この次は誰の番だらう。』

『さあ……』

暫時、三人は默つて歩いた。

『この三人の中ぢや、一番先へ僕が行きさうだ。』

『いや僕の方が怪しい。』

『ナニ、君は大丈夫だよ。僕こそ一番先かも知れない。』

『ところがネ、僕はマヰるものなら、斯の一二年にマヰつて了ひさうな氣がする……無事にこゝのところを通り越せば、ずつと長く生きられるかも知れないが……』

復た煙のやうな風塵が恐しくやつて來た。三人は口の中がヂヤリ〳〵するほど、砂を浴びた。

斯の人達はある見附跡を越して、一層塵埃の舞ひ揚る濠端へ出た。そこまで行くと、仲間の一人の家に近かつた。

『葬式の歸りがけに押掛けるなんて。』

『いや、どうして——斯うして揃つて來て貰ふことは、めつたに無い。』

斯樣なことを言ひ合つて、やがて三人は眺めのある二階の座敷に寛いだ。今迄歩いて來た土手のつゞきは反對にそこから望むことが出來る。遠見の草は青々として心地が好い。

『遠藤君などと一緒に學校を出た時分――あの頃は、何か面白さうな事が先の方に待つてるやうな氣がしたよ……斯うして居るのが、是が君、人生かねえ……』

『左樣サ、是が人生だ。僕は左樣思ふと變な氣のすることがある。』

『もうすこし奈樣かいふとこは無いものかナア。』

『そんなに面白いことが有ると思ふのが、間違ひだよ。』

『ツマラない。』

『ツマラないと言へば、誰だつて君、ツマラないさ。』

『眞實にツマラない。どうしても斯の儘ぢや、僕には死に切れない。』

『ラブでも始めるサ。』

『何か面白い話でもしようぢやないか。』

と言つて、それから一人が次のやうな話を始めた。

ある海岸の寺院のことだ、長いことそこの部屋を借りて數學を勉強して居た男があつた。寺院には、和尙さんに、大黑さんに、それから娘が二人もあつた。皆な質朴な、好い人達だから長く居るうちに男はすつかり懇意に成つて、寺院のものも同樣に思はれるほど親しくした。

男も質朴な、好い人だつた。毎年極りで數學の試驗を受けに都會の方へ出掛けて、歸つて來ては復た寺院に籠つて勉强した。早いもので、和尙さんの娘は二人とも相應な年頃に成るし、姉さんの方などはウツカリすると最早お嫁に行き損ふ位の年に成つた。ある夏のこと、男は例のやうに試驗を受けに出掛けたが、不思議にも口の利けない人に成つて歸つて來た。

奈何したといふんだらう。と和尚さん始め寺院の人達は呆れた。和尚さんは考へた。いづれ數學にでも凝り過ぎて斯樣なことに成つたに相違ない。そこで、紙と筆を渡して、男に書かせて見ると、全く口の利けないといふことが解つた。姉娘などは悲しがつて、男の勉强して居る部屋へ行つて見るが、言葉といふものは一語も聞かれなかつた。

斯の無言な人は時々海岸の方へ走つて行つて、遠く寺院を離れて、誰も知つた人の居ない砂山へ馳け上り、松林の間へでも出ると、そこで思ふさま大きな聲を出して叫んだ。男は砂山を下りて、復た岸づたひに口の利けない人に成つて寺院の方へ戻つた。

ある日も、男は沈默の苦痛に堪へられなく成つた。寺院のある漁村から一里ばかり離れて、同じ海岸に可成賑かな湊町がある。そこに面白い、隱れた田舍醫者

が有る——そんな田舍には過ぎた人だと言はれる位——書生の好きな、よく若いもの丶世話をするやうな人物だから、自然と男もその醫者に知られて、有望な青年と思はれて居た。斯の田舍醫者は何でもやるやうな人だつた。雞も飼ふ、野菜も造る、菊も植ゑる、學問も相應にあつて、聞けば和算のことなども知つて居る、そこへ男が訪ねて行つた。丁度醫者は病家廻りに出掛けた留守だつたから、細君や子供を相手にして、草臥れるほど種々と喋舌り續けて歸つた。

寺院の大黑さんが湊町の醫者の家へ寄つたことがあつた。男の噂が出た。醫者の細君は何事も知らないから、男が來て、いろ丶な話をして行つたことを告げた。口の利けない人だとばかり思つて居た、と大黑さんは非常に立腹して、早速寺院へ歸り、そのことを和尚さんにも娘達にも告げた。

到頭、男は寺院にも居られないやうに成つた。湊町の醫者の許へやつて行つた、

何故、そんなトボけた眞似をした、と醫者が聞いたら、男も實に正直な人で、書生らしく頭を搔いた。斯の男の答は、堅い、質朴な性質をよく顯はした。和尙さん始め大黑さんでも、姉娘でも、寺院の人達の眼は物を言つて困つたから……

亡くなつた舊友の噂は、斯樣な話の後で、復た三人の間に引出されて行つた。

『何か遠藤君の置いて行つたやうな話は無いかねえ。』

『さうさ……別に是と言つて、置いて行つたやうな話も無かつたナ……』

柳橋スケッチ

柳橋スケッチ

一、日光

左樣だ、光と熱と夢の無い眠の願ひ、と言つた人もある。斯ういふ言葉を聞いて笑ふ人もあるだらうか。もしこれが唯の想像の美しい言ひ廻しでなく、實際斯の面白さうなことで滿されて居る世の中に、光と、熱と、それから夢のない眠より外に願はしいことも無いとしたら、奈樣なものだらう。丁度私はそれに似た名狀し難い心地で、二週間ばかり床の上に震へて居たことが有つた。

過る年の冬の寒さも矢張斯の神經痛を引出した。私が靜座する習癖は――實は私はそれでもつて自分の健康を保つと考へて居るのだが――それが反つて斯うした疼痛を引起すやうに成つたのかも知れない。それに喋舌が煩しくて、月に三四度づゝは必ず賴んだ上手な按摩も廢めた。私は自分の身體が自然と回復するのを待つより外は無かつた。はか〳〵しい治療の方法も無いと言ふのだから。

私は眠られるだけ眠らうとした。ある時は酣醉した人のやうに、一日も二日も眠り續けた。我等の肉體は、あの意味から言へば、絕えず病みつゝあるのかも知れない。それを忘れてゐられるほど平素あまり寢たことも無い私は、斯ういふ場合に自分で自分の身體を持てあました。ある時はもつと重い病でも待受けるやうな心地で、床の上に眼が覺めることがあつた。不思議な震動が私の全身に傳はつ

て來た。それが障子の外に起る町の響か、普通の人の感じないやうな極く輕い微かな地震か、それとも自分の身體の震へか、殆んど差別のつかないもので有つた。私は自分で自分の眠が恐ろしく成つて來て、枕許にいろ〳〵な本や雜誌を取出して讀んだ。

『我等藝術の憐むべき勞働者よ。普通の人々にはしかく簡單に自由を與へられるものも、我等には何故に容易に許されぬであらう。それも理である。普通の人々は眞心を持つ。我等は遂に眞心の何物をも持たぬ。我等は到底理解されざる人間である……。』

斯の言葉に籠る可傷しい眞實を私は寢ながら思ひ續けた。

回想は私の心を高い煙突の立つた火葬場の方へ連れて行つた。長く續く貧しい町々、畠中にある細い平坦な一筋の道路、車の兩側へ來て煩いほど取附く乞食の群、左樣いふものが雜然と私の胸に浮んで來た。今でもまだ私はあの待合處に朝早く集つた人々の顏、入口の棚の上に並べてあつた陶器の壺、床の間に掛つた地獄極樂の繪などを記憶でしかもあり〳〵と見ることが出來る。私達は導かれて、天井の高い、薄暗い、赤煉瓦の建物の中へ入つた。そして大きな竈の鐵の扉の前に立つた。御坊がその中から、灰色に燒け遺つた貝殼のやうな骨や、齒や、それから黑い海綿のやうに焦げた腦髓などを取出して、私達の前に置いた。それが私の妻だ。

回想は又、私の心を樹木の多い靜かな墓地の方へ連れて行つた。長雨の降り續いた後のことで、墓守が掘つた土の中には黃に濁つた泥水が涌き溢れて居た。墓守は兩手を深くその中に差入れたり、兩足の爪先で穴の隅々を探つたりして、小さい髑髏を三つと、離れ〳〵の骨と、腐つた棺桶の破片とを掘出した。殘酷な土

の臭氣は私達の鼻を衝いた。丁度八月の明るい光が綠葉の間から射し入つて、雨降揚句の墓地を照らして見せた。蒸々とした空氣の中で、墓守は汚れた額の汗を拭ひながら、三つの髑髏の泥を洗ひ落した。その中でも一番小さく日數の經つたのは頭や顏の骨の形も崩れ、齒も缺けて取れ、半ば土に化して居た。一番大きいのは骸骨としての感じも堅く、齒並も揃ひ、髮の毛までもいくらか殘つて、まだ生々とした額の骨の邊に土と一緒に附著して居た。それが私の子供等だ。

すべてこれらの光景に對しても、私は涙一滴流れなかつた。唯、見つめたまゝで立つて居た。憐むべき觀察者。然り、我等は遂に眞心の何物をも持たぬのであらう。

多くの悲痛、厭惡、畏怖、艱難なる勞苦、及び戰慄は、私の記憶に上るばかりでなく、私の全身に上つた——私の腰にも、私の肩にまでも。

"The whole of winter enters in my Being—pain,
Hate, horror, labour hard and forced—and dread,
And like the northern sun upon its polar plane,
My heart will soon be but a stone, iced and red."

私は斯の歌の意味を切に感じた。その意味をヅキ〳〵病める疼痛で感じた。斯ういふ中で、最も私の心を慰めたものは、本間久雄君が譯したオスカア・ワイルドの『獄中記』であつた。私は床上であの翻譯を讀むのを樂みとした。

いかなる苦痛も、それが自己のものであれば尊いやうな氣がする。すくなくも人は他人の樂みにも勝つて自己の苦みを誇りとしたいものである。しかし私は深夜獨り床上に坐して苦痛を苦痛と感ずる時、それが痲痺して自ら知らざる狀態にあるよりは一層多く生くる時なるを感ずる度に、斯くも果てしなく人間の苦痛が

續くかといふことを思はずには居られない。

オスカア・ワイルドは傷いた天才のやうな傲然とした調子で、ある時は人目も忍ぶ囚人の心弱い調子で、一生の憤りと感激とを泄らして居る。

彼、『獄中記』に駄多をこねて曰く、

『神々はありとある凡てのものを私に與へた。私には天才があつた、優れた名前があつた、高い社會的地位があつた、潑剌たる情緒、智力的勇悍があつた。私は哲學をして藝術たらしめ、藝術をして哲學たらしめた。私は人々の心根を更へ、事物の色彩をも更へた。私の言つたこと、乃至行つたことで世人をして驚嘆せしめなかつたことは一つとしてなかつた。私は最も客觀的形式の藝術として知られて居る戯曲を取つて、それを抒情詩や小唄の如き主觀的表白の藝術を造り上げた。同時に戯曲の範圍を擴め、その特質を豐富にした。私は僞りなるものも又眞なるものと等しく、同樣の領域を占むべきが眞理であるとなし、眞僞は要するに智識的存在の形式に過ぎないことを明かにした。私は藝術を以て最高の現實となし、人生を以て作り物語の單なる樣式となした……それらのことに關しては私は全く他人と異なつた天才を持つて居たのである。けれども私は、又、愚かな、姪逸な安佚の永き連鎖に吾れと吾身を誘はれるに委せた。私は流行兒を以て自ら任じ、洒落者を以て自ら快しとした。自分の周圍をも亦、多くの小人物、卑しい心の人人に取まかれるに委せた。私は吾れと吾天才の浪費者となつた。而して曾て自分に不可思議な喜悅を與へた永への若さを恣まゝにするやうになつた。高きものに疲れ果てた私は、更に新しき刺激を求めて一向に下劣きに就いた……

……私は最早靈魂の支配者でなくなつた。而もこれを知らなかつた。私はたゞ〳〵快樂の命ずるまゝに身を委せた……。』

風流にして才氣ある貴公子の面目がこれを讀むと想像される。同時に人をして斯の姪逸な一生に何が根強く潜んで居たかを思はしめる。彼は二年牢獄に呻吟して堪へがたき絶望に陷り、悲痛のかず〳〵のありとある心持を經驗したとまで記して居る。所謂流行兒であるならば、そこを終の幕としたかも知れない。否、そこまで行かなかつたかも知れない。『獄中記』の面白味はそれから更に始めやうとしたところにある。彼は悲哀のかず〳〵も、一生の根柢に横はれる苦痛も、拭ひ難き恥辱も、墮落も、隱れたる卑しき行ひも、罪惡も、乃至身に蒙れる刑罰までも、直にそれを靈的な意味あるものに化さうと努めた。彼の『新生』とは人生を以て藝術の形式と成すにあつた。斯くして始まる藝術的生活は結局一種の作り物語であらうと思ふけれど、彼の所謂智力的勇悍には動かされる。

『私にして、私が到著し得る最高のところを言明すれば、それは藝術的生活の絶對的實現といふ境地である……ペータアはその「快樂主義者マリウス」に於て、藝術的生活と、深い、快い、而かも嚴かな意味に於ける宗教的生活とを融合しようと試みた。けれどもマリウスは要するに一種の傍觀者に過ぎなかつた……ワーヅワースは詩人の眞の目的を、人生の諸相を適當な情緒もて觀照するにあると言うたが、理想的傍觀者も亦、かくの如き觀照眼を有する。けれども要するにただ〳〵傍觀者に過ぎない。この人々は靜かに靈場の長椅子に腰うち掛けて、自分の眺めて居るところが悲哀の靈場であることに思ひ到るものは殆んど無いのである。』

見よ、いかに哀傷多き音調と、宗教的情緒の色彩と、そして性急な夢想とに富めるかを。

彼の聲はあまりに高くて、どうかすると直に嗄れて了ひさうな氣がすることや

警句百出して星の如くに其言説を飾るところから、見たところ多趣多様の趣はあるが、その基調を成すものは割合に單調な氣がすることや、それから野に埋れし寶の如く心の奥深く潜めるものは卽ち謙讓といふことであると説いて居るにも關らずその實、彼が嘲笑して傍觀者ほどの謙讓をも感ぜしめないことなどは、私の心を滿足させない。けれども私は慰藉を得た。私の病んで居る耳に、種々な快いことを囁いて呉れたやうな氣がした。私は種々な暗示をも受けた。その證據には、ボオドレエルの詩集と斯の『獄中記』は絶えず私が自分の枕許から離さなかつた許りでなく、若い友達で見舞に來て呉れる人がある度に、「苦艱は一種の長い瞬間である」といふ句だの「囚人の一人でも斯の世に象徴的な位置に立つて居ないものは無い」といふ一節だの、其他、彼の熱心な基督論に關する部分だのを引合に出して、かのガリレヤの農夫が幾多の驚嘆すべきことを單に己が身に想像したのみに止らずそれを實際に實現したといふ、あの魔力のある言葉などを話して聞かせた位だから。

十二月の末のある夕、私は床を離れて忘年會に行つた。集つた友達の中には久し振で逢つた人もあつた。私はまだ顔色が惡いと言はれた。N君はしきりに私に温泉行を勸め、春は早々箱根へ同行するといふ約束までした。O君もその仲間に加はるとのことだつた。

私は遠方に居る親しい友達などから見舞の手紙を受取つたが、どうかするとそれからも床の上に横に成つて、左樣いふ手紙を讀んだ。私はまだ臥たり起きたりして居た。

『心が渴いて來た——どれ、日光を浴びやうか。』

これはある畫家の版畫集のうちに、以前私が書いて贈つた言葉だが、丁度私の

願ひは斯の短い言葉に盡きて居た。長いこと友達も訪ねず、旅にも行かず、寒い部屋の中に閉ぢ籠つてばかり居た私は、國府津の海岸あたりの暖い日光に饑ゑ渇いた。

春が來た。正月らしい朝日が私の部屋の障子にあたつて來た。電車の車掌や運轉手が同盟罷工を行つて、東京の町々はめづらしく靜かだ。皆なぞろ〳〵年始廻りに歩いて居る中を、私も親戚の家だけ訪問して、二日には早や旅の仕度を始めた。

青い國府津の海は私を呼ぶやうな氣がして居た。私は一時も早く箱根へ急いで行つて、温泉の浴槽の中へ身を浸さうとした。

二、柳並木

『家の前はすぐ河岸で、石垣に添うて段々を下りられるやうに成つて居る。そこは淺草橋と柳橋との間に挾まれた位置にあつて、河口に碇泊する多くの荷舟からは朝餐の煙の登るのも見えた。白壁、柳並木などの見える對岸の石垣の下あたりには、動いて行く舟もある。』

これは私が小話中に書いた一節であるが、斯の位置は日本橋區よりの方から見た神田川の河口で、往時船宿の軒を並べ、行燈を懸けつらねたといふ場所である。

對岸は淺草區の領分で、釣船屋米穀の問屋、閑雅な市人の住宅などが、柳並木を隔てゝ水に臨んで居る。私が今住む町は妙に細い路地の多いところで、二三軒置いては必ずこの小路があるから、どのヌケミチを取つても私は神田川の方へ出ることが出來る。朝に晩に、私は河岸の方へ歩きに出掛ける。

いつぞや國民新聞記者が訪ねて來て、半日の日記を求めるから、私は好んでこの河岸を散歩することを書いた。すると、K君といふ未知の人から手紙を貰つた。K君は矢張私と同じ河岸を好んで歩く人であつた。手紙の樣子で見ると、K君は、三年ばかりも前からの柳並木のかげを往來して居る。吾儕二人は互に逢つたことも無いが、同じ場所を見つけたといふことだけでは不思議に一致した。

それからK君は私に逢ひたいと言つて來た。此節私はあまり人に逢ひ過ぎると思ふから、そのことをK君へ書いて、未知の友の一人として君の名を記憶した

い、吾儕二人は互に同じ柳並木のかげを樂まうではないか、斯ういふ意味の返事を出した。

十月初旬のことであつた。私はK君から葉書を受取つた。

『今日の夕闇に、久しぶりで例の河岸を歩きました。頰へ觸れるまでに低く垂下つた枝葉の青い香を嗅いだ時は、何故とも知れぬ懷しさに胸が踊りました。彼處の樹蔭には、石が御座いませう。あの上に私は腰を掛け、膝の上に頰杖といふ形で、貴方が其處を歩かれる時のことをさまざまに想像して見ました。』

斯う若々しい筆跡で認めてある。猶、逢ひたいといふ望みは強ひて捨てたと附記してあつた。

それから私は河岸へ歩きに行く度に、K君のことを思ひ〳〵した。K君から見れば、河岸は私だ。私から見れば、河岸はK君だ。斯う私は思つた。なんぞとい

ふと私は訪問の客に隨いて、その河岸まで歩いて行くのが癖で、ある日も瓦町に住む×君を送りながら、例のやうに家を出た。吾儕は柳の下に蹲踞んで、種々なことを語り合つた。印象と記憶の關係や……夕方に淺草橋の下を流れる水の色や……波に映る灯や……

其時×君と私は、岸に繫いた舟の方へ運ばれる病人を見た。水の上に住む人達と思はれた。病んで居るのは年をとつた女で、倉と倉の間にある細い路地のところから出て來た。醫師の許へ通ふのであらう、と思つて見て居ると、病人は人々の肩にかゝつて、石段の下へ移されて行つた。舟の上には女の兒が三人ばかり遊んで居た。暫時吾儕の心は斯の光景から離れることが出來なかつた。

十月の中旬、私はK君から葉書を受取つた。逗子から出したものだ。その中に『海は青く光つて居ますが、それを見ても別に斯うといふ考へも湧きません。例

の柳並木の方がむしろ靜かです。』斯樣なことが書いてある。K君と私とは、唯同じ水を眺め、同じ土を踏むといふだけの交りに過ぎない。他に吾儕は互に書くことがない。例の柳並木――それで吾儕の心は通ふやうな氣もした。

十一月に入つて、K君から長い手紙が來た。それには若い人に有勝な、憂鬱な心の境が細々と書いてあつた。その時は私は急に返事も出さなかつたが、河岸へ行くと其手紙を胸に浮べて、K君といふ知らない人――まあ私の想像では十七八の青年のことを思つて見た。

『物象の明かな時が來ました。柳並木も枯々と成りました。今朝も河岸を歩いて君から來た手紙を胸に浮べました。』

斯う簡單に私は葉書を書いてK君の許へ出した。

今度は更に長い返事が來た。

『先日彼のやうな手紙を差上げましてから、私は非常に懊悩いたしました。定めて妙な奴だと御笑ひで御座いませう……實に自分で自分の愚かさを笑はずには居られません……私には母もあり、兄弟もあり、友人もありますけれど、何故か始終堪へ難いほどの淋しい生活を送つて居ります。殊に先日、あの手紙を差上げてからといふものは、以前よりか一層淋しく賴りなく感じて、夜も碌々眠られぬほど思ひ惱みました……あれから、柳並木を二度ばかり歩きました。黄ばんで縮れ返つた葉の力なさを見ると、何となく傷ましい思に包まれます……人々は此頃の物象を何ういふ眼で觀て居るでせうか。私の心は矢張哀愁から離れることが出來ません。私は何故物事を樂しく愉快に見聞し、且つ思ふことが出來ぬのでありませう……この夏×さんの御宅の前を通りました時、二階の御部屋にある澤山の本が見えました。あれだけの本を讀むには、何の位時日がかゝるだらう、などゝつ

まらぬことを考へ乍ら通りました……また勝手なことを長たらしく書いて了ひました。失禮は吳々も御許を願ひます……今夜御葉書を拜見しました時、Kと呼ばれたやうな氣がいたします……。』

是が吾儕知らないもの同志の互に通はせて居る消息である。

今日もまた私は河岸へ歩きに行つた。

三、柳橋

この界隈より日本橋方面へ電車の便を取らうとするものは、是非とも淺草橋を

渡り、あの樹木のすこしばかり殘つて居る廣小路まで出て乘らねばならぬ。あそこで線路は二岐に別れて、往きには大傳馬町、本町などを廻り、還りには市區改正中の石町、鐵砲町、馬喰町を通り過ぎる。よく私もあの邊を往來する。そしてある暗い暖簾を掛けて、町の兩側で荷造りなどをする、ところによつては新しい簞笥やそれから種々な商品を高く積み重ねてある、黑い奥深い土藏造の問屋が軒を並べた町々を電車の窓から眺めて通る度に、私は少年時代の記憶を喚起さずに居られない。

伊勢町といへば私は友達の生れた繪具問屋を聯想し、本町といへばあの四丁目の角の砂糖問屋であつた家を聯想する。殊に本町の家にあつた茶室風の靜かな座敷は、往時同志の青年が集つて、夜の更けるのも知らずに文學、美術を談じたところである。數寄を凝らした床の間、爐、壁の色——あそこで雜誌が毎月編輯さ

れたものであつた。『時』は人の住居をいろ〳〵に動かした。友達も動けば、私も動いた。本町でも、伊勢町でも、今では皆な懷しい記憶の家である。

町家の變遷にも驚かれる。米澤町あたりは全く町の姿を一變して了つた。あの名高い煙管屋の跡などは奈何成つたらう。人形町邊も變つた。あの通りには藤掛といふ古い袋物屋があつて、そこで『高祖遺文錄』を取次いだものであつた。あの店などは相變らず榮えて居るであらうか。花屋敷の古本屋も今では見當らない。濱町、不動新道、竈河岸、皆な變つた。翁堂といへば、あの邊での好い菓子屋であるが、あの家などは舊のまゝにあると思つたら、暖簾は同じでも、代が替つて居る。

私は勝田の一門の繁榮を追想せずに居られない。それを考へると、確かに商家といふものゝ歷史が時代と共に一回轉したことを感ずる。唐物店、荒物店、下駄

店、其他勝田の暖簾を掛けた大きな問屋が、石町の通に軒を並べた頃は、實に全盛を極めたものであつた。もし本店の御隱居を中心にして、あの婦人の若い盛んな時から悲慘な老後までを傳へることが出來たなら、一時代前に榮えた大きな商家の面影を偲ばしめるであらう。私は吉村のおばあさんから、よくあの御隱居の話を聞くが、先代の菊五郎を贔負にして、舞臺の上から御辭儀をさせた程の豪奢を盡したものであるといふ。家が衰へてからでも、御隱居の芝居見物には、金を十圓包み、鴨を二羽添へて、それを俳優へ祝儀として出したとか。この勝田の分家にあたる勝新の娘の法事が淺草の寺であつた時、私は一度御隱居といふ人を見たが、その頃は勝新の方が榮えて、本店は最早餘程衰微して居た。勝田の一門は今は多く跡方も無い。御隱居も亡くなつた。鼻緒店、針店、この二軒が繼續して商業を營んで居るばかりである。

電車が開通してから、夜見世の位置も變つた。兩國の通へ出たものが、今では淺草橋の通へ出る。

成島柳北の書いたものを見ると、柳北の號は柳原の北からつけたもので、家は淺草森田町にあつた。柳北は淺草橋と左衞門橋の間あたりに住んだものと見える。

『柳橋新誌』に曰く、

『橋以柳爲名而不植一株之柳舊地誌云以其在柳原之末命焉。夫柳橋之地、乃神田川之咽喉也而與兩國橋相距僅數十弓。故江都船楫之利以斯地爲第一。而遊舫飛舸爲最多矣。其南赴日本橋八丁渠芝浦品川者、北向淺草千住墨陀橋場者、東則本所深川柳島龜井戸之來往、西則下谷本郷牛籠番街之出入、皆無』

不過此者。而遊五街娼肆、觀三場演劇、及探花泛月納涼賞雪之客、亦皆取水路于此。故船商之戸、舟子之口、星羅雲屯、非他境所及。而釣艇網舸之徒亦居其間。橋之東西連兩國橋之南北。各戸之舟舫、舳艫相銜、楫櫂相擊、其數不知幾千艘。』

これを讀むと、舟が重なる交通機關であつた安政の昔を想像することが出來る。同時に、兩國橋と柳橋とを控へた神田川の河口が殆んどその中心ともいふべき場所であつたことを知ることが出來る。今でも天氣の惡い時には、あそこへ荷船が集合して、風波を避ける爲に小さな港の趣を成して居るが、しかし往時の神田川ではなくなつた。屋根船は一艘しか殘つて居ない。淺草橋から柳橋へかけて、あの兩岸にある物揚場の裝置、高い石垣、古風な石段、鐵の鎖すべて往時の光景を語るものであらう。

神田川は到るところ面白い。湯島の杜の見えるあたりも好し、川下へ行つて白

い壁や赤煉瓦の壁が岸に接近して並んだ光景も好い。その面白さは、半ば死んだ水のやうに、欠伸をしながら都會の眞中を流れて居るところにある。濁つた、汚ない川だが、品川の海の方から青い潮が押し寄せて來ると、急に活々とした趣を呈する。多くの荷船はこの潮に乘つて川口へ入つて來る。

『柳橋新誌』の二編は、初編から見ると十二年の間を置いて出したとしてある。その中に元柳橋といふ言葉が出て居る。『余昔與竹西坡、飲于故柳橋某樓。題詩其壁云。嬌歌侑酒醉高秋。無限歡情卻惹愁。門柳蕭疎美人去。他年追感在此樓。距今僅七八年、而西坡老病流離于北地、當時紅裾皆凋落如晨星。余亦詫餘生於風塵中。每過故柳橋、仰見老柳橋、愴然感舊。有桓氏金城之歎。』この元柳橋は難波橋とかの別稱で、柳北の時代に別に柳橋が出來たと言つてある。兎に角、昔の柳橋の迹は今日野菜市場のあるあたりだといふから、燒けるとか、埋立てるとかして、地形は

餘程變つたものと見える。昔なかつたところに今では橋がある。船宿の廢れた迹に今では鷄が遊んで居る。

響――小諸から大久保へ、大久保から斯の市中へ、次第に私を引寄せた響が、今二階の障子に近く聞える。私が信州に居た頃、淺間の山腹にある山番へ通ふ途中で、しきりに耳を欹てゝ聞かうとした幽かな物の音も――小諸の古い城跡の側で、白い煙の見える度に立留つて、遠くなる汽聞かうとした汽車の音も――矢張この響であつた。今私はその響の中に居る。ある時は破壞するやうに恐しげな、ある時は眠たく物憂く單調で退屈な……どうかすると私はこの響を障子の外で聞くのか、自分の頭腦の内で聞くのか、よく分らないやうな氣のすることもある。

夕日は部屋の内に滿ちた。二階から屋根越に見える靴製造場の高い玻璃窓は光り輝いた。

私は空想の部屋を離れて、夕日の滿ちた町へ歩きに出た。そして初冬らしい、冷い空氣を呼吸した。柳橋の畔まで行くと、柳の葉は皆な落ちて了つて、枯々な茶色が丶つた細い枝を通して、寒さうな濁つた水が見える。船の影もない。埋立地について、料理屋の角を曲り、交番の前を通り過ぎると、やがて私は兩國橋の上に立つた。

本所の方へ歸つて行く人達、男、女、勞働者などが、いそがしさうに橋の上を通つた。兩國の公園の方を見ると、大福餅屋だの、西洋料理店だの丶高い屋根や

低い屋根が、ごちやゝ〳〵並んだ家と家との間のところへ、紅い夕日が沈んで行つた。

四、神田川の岸

夕日は神田川の岸に滿ちた。暴風雨の爲に枯れ死んだかと思はれるやうな柳並木の枝からは、二度目の新芽が吹いた。春先黄色い花と一緒に出た芽は最早黑ずんで了つたが、それが七月の柔かな若葉に混つて、冷しい風の中に動搖する。かがやく夕日を浴びて蘇生つたやうにも見える。橋畔の古い柳は幹の中ほどから吹き折られて居た。石垣から流の方へ倒れた枝は、既に半ば生氣を失つた。じりじり枯れるのを待つばかりだ。でも、逆さまに垂下つた半死の葉の中には、折れたまゝ吹いた芽が弱々しげに見えて居る……

日が暮れて行つた。

暗くなつてからも光の多い晩だ。一日の暑氣に酣醉したやうな人達は、いづれも涼しさうな白い浴衣を著て、灯のついた町々を歩き廻つた。長い霖雨の後、斯の暑氣は實に遽かにやつて來た。私は橋の畔へ行て川の方から來る夜風を待つた。鐵の欄干に倚凭りながら、涯もない空にきらめく星の姿、白々とした雲の群などを望んだ。私は酷しい疲勞もなしに——眼、耳、皮膚、其他の部分を通じて——蒸されるやうな身體の熱を樂むことが出來た。時ならぬ食慾をも感じた。

空は青白く、明るい。左樣言へば、家へ戻つて二階の裏の方の窓から町々の屋

根を眺めた時、向ふの白壁のところに淡い月光の映じて居るのを見た。

五、海岸

上總の海、到頭この海岸の漁村へ來た。私は長い間の海に對する渴を醫することが出來た。

富津行の荷物、其他上總通ひの客を載せて横濱を出發した帆船は實に快く走つた。十二分に風を含んだ帆はすこし船體を斜めにして、まるで青い波の上を滑つて來たやうなものだ。船の中で、船頭の煮いて呉れた飯も甘かつた。富津へ著いてから斯の漁村へ來るまでの海岸も、私の好きな道だ。私は波打際の細い砂をサク〳〵と踏んで、保養の爲にこゝに居るS君に逢ふのを樂しみにして來た。

毎日私は奈何いふ日を送つて居ると言つたら好からう。私達にはあらかじめ定められた規則約束、乃至考へ方といふやうなものが有つて、それに日常の行爲を宛篏めて見て居るのだから、その意味から言へば私は今、眞實に爲すこともなく日を送つて居る。けれども自分等の爲ることに氣が著いて見ると、斯くも矛盾した、筋道の無い、理窟に合はない、それを書きつけるさへ不可能だと感ぜしめるのが私達の生活の眞相だ。私達が日常の行爲の一面には、自ら奈何ともしがたき、又自ら知るところの無いものが有つて、しかもそれらの事の多くは無爲とか空虛とか平凡とかの言葉に隱されて了ふ。旅などに來て恣にして居ると、私は毎日自分の爲ることのあまりに連絡の無いのに驚かされる。

流動した斯の生涯は、私にとつては、ます〳〵漠然としたものと成つて行く。

私は村で評判の好い醫者と話した。斯の人は單衣一枚で斯の海岸へ著いたと言はれるほど艱難なところから出發して、今では立派な醫院を建て、無智な漁夫等から神様の如くに思はれて居る。私は斯の風采などにあまり頓著しない、男性的な、何となく好ましい田舍醫者から、S君の健康のことや、他の村醫者のことや、宿の人達の噂や、其他彼が馬に乘つて近在の病家を訪ね廻つた頃の奮鬪生活のさまなどを聞かせられた。私達は種々雜多なことを話した。後に成つて思出して見ると、私は斯の醫者から彼の結婚のこと、家族のこと、可愛い子供のことなども聞いた。まだ〳〵種々なことを聞いた。最早忘れて居て、思出せないやうなこともある。斯ういふ人と逢つて、何を私達は話し合つて、半日を送つたと言つたら好いだらう。書きしるされることの多くは、空しい輪廓のやうに思はれてならない。

實に茫漠として捉へ難いやうな氣がする。

海岸へ出て、旅らしく日に燒けた美術書生の海を寫生するのに逢つた。磯臭い砂地には他に人の影も見えない。斯ういふ邊鄙なところへ來て、靜かに風景を描いて居るといふことも可懷しかつた。で、私は邪魔に成らないようにと思ひながら、その美術書生の背後に忍んで、眼前に展けた海と、畫板の上に寫されて行く海とを見比べて立つて居た。若い畫家は私の方を振向くこともしないで、パレットの油繪具を取つてはそれで自分の思ふ色を著けて行つた。いくらか風のある日だつたから、繪具函まで砂にまみれて見えたが、若い畫家はそんなことに頓著なく、熱心な眼を動搖する波の方にそゝいで、どうかして自分の畫に深さを加へよ

うとして居るらしかつた。一つの色の上へまた他の色が塗られた。畫板には船の影さへ映じて來た。

これに私は失望した、何故といふに船の影が海に映ずるやうな夕方では無かつたから。猶見て居ると若い畫家は一日の仕事を終つたといふ風で、無造作にパレットの上に殘つた繪具を拭き取つて、汚れた布巾の一つは海の中へ投げ込んだ。そこ〳〵に繪具函をも取片附て、立上る頃には、私もその人の側を離れた。

物を確實にすることの出來ない私も、斯の影の無いところに影を造つて見る旅の美術家に比べると、まだしも自分の覺束ない判斷に信頼することが出來るかとも思つた。斯の美術家の見た海、私の見た海——海とは實にそれだけの話だ。海そのものに隱れた種々の不思議に關しては、私達は極めて知るところが少い。

憐むべき萬物の靈長、嚴しい私達の鼻も其實愚かな犬が嗅ぐほどの力も持たないし、鈍い牛が聞くほどの耳も持たない。私達は憐れにも無能な器官を擁して、狹苦しい感覺の世界に住み、跼蹐として一生を送るまでだ。

私は斯の岸の方へ卷寄せて來る海に——『永遠』そのものを見るやうな海に——もつと透徹することもあるかと思つて足を運ぶこともある。一目見渡した時の滑かな波の背、波の皺、渦、日光の反射、透き通るやうな海の色、それらのものが集つて自分の方へ入つて來る印象は鮮かに活々と感ぜられる。けれどもそれは極く僅かの間だ。忽ち私の心は攪亂されて了ふ。何だか恐しく成つて來る。退屈をも感ずる。私は海に對つて立つて居られないやうな氣がする。其時、私は逃出すやうに宿の方へ歸るか、さもなければ、何か紛れるものを見つけて、注意を他にそらすのが極りだ。一時間はおろか、三十分と一つ岩などに腰掛けて眺めては居られない。

斯の私の經驗から言ふと、世には一生風景を描いて居る美術家もあるが、よく左樣いふ人達は氣が狂はない――私は時々そんなことを考へることもある。

斯の海岸は殆ど女の國だ。遠く沖の方へ波に乘つて行く勇敢な壯丁も、陸へ上つては、から意氣地がない、一朝暴風雨に逢へば忽ち死別の悲しみを見ないとも限らないやうな生業から、彼等は陸上で優待の限りを盡される。讀書算術も女が多く修める。村役場の用も女が達しに出掛ける。男が大漁の祝に染めた長い上衣の裾を風に吹かせて、ブラ〳〵遊んで居る側で、女が紺の股引を穿き、鍬を肩に掛け、法螺貝の報知を聞いて道普請に出掛けるなどは、斯うした海岸でなければ見られない圖だ。

大漁の祝は又、このあたりを酒肉の世界と化する。多くの賤しい女が横濱あたりから入込んで來る。彼等は若者の飲食する相手になり、唄を歌ひ、金錢を湯水のやうに遣はせ、やがて祝の終る頃には船から別れを惜んで、復た元來た方へ漕ぎ返つて行く。

こゝには言ひ傳へられた種々な話がある。海を泳いで情夫の許へ通つたといふ海人が戀愛の物語などは、斯の邊の色の黑い女のアクチイブな情熱をしのばせる。

私の泊つて居る宿では、村の通路に添うて、店頭に雜貨を置並べてある。砂糖の類まで嚮いで居る。店には顏色の澤々した、肥つた内儀が坐つて、腕まくりで商賣をやつて居る。亭主は漁場に半生を送つた人で、今では、釣を道樂にすると

か、魚の買出しにでも行くとかの外には、大して用のない、氣樂な身だ。せつせと働いて食はせて呉れる稼ぎ人の内儀の側で、幸福な亭主は居眠りしながら網なぞすいて居る。

S君と一緒に私が借りて居る座敷は、斯の夫婦等の住居の奥にある新しく建てた二階の一間だ。海岸から少し離れたところにあつて、二階に居て海を望むことは出來ないが、欄の下に見える樹木の梢、家々の屋根などは、漁村のさまらしい。私達は灰白な貝殻の多い砂地を踏んで、裏庭から直ぐ海岸の方へ降りて行くことも出來る、その細い道も私の好なところだ。

S君は世辭の好い内儀のことを私に話して、彼女の前半生は横濱の南京屋敷で送つたものであるとか言つた。それは兎もあれ、あまり世辭の好いにも閉口する。

斯の宿に一人のお婆さんがある。七十近い、眼の見えない老婦だ。その年まで

生き延びたら、食ふといふ慾より外に殘らない人で、宛行はれた椀を大事にしては、食事の時間でなくともガツ〳〵震へて居る。暗い部屋に獨りで引籠つて居て、内儀の足音を聞きつける度に、例の椀をさしつけて拜むやうにする。

『お婆さん、朝の御飯が濟んだばかりだよ……そんなに食べたがつて、復た腹下しするよ……。』内儀に叱られては、お婆さんは、子供のやうに椀を引きこます、私は思ひがけない處で、人の一生の最後を見る氣がした。

私はよく年頃な婦人や可愛らしい娘などを見る度に、その人達の子供の時の容貌や、それから年をとつての、姿などを思ひ比べることがある。

『私達がずつと年をとつたら、奈樣な風に成るんでせうねえ。』

とある娘が言つたが、私は今、あの娘の言つたことを思出した。恐らく私が東京へ歸つて、斯の漁村で見たお婆さんの話をしたら、どうかして其樣に成りたく

ないものだと、あの娘(むすめ)などは言(い)ふかも知(し)れない。

幼き日

幼き日

（ある婦人に與ふる手紙）

一

私の子供が初めて小學校へ通ふやうに成つた其翌日から、私は斯の手紙を書き始めます。昨日の朝、吾家では子供の爲に赤の御飯を祝ひました。輝く燈火の影に夜更しすることの多い都會の生活の中でも、子供ばかりは夜も早く寢、朝も早く起きますから、弟の方も兄と一緒に早く床を離れました。兄は八歳、弟は六歳

に成ります。お人好しの兄に比べると弟はなか〳〵きかない氣で、玩具でも何でも同じ物が二つなければ承知しないといふ風です。ところが其朝に限つて、兄の方には新しい鞄や、帽子や、其他學校用のものが買つて宛行はれてあるに引きかへ、弟のためには子供持の雨傘と、麻裏草履としか有りません。弟は地團太踏んで、ぐずり始めました。兄と一緒に朝の膳に對つても、兄が晴々しい顏附で赤の御飯をやつて居る側で、弟は元氣もなく、不平らしく萎れて、不性無性に箸を執り始めました。そのうちに不圖思ひ附いたやうに、食事中自分の膳を離れて、例の新しい雨傘を取りに立つて行きました。それを大事さうに自分の膳の側に置いて、それから復た食ひ始めました。家のものが皆な可愛さうに思つて笑ふと、弟は自分の爲たことを嘲り笑はれたと思つたかして、やがてその雨傘を元の場所へ仕舞に行つて、今度は好きな御馳走も食はずに泣き續けました。

學校までは二三町あります。そこへ通ふ子供は馬車や自轉車などのはげしく通る廣い道路を越して、町を折れ曲つて行くのです。昨日の朝は家のものが一人隨いて、近所の子供や親達と一緒に學校へ行きました。今朝は送りにだけ行つて、試みに獨りで歸らせることにしました。

『兄さんは最早解つたやうな顔をして居ました。獨りで歸つて被入つしやいッて言ひましたら、ウンなんて――』

隨いて行つた娘は斯樣なことを言つて學校の方に居る子供の噂さで持切つて居ました。昨日學校の敎場で家のもの丶姿が見えなく成つたと言つて泣いたといふ話などもして笑ひました。

斯の兄の方の子供は、性來弱々しく、幾度か醫者の手を煩はした程で、今日のやうに壯健らしく成らうとは思ひもよりませんでした。皆なの丹精一つで漸く學

校へ通ふまでに漕附けたのです。それを思ふと斯兒は朝晩保護の役目を引受けて呉れた親類の姉さん達や下婢に餘程御禮を言はねば成りません。學校の終る頃には、家のものは皆な言ひ合せたやうに門口に出て、獨りで歸つて來る子供を待受けました。

『ア、兄さんが歸つて來た、歸つて來た。』と一人が言ふと、近所の人も往來に出て眺めて、

『まるで、鞄が歩いて來るやうだ。』と申しました。

學校歸りの子供は鞄を肩に掛け、草履袋を手に提げ、新しい帽子の徽章を光らせながら、半ば夢のやうに家の内へ馳込みました。

地方に居て絶えず私や私の子供のために心配して居て下さる貴女に、私は斯のことを書き送りたいと思ひます。貴女が著物を作つて送つて下すつたりした一番

年少の女の兒も、今では漁村の乳母の家で、どうにか斯うにか歩行の出來るまで、に成身したことを申上げたいと思ひます。

貴女もやがて二人の子の親とか。左樣言へば、四五日前に私はめづらしい蜜蜂が斯の町中の軒先へ飛んで來たのを見かけました。あの黑い、背だけ黃色な、大きな蜂の姿を斯ういふ花の少い場所で見かけるとは實にめづらしいことです。それを見るにつけても、貴女が今住む地方の都會の空氣や、貴女がお母さんの家の方の白壁、石垣、林檎畠や、それから私が自分の少年の時を送つた山の中の日あたりなどを想ひ起させます。人の幼少な頃——貴女は自分の子供等を見て、その爲すさまを眺めて、それを身に思ひ比べた時、奈樣な感じを起しますか。すくなくも私達の眼前に、それが幼稚な形にもせよ、既に種々雜多なことが繰返されて居るでは有りませんか。

私達が子供の時分、相手にするものは多く婦人です。私達は女の手から手へと渡されたのです。それを私は今、貴女に書き送らうと思ひ立ちました。斯の手紙は主に少年の眼に映じた婦人のことを書かうと思ふのですから。

二

私の側に今居る兄弟の子供が八歳と六歳になることは貴女に申上げました。彼等幼少いものを眼前に見る度に、自分等の少年の時と同じやうなことが矢張この子供等にも起りつゝあるだらうか。丁度自分等も斯樣な風であつたらうか。左樣思つて私は獨りで微笑むことが有ります。

私が今住む場所は町の中ですから、夕方になると近所の子供が狹い往來に集り、

ます。路地々々の子供まで飛出して來て馳け廻る。時には肴屋の亭主が煩がつて往來へ水を蒔いて歩いても、そんなことでは納まらない程の騒ぎを始める。吾家の子供も一緒に成つて日の暮れるのも知らずに遊び廻ります。夕飯に呼び込まれる頃は、家の内は薄暗い。屋外から入つて來た弟の方は燈火の下に立つて、

『もう晩かい。』

と尋ねるのが癖です。

早く夕飯の濟んだ黄昏時のことでした。私は二人の子供を連れて町の方へ歩きに行つたことが有りました。夕空に飛びかふ小さい黒い影を見て、あれは何かと兄の方が尋ねますから、蝙蝠だと敎へますと、子供等はめづらしさうに眼を見張りました、瓦斯や電燈の點いた町の空に不恰好な翼をひろげたもの丶方を眺めて居りました。斯の子供等の眼に映るやうな都會の賑やかな灯——左樣いふ類の光

輝は私の幼少い頃には全く知らないものでした。夕方と言へば、私は遠い山の彼方に燃えるチラ〳〵した幽かな不思議な火などを望みました。それは狐火だといふことでした。夜鷹と言つて、夕方から飛出す鴉ほどの大きさの醜い鳥が、よく私達の頭の上を飛び廻りました。それが私の子供の時を送つた故郷の方の空でした。

私は自分の少年時代のことを御話する序に、眼前に居る子供等のことも貴方に書き送らうと思ひます。私達が忘れて居て、平素思出したことも無いやうなことまで胸に浮ばせるのは、この子供等です。遠く過去つた記憶を辿つて見ると、私達の世界は朦朧としたもので、五歳の時には斯ういふことが有つた、六歳の時には彼樣いふことが有つた、とは言へないやうな氣もします。種々な相違した時のことが雜然一緒に成つて浮び揚つて來ます。そのくせ、極く小さな事で、忘れな

いで居るやうなことは、それが昨日あつたと言ふよりはつい今日あつたことのやうに、明瞭と、しかも微細な點まで、實に活々と感ぜられるのですが……

ある日の夕方も、私は弟の方の子供の手を引きながら散歩に出掛けました。斯の兒はナカ〳〵理窟屋で、子供のやうな顏附をして居ないといふところから、家に居る姉さん達から『こどな』といふ綽名を頂戴して居ます。大人と子供の混血兒といふ意味です。種々な問を起したがる年頃で、それは何處から覺えて來るともなく、『隨分滑稽だ』とか、『一體全體、譯は何だい』とか、柄にも無いやうな口眞似をしては皆なを笑はせる。往來を歩いて居ても、直に物が眼につくといふ風です。

『ア、一本の脚の人が彼樣なところを歩いてら。』

と二本の杖に身を支へながら行く人の後姿を見つけて、それを私に指して見せました。

電車通りの向側には、よく玩具を買ひに行く店があります。子供はその店の方へ行けと言つて、駄々をこねて聞入れませんから、私も持餘して、

『買つて、買つてッて……買つてばかり居るぢやないか。そんなに父さんは金錢がありやしないよ。』

漸くのことで子供を言ひ賺しまして、それから橋の畔の方へ連れて行きました。そこに煙草と菓子とを賣る小さな店があります。小さな硝子張の箱に鯛などの形した干菓子の入つたのが有りましたから、それを二箱買つて、一つを子供の手に握らせると、それで機嫌が直つて、私の行く方へ隨いて來ました。軟かな五月の空氣の中で、しばらく私は町の角に佇立んで、暮れ行く空を眺めて居りました。

『父さん、何してるの——あの電燈を勘定してるの。』

『ア、。』

『そんなこと、ツマラないや。』

子供に引張られて、復た私は歩き廻りました。

『最早御飯だ。早くお家へ歸らう。』

と言つて、吾家近くまで子供を連れて歸りかけた頃、何を斯の兒は思ひついたか、しきりに御飯と御膳の相違を比べ始めました。父のが御膳で、自分のが御飯だとも言つて見るやうでした。

『御飯と御膳と違ふのかい。』

と私が笑ひますと、子供は可羞しさうにして笑つて、

『知らない』

と言ひ放ちながら、急に家の方へ駈出して行つて了ひました。

恐らく斯の兒の強情なところは私の血から傳はつたものでせう。しかし私は斯の兒ほど泣き易くはありませんでした。丁度弟の方の子供ぐらゐな年頃のことでした。ある晩、私は遊友達の問屋の子息と喧嘩して、遅くなつて家の方へ歸つて行きました。叱られるなといふことを豫期しながら、果して、家の門を入つて田舍風な小障子のはまつた出入口のところまで行くと、私が問屋の子息を泣かせたことは早や家の方へ知れて居りました。やかましい問屋のお婆さんがそれを言附けに捩込んで來たといふことでした。で、私は懲らしめの爲に、そのまゝ庭に立たせられました。薄暗い庭から見ると、玄關の方も裏口の方も皆な戸が閉つて、唯小障子の明いたところだけ燈火が射して居る。私は夏梨の樹の下に獨りで震へながら、家のものが皆な爐邊に集つて食事するのを眺めました。日頃默つて居る兄の顔などは、私の仕たことに就いて非常に腹でも立てたやうに、餘計に畏しく

見えました。其晩に限つて、誰も救ひに來て呉れるものが有りません。斯の刑罰は子供心にも甘んじて受けなければ成らないやうなものでした。私は皆なの夕飯の終る頃まで、心細く立ち續けました。

斯ういふ時に、私の側へ來て言ひ宥めたり、皆なに御詫をして呉れたりしたのは、お牧といふ下婢です。目上の兄達が奥の方へ行つた後で、お牧は私の膳を爐邊へ持つて來て勸めて呉れましたが、到頭其晩は食ひませんでした。

私の生れた家では、子供に一人づゝ下婢を附けて養ふ習慣でして、多くは出入のものゝ娘から取りました。私に附いたお牧は髪結の家の娘でした。理髪店といふものは未だ私の故郷には無かつた頃ですから、お牧の父親が髪結の道具——あの引出の幾つも附いた、髪著油などのにほひのする、古い汚れた箱を携げてよく吾家へ出入したことや、それから彼の穢い髪結が背後に立つて父の腮などをゴシ

ゴシとやつたことは、未だに私の眼に著いて居ます。お牧の父親と言へば土地でも有名な穢い男でした。その娘に養はれると言つて、よく私は他から調戯はれたものです。でも、お牧は乳を呑ませないといふばかりで、其他のことは殆んど乳母同様に私を見て呉れました。

母や祖母などは別として、先づ私の幼い記憶に上つて來るのは斯の女です。私は斯の女の手に抱かれて、奈様な百姓の娘が歌ふやうな唄を歌つて聞かされたか、そんなことはよく覺えて居りません。お牧は朴葉飯といふものを造へて、庭にあつた廣い朴の木の葉に鹽握飯を包んで、それを私に呉れたものです。あの氣の出るやうな、甘い握飯の味は何時までも忘れられません。青い朴葉の香氣も今だに私の鼻の先にあるやうな氣がします。お牧は又、紫蘇の葉の漬けたのを筍の皮に入れて呉れました。私はその三角に包んだ筍の皮が梅酸の色に染まるのを樂みに

して、よく吸ひました。

『姉さん、何か。姉さん何か。』

と言つて、私の子供は朝から晩まで娘達に菓子をねだつて居ります。どうかすると兄弟とも白い砂糖などを菓子の代りに分けて貰つて居ます。それを見て、私は自分の幼少い時分に、黒砂糖の塊を舐めたことを思出しました。

私がお牧の背中に負さつて、暗い夜道を通り、寺の境内まで村芝居を見に行つたことは、彼女の記憶から離せないもの丶一つです。顔見世の晩で、長い柄のついた燭臺に照らして見せる異樣な人の顔、異樣な鬘、異樣な衣裳、それを私はお牧の背中から眺めました。初めて見た芝居は、私は眼には唯ところ〴〵光つて映つて來るやうなものでした。丁度、眞闇なところに動く不思議な人形でも見るやうに。

これほど親しいお牧では有りましたが、しかし彼女の輝の切れた指の皮の裂けたやうな手を食事の時に見るほど、可厭はしいものも有りませんでした。お牧の指が茶椀の縁に觸ると、もう私は食へませんでした。子供の潔癖は、特に私には酷しかつたのです。お牧ばかりでは有りません。私の直ぐ上は銀さんといふ兄貴で、この銀さんが洗手盥を使つた後では私は面も洗へませんでした。銀さんは又、わざ〳〵私を嫌がらせやうとして、面白半分に盥の中へ唾を吐いて見せたりなどしたものでした。

私の生れた家には太助といふ年をとつた家僕も居りました。この正直な、働くことの好きな、獨身者の老爺は、まるで自分の子か孫のやうに私を思つて呉れました。恐らく太助が私を愛して居たことは、お牧の比では無かつたのでせう。不思議にも、それほど思つて呉れた老爺と、朝晩抱いたり負つたりして呉れたお牧

と、何方を今でも思出すかといふに、矢張私はお牧の方に言ひ難いなつかしみを感じます。でも私は太助が好きでした。爐邊は廣くて、いつも老爺の坐る場所は上り端の方と定つて居りましたが、そこへ軟かい藁を小屋から運んで來まして、夜遲くまで私の穿く草履などを手造りにして呉れたのも、この太助です。それから大きな百姓らしい手で薪を縛る繩などをゴシ〳〵と絢ひながら、種々なお伽話や、狢の化けて來た話や、畠の野菜を材料にした謎などを造つて、私に聞かせるのを樂みにしたのも、この太助です。それを聞いて居るうちに私は眠くなつて、老爺の側で寢て了ふことも有りました。

太助の働く小屋は裏の竹藪の前にありました。可成廣い屋敷の内でしたから、そこまで行くには私は梨、林檎などの植ゑてある畠の間を通り、味噌藏の前を過ぎ、お牧がよく水汲に行く大きな井戸について石段を降りますと、その下の方に

暗い米藏が有りまして、それに續いて松薪だの松葉の焚附だのを積重ねた小屋が有りました。太助は裏山の方から獨りで左樣いふものを運んで來るのでした。その小屋の内で、一日薪を割る音をさせて居ることも有りました。

小屋に面して古い池が有りました。棚の上の葡萄の葉は青く淀んだ水に映つて居りました。石垣のところには雪下などがあの目ばたきするやうな白い小さな花を見せて居りました。そこは一方の裏木戸へ續いて、その外に稲荷が祭つてあります。栗の樹が立つて居ます。栗の花が枝から垂下る時分には、銀さんが他の大きな子供と一緒にあの枝から栗蟲を捕つて來たものですが、それを踏み潰すと、綠色の血が流れます。栗蟲の身から、銀さん達は強い絲の材料を取つて、魚を釣る道具に造りました。その原料を酢に浸して、小屋の前で細長い絲に引延して乾すところを、私はよく立つて見て居りました。栗の殼が又、大きく口を開く頃に

成りますと、毎朝私達は裏の方へ馳附けて行つたものです。そして風に落された栗を拾はうとして、樹の下を探し廻つたものです。それを人の知らない中に集めて置いて、小屋の前で私に燒いて呉れたり、母屋の爐邊の方まで見せに持つて來て呉れたりしたのも、太助でした。

何かにつけて私はイヂの汚ないやうなことばかり覺えて居ります。けれども、ずつと年をとつた人と同じやうに、少年の私にはそれが一番樂しい欲でした。斯樣なことを私は最初の貴女に御話するからと言つて、それを不作法とも感じません。種々な幼少い記憶がそれに繫がつて浮び揚つて來ることは、爭へないのですから。序に、太助が小屋から里芋の子を母屋の方へ運んで行きますと、お牧がそれに蕎麥粉を混ぜて、爐の大鍋で煮て、あの輝の切れた手で芋燒餅といふものに造へて呉れたことも書いて置きませう。芋燒餅は、私の故郷では、樂しい晩秋の朝の食物の一つです。私は冷い大根おろしを附けて、燒きたての熱い蕎麥餅を皆なと一緒に爐邊で食ふのが樂みでした。口をフウ〳〵言はせて食つて居るうちに、その中から白い芋の子が出て來る時などは、殊に嬉しく思ひました。

三

昨日、一昨日はこの町にある榊神社の祭禮で、近年にない賑ひでした。町々には山車、踊屋臺などが造られ、手古舞まで出るといふ噂のあつた程で、鼻の先の金色に光る獅子の後へは同じ模樣の衣裳を著けた人達が幾十人となく隨いて、手に手に扇を動かし乍ら、初夏の日のあたつた中を揃つて通りました。それ獅子が來た、御輿が來たと言つて、子供等は提灯の下つた家の門を出たり入つたりしま

した。

『御祭で、どんなに嬉しいのか知れません――』

と姉さん達は斯の子供等のことを言ひましたが、兄の方は肩に掛けた襷の鈴を鳴らして歸つて來て、後鉢卷などにして貰ひ、黄色い團扇を額のところに差して、復た町の方へ飛び出して行くといふ風でした。提灯に蠟燭の火が映る頃から、二人とも足袋跳足にまで成つて、萬燈を振つて騒ぎ廻りました。

私も祭らしい日を送りました。町に響く太鼓、舁がれて通る俵天王、屋臺の上の馬鹿囃、野蠻な感じのする舞――すべて、子供の世界の方へ私の心を連れて行くやうな物ばかりでした……

毎年のやうに私は出して著る袷が二枚あります。母の手織にしたもので、形見として殘つて居るのは最早それだけです。私は十五年の餘も大切に保存して居ります。それが又、私の持つて居る著物の中で、一番著心地の好い著物なのです。短い袷時に、私はそれを取出すのを樂みにして居りますが、それを著た時は妙に安心して居られるやうな氣もします。その中一枚はあまり見苦しく成つたと言はれて、今年からは寢衣にして著ることにしました。

私の母は斯うした手織縞をよく丹精したものです。私が子供の時分に著た著物は大概母の織つたものでした。私の生れた家は舊本陣と言つて、街道筋にあつて、ずつと昔は大名などを泊めたのですから、玄關も廣く、その一段上に板の間がありました。そこから廣い部屋々々に續いて居ました。その板の間の片隅に機が置いてありました。私が表の方から古い大きな門を入つて玄關前の庭に遊んで居りますと、母が障子の影に腰掛けて錯々と梭の音をさせたものでした。

頰の紅い、左の眼の上に黑子のあつた母のことを言へば、白い髪を切下げて居

た祖母のことも御話しなければ成りません。祖母は相應に名のある家から嫁いで來た人で、年はとつても未だシッカリして居りました。尤も私の覺えてからは腰は最早すこし曲つて居りましたが。一體、私は七人の姉弟のうちで一番の末の弟で、私の直ぐ上が銀さん、それから上に二人姉があつたさうですが、斯の人達は幼少くて亡くなりましたさうです。その上に兄が二人あつて、一人は母の生家の方へ養子に參りました。一番年長が姉です。姉は私がまだ極く幼少い時に嫁に行きましたから、殆んど吾家に居たことは覺えません。長兄の結婚は漸く私が物心づく頃でした。嫂を迎へてから、爐邊は一層賑かで、食事の度に集つて見ると可成大きな家族でした。その頃から私は祖母に隨いて、毎晩隱居所の方へ泊りに行くやうに成りました。そこは井戸に近い二階建の離れ家で、階下は物置やら味噌藏やらに成つて居ました。暗いところを行くのですから、私は祖母と一緒に提灯つけて通ひました。

私の家では、生活に要る物は大概は手造りにしました。野菜を貯へ、果實を貯へることなどは、殆んど年中行事のやうに成つて居ました。母は若い嫂を相手にして、木梨の汁などで絲をよく染めました。茶も家で造りました。茶摘といへば日頃出入の家の婆さんまで賴まれて來て、若葉をホイロに掛けて揉む時には男も一緒に手傳ひました。玄關前の庭の横手には古い椿の樹がありましたが、その實から油をも絞りました。私は母や嫂の織つた著物を著、太助の造つた草履を穿いて、少年の時を送つたのです。

例のお牧に連れられて、映し繪を見に行つた晩のことでした。旅の見世物師が來て、安達が原だの、鍋島の猫騒動などを映して見せ、それでいくらかの木戸錢を取りました。障子に映つた鬼婆、振揚げた出刀庖丁、後ろ手にくゝし上げられ

た娘、それから老女に化けた怪しい猫の幻影などは、夢のやうな恐怖を誘ひました。家へ戻つて行つても、私は安心しませんでした。

『祖母様、お前さまは眞實の祖母様かなし……一寸背後を向いて見さつせれ……』

『これ、何を馬鹿言ふぞや。』

母や嫂は側に居て笑ひました。その頃から私は『人浚ひ』に浚はれて行くといふ恐怖なども感じて、祖母と二人ぎり寂しい隱居所の方へ行く時には、寢床の中に小さくなつて寢たことも有りました。お化より何より、『人浚ひ』が私には一番恐しかつた。それは夜鷹の鳴く日暮方にでも通るもので、一度浚はれたら、兩親の許へ歸つて來ることが出來ないやうにも思はれました。

すこし見慣れないものが有ると、私は子供心に眼をとめて見ました。そして不思議な恐怖に襲はれることが有りました。太助がよく働いて居た木小屋の前を通り拔けて、一方の裏木戸の外へ出ますと、そこには稻荷が祭つてあります。葉の尖つた柊、暗い杉、巴旦杏などが其邊に茂つて居まして、木戸の横手にある石垣の隅には見上げるほど高い枳殼が立つて居ました。あの棘の出た幹の上の方に、ある日私は大きな黑い毛蟲の蝶を見つけました。田舍で荒く育つた私の眼にも、その蝶ばかりは薄氣味の惡いほど大きかつた。そして毒々しい黑い翅を震はせて居ました。私は小石を拾つて投げつけやうとしましたが、恐しくなつて、そのまま母屋の方へ逃げて歸つたことが有りました。

斯の手紙を書きかけて置いて、私は兄弟の子供を連れながら河岸の方まで歩きに行つて來ました。榊神社の境内まで行くと、兄の方はぷいと腹を立てゝ家の方へ歸つて了ひましたから、私は弟の方だけ連れて、河岸へ出ました。船宿などのゴチャ〳〵並んで居るところです。投網も乾してあります。そこで私は小船を借

り一人の子供を乗せて水の上を漕ぎ廻つたこともあります。河岸へ行く度に、子供はそれを言出して、復た船に乗りたいと強請りましたが、今日は止さして、一緒に柳並木の下を歩きました。ふと私は十二三ばかりの獅子を冠つた男の兒が本所の方へ歸つて行くのに出逢ひました。

『オイ、そこンところで一つ遣つて見て呉れないか。』

私は呼び留めまして、袂から二錢銅貨を二つ取出して渡しました。

『御覽、角兵衞だよ。』

と小聲で言つて聞かせますと、子供ら石の柵に倚凭つて眺めました。

人通りの少い靜かな柳のかげで、雪袴のやうなものを穿いた少年が柔軟な身體を種々に動かして見せた。兩足で首を挾む、逆に蜻蜓返りする、自由自在にやりました。少年は細い痩せた、曲藝の爲に成長れないやうな身體をして居ました。

『お錢を持ちながら遣るのかい。そこに置いたら可いぢやないか。私が見てるから大丈夫だ。』

と私が言ふと、少年はそれも左樣だといふ顏附で笑つて、手に一ぱい握り締めて居た銅貨を柳の根元のところに置いて、復た一つ二つ藝を遣りました。身體の中心を兩手だけで支へて、土の上を動き廻りなぞして見せました。

斯ういふ少年に稼がせて世渡りするらしい日に燒けた女がそこへ通りかゝりました。間もなく少年は掌の土を拂ひ、赤い布で頭の上の小さな獅子を包んで、その女の後を追ひました。

『兄さんも來れば可いのに、お獅子が見られるのに。』

『ネ、角兵衞見たつて、左樣言つてやりませう。』

私は弟の方の手を引いて歸りました。

家の門口まで行くと、兄の方が飛んで來て、獅子を見せなかつた不平を頻りに並べました。弟は又、身振手眞似をして兄を羨ましがらせました。

『ア、好いナア。』

『來れば可いぢやないか。』

『何故兄さんは一緒に行かなかつたの。お獅子が見られたのに。』

『父さん、そのかはり蜜豆買つて——』

『蜜豆なんか止せ。』

私は子供を連れて家へ入り、茨城の方から貰つたばかりの粽を分けて呉れました。青い柔かな笹の葉で面白く包んであつて、越後粽の三角なのとも異り、私の故郷の方で造るのとも違ひました。子供の甘さうに食つて居る傍で、私はその笹の葉を笛のやうに鳴らして聞かせました。

今笑つて居る、直に復たぐずり出す、一度泣出したら地團太踏むやら姉さん達に搔附くやら、容易には納まらないのが弟の方の子供です。何故子供といふものは、もつと自然に育てられないのかしら——何故斯う威かしたり欺したり時には殘酷な目にまで逢はせなければ育てられないのかしら——私は時々そんなことを思ひます。頭の一つもブン擲らずに濟ませるものなら、成るべく私はそんな眞似もしたくない。左樣思つて控へて居りますと、『貴方がたの父さんは御砂糖だと見えますネ』など丶人々には笑はれる。終には世話するものまで泣いて了ふ。見るに見兼ねて、何時でも私がそこへ出なければ成らないやうなことに成ります。どうかすると私は憤怒の情に驅られて、子供を叱責する前に、激しく自分の唇を嚙むことも有ります。憐むべき Domestic Animal……なにしろ弟の方の子供は丁度今が荒々しい、手に了へない盛りですから……

どれ、私の生れた家の方へ貴女の想像を誘つて行つて、舊い屋敷をお目に掛けませう。

母がよく腰掛けた機の置いてある板の間は、一方は爐邊へ續き、一方は父の書院の方へ續くやうに成つて居ました。斯の板の間に續いて、細長い廂風の座敷がありまして、それで三間ばかりの廣い部屋をぐるりと取圍くやうに出來て居りました。斯の部屋々々は以前本陣と言つた頃に役に立つたので、私の覺えてからは、奥の部屋などは特別の客でもある時より外に使はない位でした。別に上段の間といふのが有りました。そこは一段高く設けた奥深い部屋で、白い緣の疊などが敷いてあり、昔大名の寢泊りしたところとかで、私が子供の時分には唯床の間に古い鏡や掛物が掛けてあるばかりでした。父はそこを神殿のやうにして、毎朝神樣を拜みましたから、私も眼が覺めると母に連れられて御辭儀に行つたものです。

それほど父は嚴格な、神信心な人でした。髮なども長くして、それを紫の紐で束ねて、後の方へ垂れて居ました。上段の間を隔てゝ、寛ぎの間といふのも有つて、そこが兄の居間に成つて居りました。村の旦那衆はよくそこへ話しに集りました。仲の間は明るい光線の射し込む部屋で、母や嫂が針仕事をひろげたところでした。障子を明けると、細長い坪庭を隔てゝ石垣の下に叔母の家の板屋根などが見え、ずつと向ふの方には遠い山々、展けた谷、見霞むやうな廣々とした平野までも望みました。丁度私の田舍は高い山の端で、一段づゝ石垣を築いて、その上に村落を造つたやうな位置にあります。私の家はその中央にありました。叔母の家といふはお霜婆といふ女に貸してありましたが、心易く私の家へ出入した人でした。そこから通つて來るには是非とも坂道の往來を上らなければなりませんでした。

お霜婆はてか〳〵した禿を薄い髮の毛で隱して居るやうな女でした。若い女中

を一人使つて、女ばかりて暮して居ました。どうして斯様な人が叔母の家を借りて居たのか、皆目私には解りませんでしたが、兎に角村の旦那衆がよく集るところではありました。お霜婆は私を可愛がつて呉れましたから、私も遊びに行き行きしまして、半ば自分の家のやうに心易く思つた位でした。旅の飴屋が唐人笛などを吹いて通ると、必とそれを呼んで、棒の先にシャブるやうにした水飴を私に買つて呉れたのも、斯の婆さんでした。しかしお霜婆の可愛がりやうは、太助やお牧などと違つて、どこか煩いやうなところが有りました。どうして、ナカ〳〵御世辭ものでした。

斯のお霜婆に就いて、私は片意地な性質を顯はしました。お霜婆の家でも毎年蠶を飼ひましたが、ある時私は婆さんの大切にして居る蠶に煙草の脂を嘗めさせました。斯の惡戯は非常に婆さんを怒らせました。その時から私は婆さんと仲違

ひして、婆さんの家の前は除けて通り、婆さんが家へ來て言葉を掛ける時でも私は口も利かなく成つて了ひました。子供ながらに私はそれを六十日の餘も續けました。

そのちうに村の祭が來ました。私は銀さんとお揃ひで黑い半被を造つて貰ひました。背中に家の紋を白く見せたものでした。火の用心の腰巾著もぶら下げました。折角祭の仕度が出來た、仲直りがてらお霜婆に見せて來るが好からう、と兄が言つて、嫌がる私を無理やりに背中に乘せ婆さんの家へ舁ぎ込みました。兄に置いて行かれた後で、婆さんが何と言つても私は聞入れませんでした。私は足をバタ〳〵させて泣きました。婆さんも手の著けやうが無いといふ風で、一層腹を立てまして、復た私を無理やりに脊中に乘せ、家の方へ送り返しに來ました。

斯樣な風で、容易に私の心は解けませんでした。到頭お霜婆の方から私の好き

な羊羹を持つて仲直りに來ました。其時私は裏の井戸のところに立つてお牧が水を汲むのを見て居りましたが、お霜婆の仲直りに來たことを聞いて、お牧に隨いて母屋の方へ行きました。斯の婆さんと以前のやうに口を利くやうに成る迄には、大分私には骨が折れました。

四

『もし〳〵龜よ、龜さんよ、
世界のうちにお前ほど
歩みの遲鈍いものは無い――』
無邪氣な唱歌が私の周圍に起りました。私は二人の子供を側へ呼びまして、

『さあ、お前達は二人とも龜だよ。父さんが兎に成るから。』
『父さんが兎？』と兄の子供は念を押すやうに私の顏を覗き込みました。
『ア、、龜と兎と馳けくらべをしよう。い、かい、お前達は龜だから、そこいらを歩いて居なくちやいけない。』
お伽話の世界の方へ直に子供等は入つて行きました。二人とも龜にでも成つた氣で、揃つて手を振りながら部屋の内を歩き廻りました。
『龜さんはもう出掛けたか。どうせ晩まで掛るだらう……』
と私は子供等に聞えるやうに言つて、『ここらで一寸、一眠りやるか……』
私が横に成つて、グウ〳〵鼾をかく眞似をすると、子供等は驚喜したやうに笑ひ乍ら、私の周圍を廻つて居りました。そのうちに、私は半ば身を起して、大欠びしたり兩手を延ばしたりして、眠から覺めたやうに四邊を見廻しました。

『ヤ、これは寢過ぎた……』

と私が失策つたやうに言へば、子供等は眼を圓くして、急いで床の間の隅に隱れました。私は龜の在所を尋ね顏に、わざ〳〵簞笥の方へ行つて見たり、長火鉢の側を廻つたりしました。

『兎さん、こゝよ。』

と子供等が手を打つのを、私は聞えない振をして、幾廻りか廻りながら漸くのことで龜の隱れて居るところへ行きました。其時、子供等は勝誇つたやうな聲を揚げて、喜び騷ぎました。

どうかすると私は斯樣な串談をして、子供を相手に遊び戯れます。斯ういふ私を生んだ父は奈樣な人であつたかと言へば、それは嚴格で、父の膝などに乘せられたといふ覺えの無い位の人でした。父は家族のものに對して絶對の主權者で、

私等に對しては又、熱心な敎育者でした。私は父の書いた三字經を習ひ、村の學校へ通ふやうに成つてからは、大學や論語の素讀を父から受けました。あの後藤點の栗色の表紙の本を抱いて、おづ〳〵と父の前に出たものです。

父の書院は表庭の隅に面して、古い枝ぶりの好い松の樹が直ぐ障子の外に見られるやうな部屋でした。赤い毛氈を掛けた机の上には何時でも父の好きな書籍が載せてありましたが、時には和算の道具などの置いてあるのを見かけたことも有ります。父はよく肩が凝ると言ふ方でして、銀さんと私とが叩かせられたものですが、肩一つ叩くにも只は叩かせませんでした。終には銀さんも私も逃げてばかり居たものですから、金米糖を褒美に呉れるから叩けとか、按摩賃を五厘づゝ遣るから賴むとか言ひました。

『享保、元祿……』

私達は父の肩につかまつて、御經でもあげるやうに諳誦しました。

何ぞといふと父が私達に話して聞かせることは、人倫五常の道でした。私は子供心にも父を敬ひ、畏れました。しかし父の側に居ることは究屈で堪りませんでした。それに父が持病の癇でも起る時には、夜眠られないと言つて、紙を展げて、遲くまで獨りで物を書きました。その蠟燭を持たせられるのが私でしたが、私は唯眠くて成りませんでした。

斯うした嚴格な父の書院を離れて、仲の間の方へ行きますと、そこには母や嫂が針仕事をひろげて居ります。私は武者繪の敷寫しなどをして、勝手に時を送りました。母達の側には別に小机が置いてあつて、隣の家の娘がそこで手習ひをしました。お文さんと言つて、私と同年で、父から讀書を受ける爲に毎日通つて來たのです。父を『お師匠樣』と呼んだのは斯の娘ばかりでなく、村中の重立つた

家の子はあらかた父の弟子でした。中には隣村から通つて來るものも有りました。

私は今、町の湯から歸つて、斯の手紙のつゞきを貴女に書いて居ります。八歲ばかりに成る近所の女の兒が二人來て、軍艦や電車の形を餘念なく描いて居る私の子供の側で、『あねさま』などを出して遊んで居ります。そのさまを眺めると、私が隣の家の娘と遊んだのは丁度そんな幼少い年頃であつたことを思出します。

お文さんの許は極く懇意で、私の家とは互に近く往來しました。風呂でも立つと言へば、互に提灯つけて通ふほどの間柄でした。相接した裏木戸傳ひに、隣の裏庭へ出ると、そこは暗い酒藏の前で、大きな造酒の樽の影には男達が出入して働いて居たものです。新酒の造られる頃、私は銀さんと一緒によく重箱を持つて、『ウムシ』を分けて貰ひに通ひました。この隣の『ウムシ』それから吾家で太助が造る燒米などは、私が少年の頃の好物でした。私は又お文さんと一緒に、庭の

美濃柿の熟したのを母から分けて貰ひ、それに麥香煎を添へ、玄關のところに腰掛けて食ふのを樂みとしました。

貴女は『オバコ』といふ草などを採つて遊んだことが有りますか。お文さんはあの葉の纖維に絲を通して、機を織る子供らしい眞似をしたものです。私が裏の稻荷側の巴旦杏の樹などに上つて居ると、お文さんはその下へ來てあの葉を探しに草叢の間を歩き廻りました。班鳩が來て鋭い聲で鳴いた竹藪の横は、私達がよく遊び廻つた場所です。そこで榎の實を集めるばかりでなく、時には檀鳥の落して行つた青い斑の入つた羽を拾ひました。

私が祖母と二人で毎晩泊りに行く隱居所に對ひ合つて、土藏がありました。暗い金網戸の閉つた石段の上は、母が器物を取出しに行つて、錠前をガチャ〳〵言はせたところです。私は母に連れられて、土藏の二階に昇り、父の藏書を見たこ

ともあります。古い本箱が幾つも〳〵積み重ねてありました。斯の土藏の下には年をとつた柔和な蛇が住んで居ました。太助などは『主』だと言つて、誰にも手を著けさせずに大事にして置きました。その『主』が頭を出して晝寢をして居る白壁の側、土藏の前にある柿の樹の下あたりは、矢張私達の遊び場所でした。甘い香のする柿の花が咲くから、青い蔕の附いた空な實が落ちるまで、私達少年の心は何を見ても退屈しませんでした。

お牧は井戸から水を擔いで土藏についていて石段を上つて來ます。斯の柿の樹のあるところから、更に石段を上つて母屋の勝手口へ行くまでが、彼女の水汲に通ふ路でした。その邊は舊本陣時代の屋敷跡といふことでしたが、私が覺えた頃は既に桑畠で、林檎や桐などが畠の間に植ゑてありました。隣の石垣の上には高い壁が日に映つて見えました。それがお文さんの家でした。

私達が子供の時分には、妙に暗い世界が横たはつて居りました。多勢村のものが寄集まつて一人の眼隠した男を取圍いて居る光景を一寸想像して見て下さい。激昂した衆人の祈禱の中で、その男の手にした幣帛が次第に震へて來ることを想像して見て下さい。其時は早やある狐の乘移つたといふ時で、非常に權威ありげな聲で、神の御告といふものを傳へます。どうかすると斯の狐の乘移つた人は遠い森を指して飛び走つて行くことも有りました。私は又、村の小學校で、狐がついたといふ生徒の一人を目擊しました。その少年は顏色も變り手足を震はして居ました……

斯ういふ不思議なことが別に怪まれずにあるやうな、迷信の深い空氣の中で、私は子供の時を送つたのです。何等かの自然の現象で一寸解釋のつきかねるやうなことは、知らない生物の世界の方へそれを押しつけてありました。山には狼の

話が殘り、畠には狢や狸が顯はれ、暗くなれば夜鷹だの狐だのゝ鳴聲のするのが私の故郷でした。それほど私達の幼少い時の生活は禽獸の世界と接近したものでした。蜂の種類も多くありました。殊に地蜂と言つて、五層も六層も土の中に巣を造るのは、土地で賞美される食料の一つでした。兄達は蛙を捉へて來て、その皮を剝ぎ、逆さに棒に差し、地蜂の親の餌を探しに來るのを待受けたものです。蛙の肉に附けて置いた紙の片で、それを咬へて飛んで行く蜂の行方を眺めると、巣の在所が知れました。小鳥の種類の豐富なことも故郷の山林の特色です。鶇や網で捕れる鶫、鶸の類はおびただしい數でした。雀などは小鳥の部にも數へられないほどです。子供ですら馬の尻尾の毛で雀の網を造ることを知つて居ました。

私達は、同じ年頃の子供ばかりで遊ぶ時には、まだそれほど遠く行きませんでした。でも裏の田圃道に出て、高い樹木の上の方に小鳥の囀るのを聞くのは樂み

でした。田圃側には『スイコギ』の葉を垂れたのが有りました。それを採つて、鹽もつけずに食ひました。村の學校のあつた小山の下のところには細い谷川が流れて居ます。そこへ私はお牧から借りた笊を持つて行つて鰍をすくつたことも有ります。お文さんも腕まくり、裾からげで、子供らしい淡紅色の腰卷まで出して、石の間に隱れて居る鰍を追ひました。

何時の間にか私は斯の隣の家の娘と二人ぎり隱れるやうな場所を探すやうに成りました。私達は桑畠の間にある林檎の樹の下を歩き又は玄關から細長い廂風の小座敷を通り抜けて、上段の間の横手に坪庭の梨の見えるところへ行きました。すると極りで、若い嫂が私達を探しに來ました。

お牧、お霜婆、斯の手紙には私は主に少年の眼に映じた婦人のことを貴女に書く積りですから、その順序として幼少い隣の家の娘のことを御話するのです。有

體に言へば、私は女といふものに初めて子供らしい情熱を感じました。私はお文さんを堅く抱締めたこともあります。斯の子供らしさは、近所の他の家の娘にも起りました。私は三日ばかり激しい情熱に苦められたことを覺えて居ます。尤もその娘のことは直ぐ忘れて了ひましたが……

ある日、私はお文さんに誘はれて隣の家へ遊びに行きました。酒屋の香氣のする庭を通り抜けて、藏造りになつた二階の部屋へ上つて見ました。隣とはよく往來をしましたが、そんなに奥の方まで連れられて行つたのは私には初めてゞす。丁度そこへお文さんの兄さんの道さんがやつて來ました。道さんはお文さんや私より二ツ三ツ年長の少年で、村の學校でも評判な好く出來る生徒でした。

其日まで私は夢中でお文さんと遊んで居て、第三者といふものゝ有ることを知りませんでした。お文さんの部屋で、道さんと一緒に成つて見て、それが解つて

來ました。私は唯道さんに見られたといふだけで、何となく少年らしい羞恥を感じました。それきり私はお文さんを離れて、今度は道さんだの、それから他の男の兒と遊ぶやうに成りました。

お文さんは相變らず吾家へ手習に通ひました。しかし私が道さん達の仲間入をするやうに成つてからは、以前のやうに彼女と親しくしませんでした。

御承知の通り、狹い田舍では大抵の家が遠い親類の形に成つて居ます。左樣いふ家の一つに、丁度お文さんと同い年ぐらゐな娘がありました。惡戯好きな學校の朋輩は、その娘の名と私の名とを並べて書いて見たり、課業を終つて思ひ〳〵に歸つて行く頃には、杉の樹のあるお寺の坂の上あたりから、大きな聲で呼ばつたりしたものです。

それを聞くと私は、

『糞を喰へ。』

といふ風で、吾家を指して歸りました。

それから九歳の秋に東京へ遊學に出掛けるまで、私の好きなことは山家の子供らしい荒くれた遊びでした。次第に私は遠く行くやうに成つて、男の友達と一緒に深い澤の方まで虎杖の莖などを折りに行き、『カルサン』といふ勞働の袴を著けた太助の後に隨いて、松薪の切倒してある寂しい山林の中を歩き廻り、路傍に『酸い葉』でも見つけると、それを生でムシャ〳〵食ひました。太助とは、山の神の祠のあるところへ餅を具へにも行つたことが有ります。都會の子供などゝ違ひ、玩具も左樣自由に手に入りません。私は竹と半紙で『するめ紙鳶』を手造りにすることを覺えました。それを村はづれの岡の上へ持つて行つて、他の子供と競爭で揚げました。『ショクノ』――東京の言葉でいふ『ネツキ』は、最も私の心を樂ま

せた遊びです。木は不自由しない村ですから、私は太助の鉈序に、強さうな木の尖端を鋭く削つて貰ひました。どうかすると霜枯れた田圃側には、多勢村の少年が群がつて、斯の『ショクノ』を土の中に打込んで遊びました。私の父はヤカマしいので、斯ういふ遊びに勝つても、表から公然と擔ぎ込む譯に行きません。左樣いふ時に、都合の好いのはお霜婆の家でした。

銀さんと私とがいよ〳〵上京と定まつた頃は、母の織る機がいそがしさうに響きました。母は私の爲にヨソイキの角帶を織りました。なにしろ私はまだ田舍の小學校で僅か學んだばかりで、小さな旅の鞄に金米糖を入れて呉れるからと言はれて、それを樂みに遊學の日を待つほどの少年でした。

五

旦那樣はじめ、お子樣がた御變りもなき由、殊に此節は幼い二人を相手に樂しい日を送つて居らるゝとか。先頃子供の許へ贈つて下すつた御地の青い林檎は斯のあたりの店頭にあるものと異なり樹から捥ぎ取つたばかりのやうな新鮮を味ひました。御蔭で子供も次第に成身して參ります。函館の老爺上京の節も、孫達の顏を眺めて、稀に出て來て見ると大した違ひだと申した位です。私がたはむれに弟の方の子供を抱き上げて見て、更に兄の方を抱き上げながら大分重くなつたと申しましたら、兄の子供はさも嘻しさうに首をすくめて笑ひました。

『重くなつたと言はれるのが、そんなに嬉しいの？』

と側に居る娘も笑ひながら言ひました。

毎日長い竊竿を持つて町の空へ來る蜻蜓を追ひ廻して居た兄の子供も、復た復た夏休み前と同じやうに鞄を肩に掛けて、學校へ通ふやうに成りました。近所の毛筆屋の子で眼のパッチリとした同級生が毎朝誘ひ合せては出掛けますが、ある夕方、その子が遊びに來て門口から私の家を覗きました。瓦斯とか電燈とかで明るい屋並の中に、吾家ではまだ洋燈を用ひて居ます。

『洋燈を點けてるのかい――隨分舊弊だねえ。』

とその八つに成る毛筆屋の子が申しました。流石都會に育つ子供はマセた口の利きやうをすると思ひました。

八月の末から九月の初へかけて毎年のやうに降る大雨が今年は一時にやつて來て、乾き切つた町々を濡らしました。隅田川も濁つて灰汁を流したやうに成りました。狹い町中とは言ひながら、早や秋の蟲が緣の下の方でしきりに鳴きます。

冷々とした部室の空氣の中でその鳴聲を聞きながら、毛筆屋の子に笑はれた洋燈の下で、私は斯の手紙を書き續けます。

少年の私が銀さんと一緒に東京へ遊學することに成りました時は、銀さんが數へ年の十二、私が九つでした。まだ他にお文さんの二番目の兄さんも眼の療治のために同行することに成りました。

その日も近づいた頃、銀さんは裏の梨の樹の下あたりに腰掛けて、兄貴に東京行の頭を刈つて貰ひました。村には理髮店といふものも無い時でしたから、兄貴が襷掛で、掛る布も風呂敷か何かで間に合せて、銀さんの髮を短く剪みました。私の方はまだ一向な子供でしたから、髮も長く垂下げたまゝで可からうと言はれました。私はそッと家を拔け、子供心にも別れを告げるつもりで、裏道づたひにお牧の家をさして歩いてまゐりました。私は人に見つからないやうにと、何の位

苦心して竹藪の側や田圃中の細い道なぞを通つたか知れません。何故といふに、村で一番不潔な男を親に持つたそのお牧の手に養はれたといふことは、絶えず私が他から調戯はれる材料に成つて居ましたから私は調戯はれると言ふよりは嬲られるやうな氣がして、その度に堪へ難い侮辱を感じて居りました。で、隱れるやうにしてお牧の家まで歩きました。丁度お牧の父親も家に居る時で、例の油染みた髪結の道具などが爐邊に置いてあつたかと覺えて居ます。お牧の家の人達は非常に喜びまして、私のために鍋で茶飯を煮いて呉れました。私が茄子が好きだからと言つて、皮のまゝ輪切にしたやつを味噌汁にして呉れました。その貧しい爐邊で味つた粗末な『おみおつけ』は、私に取つて一生忘れられないものです。それから三十年あまりの今日まで、どうかして私は彼樣いふ味噌汁を今一度吸ひたいと思つて、幾度同じやうに造らせて見るか解りませんが、二度と彼の味を思出

させるやうなのには遭遇ひません。

片田舍のことですから、私達が東京へ發つ前には毎晩のやうに親しい家々から客に呼ばれました。私は銀さんと一緒にお文さんの家へも呼ばれて行つて、鷄肉の汁で味をつけた押飯(?)の馳走に成りました。何かにつけて田舍風の饗應を取替すといふことは、殊に私の村では昔から多い習慣のやうに成つて居ました。

出發の前の朝、祖母は私達を爐邊に据ゑまして、食事しながら種々なことを言つて聞かせました。今朝は言ふ、そのかはり明日の朝は何事も言はない、そんなことを言つて、長いこの私達を側に坐らせて置いて、別離の涙を流しました。其晩、私は父の書院へも呼び附けられて、五六枚ほど短冊に書いたものを餞別として貰ひました。それは私が座右の銘にするやうにと言つて呉れたので、日頃少年の私をつかまへて口の酸くなるほど言つて聞かせた教訓を一つ々々文字に表はし

て書いたものでした。私はその全部を記憶しませんが、父があの几帳面な書體で認めた短冊の中には、あり〳〵と眼に浮んで來るのもあります。

『行ひは必ず篤敬。云々。』

兄に引連れられて、翌日私達三人の少年は故郷の山村を發ちました。坂になつた驛路の名殘の兩側には、それ〴〵屋號のある親しい家々が並んで居ます。私達は一軒々々田舍風な挨拶をするために立寄りました。日頃洗濯や餅つきの手傳ひなどに來る婆さんとか、又は出入の百姓とかの人達までいづれも門に出、石垣の上に立ちして、私達を見送つて呉れました。九月の日のあたつた村はづれまで送つて來て呉れる人もありました。暗い杉の木立の側を通り、澤を越して行きますと、字峠と言つて一部落を成したところがあります。その邊まで私達に附いて來て名殘を惜む人もありました。お頭の家のある峠を離れて、私達は旅らしい山道

に上りました。

その頃は京濱間より外に鐵道といふものも無く、私達の故郷から東京まで行くには一週間も要るほど不便な時でした。それに大きな谷の底のやうな斯の山間を出て、馬車にでも乘れるといふ處まで行かうとするのには、是非とも高い峠を二つだけは越さなければなりませんでした。

全く方角も解らなく成つて了つたやうな、知らない道を三日も四日も歩いた後で、私は銀さん達と一緒に左樣いふ峠のしかも險しい石塊の多い山道にさし掛りました。私は風呂敷包を襷にして背中に負ひ、洋傘を杖につき、喘ぎ〳〵その坂を攀ぢ登りましたが、次第に歩き疲れて、お文さんの兄さんや銀さんから見ると餘程後れるやうに成りました。日は暮れかけて、山の中は薄暗く見えるやうに成つて來ました。

『金米糖を呉れなけりや、歩けない。』

『呉れるから、歩け。』

私は兄と斯様な押問答をして、路傍の石に腰掛けては休み〳〵、復た出掛けました。そのうちに金米糖どころでは無くなつて來ました。私には歩けなく成りました。何となくお腹まで痛く成つて來ました。私は洋傘をそこへ投出して動かずに居たこともあります。すると兄が私の傍へ來て、私の帶へ手拭を結はへ附けまして、それで私を引き立てました。

斯の骨の折れる山道を越して、漸のことで峠の下まで歩いて行きますと、澤深い温泉宿のやうな家々の灯が私の眼に嬉しく映りました。そこが中仙道の沓掛であつたかと覺えて居ます。

何處から馬車に乘つたかといふことも、ハッキリとは記憶しません。唯、前の

方へ突進する馬車と……時々馬丁の吹き鳴らす喇叭と馬を勵ます聲と……激しく動搖れる私達の身體とがあるばかりでした。

狹い車の上で復た日が暮れました。暗い夜の道を後に殘しては私達は乘りつゞけに乘つて行きました。斯の馬車の旅で私達は一人の女の客とも道連に成りました。矢張東京まで行く客で、故郷に殘して置いて來た私の母などよりはずつと若い人でしたが、私達の村にでも居さうな、田舍風な婦人ではありました。旅の包の中から菓子を取出して、それを紙包にして私に呉れたりなどしました。終には私も斯の小母さんのやうな人に慣れて、その膝の上に抱かれました。そして馬車に搖られて眠く成つて來ると、そのまゝ寢て了つたことも有りました。

『追剝だ。追剝だ。』

といふ聲を聞きつけて、急に私は眼を覺ました。馬車が何處を通るのか、皆目そ

れは私には解りませんでしたが、闇に振る馬丁の烈しい鞭の音と、尋常ならぬ車の上の人達の樣子とで、賊といふことだけは知れました。馬車が疾驅してその場所を通過ぎた後で、氣の荒い馬丁は手綱をゆるめて、賊が馬の脚へ來て掛らうとしたとか、斯の邊の夜道は物騷だとか、確かに自分の一鞭は手答へがあつたとか、兄達に話し聞かせて笑ひました。復た馬車は暗黑の中を衝いて進みましたが、それが夜道へ響けて可恐しい音をさせました。

夜が明けてから、私達は田舍町の中を乘つて通りました。高い竹梯子の上で宙乘をする消防夫の姿が馬車の上から見えました。そこは上州の松井田でした。

烏川を越した時の記憶は未だによく殘つて居ます。私達は馬車を降りまして、皆な歩いて渡りました。あの邊の廣濶とした白い光つた空は、まだ私の眼にあります。客だけ下して置いて、河原から水の中へ引き入れた馬車の音を、また私は

聞くことが出來るやうな氣がして居ます。

斯の旅はすつかりで矢張七日ほどかゝりました。私は馬車に乘つたまゝ半分夢のやうに東京へ入りました。その馬車が著いたところは萬世橋でしたが、あの頃の廣小路のさまは殆んど尋ねることも出來ないほど變つて了ひました。今でも寄席や旅人宿は殘つて居ます。あの並びに馬車の著くところが有りまして、その前の並木の陰で私達は車から下りたかと思ひます。

六

落著く先は姉の家でした。長兄に引連れられて山の中から出て來た私達兄弟の少年は、はじめて大きな都會の空氣に觸れ、日頃故郷の方でよく噂の出る姉と

も一緒に成ることが出來たのです。前にも御話しました通り、姉は私が覺えの無いほど極く幼少な時分に嫁入した人でした。

田舍者が多勢で押掛けて來た姉の家は、銀座の裏側にあたる閑靜な町の角にあつて、灰色な圓柱の並んだ、古風な煉瓦造りの一つでした。二階には四間ばかりの部屋がありました。その一室の硝子窓から町の裏側の屋根だの物干だの丶見えるところが私達兄弟の勉强部屋によからうと言はれて、そこで私は銀さんと一緒に新規な机を並べ、夜はその部屋で二人枕を並べて寢ました。田舍に居た頃とは違ひ、こゝでは茶の出る時間も午後と定つて居て、甥と一緒に茶うけの豆せんべいなどを買ひに行き、廣い爐邊でノンキに食事をしつけたものが今度は姉の家の祖母さんや姉夫婦の側にかしこまつて、銀さんと御取膳で食ふことに成りました。

『どうだ、是がオサシミだ。』

と姉に言はれて、私は初めてオサシミといふものを口に入れて見たことを覺えて居ます。姉が馳走振に取つて呉れた新鮮な魚肉よりも、故郷の方で食べ慣れた鹽辛い鮭の方が私の口に適ひました。一年に一度づゝ年取の晩の膳についた鹽鰤の味などは私には忘れられないものでした。

その頃の姉はまだ若く見える人で、物の言ひ方なども、ハキ〳〵として居て、私の知らないことは深切に敎へて呉れ、萬事につけて私をいたはつて呉れました。斯の愛情は少年の私には難有いものでした。私の故郷の習慣で、他の朋輩を呼ぶには『わりや』と言ひ自分のことは奈樣な日上の人の前でも、『おれ』でしたが、その時都會の少年のやうに言葉遣ひを習ひ『君』とか『僕』とかといふ言葉も姉からをそはりました。

姉が私の爲に種々と注意して呉れたとは、次の一例を御話しただけで解らうと思ひます。子供の時分に私はよく鼻液が出ました。それを兩方の袖口で拭きましたから何時でも私の著物には鼻液が干乾び著いて光つて居りました。そればかりでなく、著物の胸のあたりをも汚したものです。姉はそれを見て取つて、私が食事の時に茶椀を胸に當てることは止せと言ひましたが、自然とついた癖は直さうと思つても容易に直りませんでした。何時の間にか私の茶椀は胸のところに當つて居ました。そこで姉は一計を案出しました。四角に切つた鐵葉の片に紐を著けまして、食事の度に私に掛けさせることにしたのです。

『御飯！』

といふ聲を聞くと、私は客があるか無いかを第一に思ひました。姉の家の人達は兎も角、知らない客の前でブリキを自分の首に掛けるほどキマリの惡いことは有

りませんでした。全く、ブリキの前垂には私も弱らせられました。でもその御蔭で、カチリと茶椀の音がする度に自分でも氣が著いて、着物を汚す癖は直つて行きました。

姉の夫といふは背の隆い、立派な威嚴のある人でした。國から出で來て、一時は大藏省の官吏にも成りました。斯の人と兄とは極く親しい間柄で、私のこともは眞身の弟のやうに見て呉れ、私のために數寄屋河岸にある小學校を選んで呉れました。斯の人は又、鷹揚な腮を撫でながら私を前に置いて論語の素讀を授けて呉れたり、閑暇な時には東京の町々だの公園だのを見せに連れて歩いて呉れました。私は未だに斯の人が當時流行つた臘虎の帽子を冠つた紳士らしい風采を覺えて居ます。それから觀兵式の日に連れられて行つて、初めて樽柿といふものを買つて宛行はれたことなどを覺えて居ます。その頃のことを思出すと海の見える座敷で、

海苔の香氣を嗅いだことが私の幼い記憶に浮び揚つて來ます。なんでも其日は姉の家のものが皆な揃つて外出して、私はめづらしい處で一緒に食事をしたやうに思ひますが、それが品川邊の料理屋であつたか何處であつたかは、よく覺えません。唯海苔の香氣の記憶だけ、しかも鼻の先へ匂つて來るやうに殘つて居ます。そんな風にして私は諸方へ連れられて行きました。

姉夫婦の傍には私は一年あまりしか居りませんでしたが、しかしその間に受けた愛情は少年の私の心に深く刻み著けられました。それからずつと後に成つて、姉の夫の身の上には種々な變化が起り、その行ひには烈しい非難を受けるやうな事もありました。さういふ中でも、猶私が周圍の人のやうには姉の夫を考へて居なかつたといふは、全く斯の少年の時に受けた溫い深切の爲で——丁度、それが一點の燈火の如くに私の心の奥に燃えて居たからであります。

素朴な私の田舍の家と違ひ、姉の家にはまた別の空氣がありました。そこの祖母さんは名古屋風の趣味を持つた人で、綺麗に片附けた下座敷へ琴を取出して時時なぐさみに搔鳴しました。甥は私よりは三つも下の少年でしたが、謠曲の文句などを諳記して居て、斯の祖母さんの側でよく歌ひました。

二階座敷で時折樂しい酒宴のあつたことも、客を欵待すことの好きな姉の夫の氣風をあらはして居りました。同じ銀座の町の近くには、矢張同鄕の豐田さんといふ人が住んで居て、折につけて呼ばれて來ました。その使に行くのが何時でも私でした。ゆつくり酒を酌みかはすといふ夜などは、豐田さんは興に乘つて歌ひ出すことが有りました。いかめしい顏附に似合はない豐田さんの洒落は皆なを笑はせました。姉の夫も淸しい好い音聲で故鄕の方の俗謠などを歌ひましたが、その聲には私は聞き恍れる位でした。

斯うして寛濶な家庭の中でも、姉は物のキマリの好いことを悦んでそれを私に話して聞かせたものです。例へば、日曜毎に訪ねて來る同郷の青年があるとか、その青年が甥のところへ買つて持つて來るものは鹽煎餅と定つて居るとか、それを缺かしたことが無いとか、そんなことまで姉の心を悦ばせました。

銀さんと私とは姉の家から同じ小學校へ通ひましたが一年ばかり經つ間に銀さんの方は學校を退いて了ました。銀さんは學問よりも商業で身を立てるようにと姉夫婦から說き勸められて、日本橋のある紙問屋へ奉公に行くことに成りました。國から二番目の兄に養父が上京した節、銀さんも御店の方から暇を貰つて逢ひに來たことが有りました。その時は皆な揃つて紀念の寫眞を撮りました。その中で銀さん一人は商人らしい前垂掛で撮れて居ます。

姉が年寄から子供まで連れて夫と一緒に歸國する前には、種々なことが有りました。ある日、私は姉に言ひ附けられて、今迄行つたことの無い家へ使に出掛けたことを覺えて居ます。姉は祖母さんに內證で、簞笥の中から自分の著物を取出して風呂敷包にして私に背負はせました。私の行つた先は店頭に暗い暖簾の掛つた家です。番頭が居まして、私が背負つて行つた著物を一枚々々ひろげて見て、通ひ帳の中へ御金を入れて私に渡しました。私は子供心にもいくらか斯の意味を悟りました。姉のところへ引返してから、斯ういふ使はもう御免だと言つて、姉を笑はせたことが有りました。さういふ中でも、姉は祖母さんの膳にだけ新しいオサシミをつけました。祖母さんの好きな物は何よりもオサシミでしたから……

姉と一緒に居た間、私は殆んど忿怒といふものも知らなかつたほど自分の少年らしい性質が延びて行つたことを感じます。甥の下にはまだ頑是ない年頃の姪が一人ありました。その姪は姉が東京に家を持つてから生れた子供です。ある日、

私が學校から歸つて來て自分の机のところへ行つて見ますと大事に〳〵して置いた新しい洋綴の帳面には目茶苦茶に何か書き散してありました。斯の亂暴な行ひは直に小さな姪のいたづらと知れましたが、そのために自分の忿怒を奈何することも出來ませんでした。私はその帳面を引裂いて了ひました。口惜しかつたと思つたことは、その時ぐらゐのものです。一體に姉は清潔好きでしたから、私は姉を悅ばせやうと思つて表や庭の掃除をよくやりました。ある時、二階の硝子窓の外にある露臺へ夏の雨が來ました。私はその雨降の中へ出て、汚れたトタンの上を洗つて、姉を悅ばせたことも有りました。どうかすると姉は夫や子供と共に寢室を離れないで居る朝などには、早起の祖母さんが階下でブツ〳〵言ひます。さういふ時に、姉を呼び起しに行くのは私の役廻りでした。

姉の家族が故郷へ向けて出發した日のことは、まだいくらか私の眼にあります。

白い髪の祖母さんから、子供まで、皆な國まで買切の人力車に乘つて出掛けました。姉の居た家には鷲津さんが入ることに成りました。で、私は眞身の姉の手から『鷲津の姉さん』と呼ぶ人の手に渡されたのです。

鷲津さんの家族はたつた親子二人ぎりでした。禿頭に細いチョン髷を結つて居た老爺さんと、その娘にあたる獨身の姉さんと、斯の老爺さんは私達の隣國の舊藩士で、過去つた時代には相應の高い地位に居たとやら、多藝な人で、和歌の添削などをするかたはら、その家へ移つて來てからは碁會所の看板を掛けました。鷲津の姉さんはまた女でも可成に碁の打てる人でしたから、部屋々々に毛氈などを敷き、重い碁盤を置き、客が來ればその相手に成りました。

一人東京に殘されました少年の私の身に取つては、斯の同じ家の内が全く別の世界のやうに成りました。姉は私のことを鷲津さんによく賴んで置いて歸て行つ

つたのですが、最早私の周圍には以前のやうな注意を拂つて呉れる人は居りませんでした。私はそれを感じました。のみならず、私は周圍の冷淡な人達に對して自分の少年らしい感情を隱すやうに成りました。たま〳〵學校から歸つて來て見ると、老爺さんは鏡に向つて眉間の瘤を氣にして居ます。なんでも其瘤は非常に大きなニキビの塊だといふことでした。どうして、年は取つてもなか〳〵の洒落ものでしたから、到頭老爺さんは剃刀を取出して、自分でそのニキビの塊を切りました。そんなことを見る度に、私は斯の年甲斐のない老人に對してさげすみの念を抱きました。

斯ういふ家庭の空氣でしたから、自然と私の心は屋外の方へ向ひました。私も早や東京へ出たての時のやうに髮などを長く垂れ下げて、黃八丈の羽織をヨソイキに著るやうな少年ではありませんでした。毎朝數寄屋河岸へ通ふ途中で一緒に

成る男や女の學校友達の顏は、私には親しいものと成つて來ました。その頃普通教育は男も女も合併の時分で、私は一方に炭屋の子息さんと席を並べ、一方には時計屋の娘やある官吏の娘などと並んで腰掛けました。斯の官吏の娘の家は私達が住むと同じ町の並びにありました。姉妹で學校へ通つて居ました。何がなしに私はその家の前を通るのを樂みにして、私が居る家と同じ型の圓柱、同じ型の窓を望んでは、そこに同級の女の友達が住むことを懷しみました。その頃は又、學級の編成の都合かして、生徒を上の組へ飛ばせるといふことが有りました。その時、私は炭屋の子息さんと時計屋の娘と三人で上の組に編み入れられましたが、官吏の娘だけは元の組に殘りました。休みの時間に、時計屋の娘が先生の前に來て、自分一人昇級するのをブツ〳〵言ふものが有ると言つて　訴へたことを覺えて居ます。私は氣の昂つた時計屋の娘よりも、ショゲた官吏の娘の方を可哀さう

だと思つたことも有りました。

鷲津の姉さんは色の淺黑い、瘠ぎすな、男性的の婦人でそれに驚くほど氣の短い性質を有つて居ました。その性急なことは、鍋に仕掛けた芋でも人參でも十分煮えるのを待つて居られないといふ程でした。早く煮て、早く食つて、早く膳を片附けて了ひたい……それが姉さんの癖でしたから、私も學校の方へ氣が急かれる時などは、生煮の物でも何でもサッサと掻込んで、成るべく早いことをやりました。それでも姉さんには急き立てられました。そんな風にして私は一年ばかりも斯の婦人に養はれましたが、二番目の兄が國から上京して斯のさまを見た時は、私のために心配し始めた位でした。鷲津の姉さんの早く、早くで、終には私は青く成つて了ひました。

七

私は極く早い頃から臆病な性質をあらはしました。銀さんは國に居る頃から私と違ひまして、木登りの惡戯から脚に大きな刺などが差さつても親達に見つかる迄はそれを隱して居るといふ方でしたが、私は他の身體の疼痛を想像するにも堪へませんでした。東京へ修業に出て來てからも、二番目の兄に連れられて寄席などへ遊びに行きますと、中入前あたりには妙に私は心細く成つて來るのが癖でした。斯の兄は其頃から度々上京しまして旅屋に日を送りましたから、私もよく銀座邊の寄席へは連れられて行きましたが、騷がしい樂屋の鳴物だの役者の假白だのを聞いて居ると、何時でも私は堪へ難いほどの不安な念に襲はれました。そ

の度に、私は兄一人を殘して置いて、寄席から逃げて歸り〳〵しました。それほど私は臆病でした。

一方から言へば私は八歳の昔に早や初戀を感じたほどの少年で（そのことは既に貴女に御話しましたが）、その私が鷲津の姉さんのやうな家庭の空氣の中に置かれて、種々な大人の婬蕩を見たり聞いたりしながら、しかも少年らしい多くの誘惑から自分を護り得たといふのも、一つは斯の臆病からだと自分で思ひ當ることが有ります。

二番目の兄は鷲津の姉さんの傍に長く私を置くことを好みませんでした。そこで私は姉や兄達の懇意な豐田さんの家の方へ引取られて、豐田さんの監督の下に勉強することに成つたのです。丁度それは私が十一の年の秋頃でした。

貴女は十一二といふ年頃をお母さんの側で奈何な風に送つたでせうか。私は全く獨りで――母からも、姉からも離れて――早くから他人の中へ投げ出されたやうなものでした。それが私に取つての修業といふものでした。私はいかにせば、鷲津の姉さんのやうな性急で氣むづかしい人を喜ばすであらうかと、そんなことに心を碎きました。一旦等閑にされた私は豐田さんの方へ引移つて、思はぬ深切と温い心とを見つけたのです。

豐田さんと言へば、姉が東京に居ました時分にはよく私も使に行きましたからそこの細君や隱居さんは全く知らない顏でもありませんでした。姉の家から細い露路を曲つて行くと、鼈甲屋、時計屋などのある銀座の裏通りの町、そこにある黑い土藏造りの豐田さんの家、鐵格子の嵌つた窓などは、私には既に親しいものでした。私は豐田さんのことを小父さん、隱居さんのことをお婆さんと呼ぶやうに成りました。細君は本來なら叔母さんと呼ぶべきでしたが、豐田さんとは大分

年も違つて居ましたし、兄でも姉でも斯の人ばかりは豐田の姉さんと言ひました
から、私もそれに倣つて姉さんと呼びました。
例の往來に面した鐵格子の嵌つた窓――私に取つては忘れることの出來ない朝
に晩に行つた窓――その窓の下にある三疊ばかりの小部屋に私は鷲津さんの家か
ら運んで行つた自分の机を置きました。壁によせて、抽斗の附いた本箱をも置き
ました。抽斗の中には上京の折に父が餞別に書いて呉れた座右の銘なぞが入れて
あります。稀には私は幾枚かある其短冊を取出して見ます。『温良恭謙讓』と一
行に書いたのがあれば『勉强』とか『儉約』とかの文字をいくつも書き並べたのもあ
ります。私は器械的に繰返して見て、寧ろ父の手蹟を見るといふだけに滿足して、
復た紙に包んで元の抽斗の中へ藏つて置きました。國許の父からはよく便りがあ
りました。父は村の中の眺望の好い位置を擇んで小さな別莊を造つたとかで、母

と共に新築の家の方へ移つたことや、その建物から見える遠近の山々、谷、林の
さまなどを書いて寄しました。其頃から漸く私も父へ宛て丶手紙を書くやうに成
りました。時には豐田の小父さんがニコ〳〵しながら私の机の側へ來まして、
『お父さんの許へ奈樣な手紙を書いたか、お見せ。そんなことを隱すもんぢや無
い。』
と言ひますから、私が學校の作文でも書くやうに半紙に書きつけた手紙を出して
見せますと、小父さんは笑つて、それを奥の方に居るお婆さんや姉さんのところ
へ持つて行つて讀んで聞かせたりなどしました。『むう、斯の手紙はなか〳〵好く
出來た。』なんて小父さんは私を勵ました後で、是處に斯う書けとか、彼處は彼樣
直せとか言つて呉れました。道さん――ホラ、お文さんの直ぐ上の兄さん――か
らもめづらしく便りがありました。私は窓の下にその幼友達の手紙を展げて、何

度も何度も繰返し讀みました。二年あまり半分夢中で都會に暮して來た私の心は田舍々々した日のあたつた故郷の田圃側の方へ歸つて行きました。しばらく忘れて居てめつたに平素思出さないやうなことが、しかも一部分だけ妙に私の頭腦の中に光つて來ました。例へば、お牧がよく水汲みに行つた裏の深い井戸の中へ、ある夏の日のこと兄が手製のレモン水を罎詰にしまして、細引に釣して冷したことが有りました。私はそのレモン水の罎を思出しました。私は又、道さんだの門屋の子息だのと一緒に遊び廻つて村の裏河づたひの細道、清水の槽、落雷のために裂けた高い杉の幹、それから樂しい爐邊の火に映るお文さんのお母さんの艶々とした頰邊などを遠く離れて居てしかもありゝ〳〵と見ることが出來ました。私は道さんへ宛てゝ少年らしい返事を出しました。その返事は道さんから父の方へ廻つたと見えて、父が私の書いた手紙を批評して寄したことが有りました。

覺束ないながらも私が故郷へ文通するやうに成つてから、父は話をするやうに種々な事を手紙で知らせて來ました。ある時、私は父から受取つた手紙を讀んで行くうちに、若い嫂の懷姙といふことにブツカリました。『行ひは必ず篤敬』などと饑別の短冊に書いて呉れる父のことですから、其手紙も至極眞面目に、私にも喜べといふ意味でした。しかし私は『あゝ左樣か、姉さんに赤んぼが出來たのか』では濟ませませんでした。何故と言ふに、大人には左樣いふ言葉は何でも無くても、少年の私は初めてそれを見つけたのですから。しかも父の手紙の中に見つけたのですから、私は自分の身のまはりに何とも言つて見やうの無い世界のあることを感じ始めました。

例の窓からは往來を隔てゝ時計屋の店頭が見えます。白い障子の箝硝子を通して錯々と時計を磨いて居る亭主の容子が見えます。その窓の下へは時折來て聲を

掛ける學校の友達もありました。斯の少年は級は私より一つ上でしたが、家が三十間堀で近くもあり、それに毎日同じ道を取つて學校へ通ひましたから、自然と心易く成りました。『六ちやん』『六ちやん』と言つて學校でも評判な元氣の好い生徒でした。六ちやんが横町を廻つて誘ひに來る朝などは、私は豐田のお婆さんに詰めて貰つた辨當を持つて、一緒に連立つて彌左衞門町の廣い通りへ出、丸茂といふ紙店の前を過ぎ、(あの紙店では私達はよく淸書の『おとりかへ』をして貰つたり黄ばんだ駿河半紙を買つたりしました。)それから數寄屋河岸について赤煉瓦の學校へ通ひました。どうかすると六ちやんと二人で辨當の空箱を振りくりながら歸つて來て、往來の眞中へぶちまけたことも有りました。

豐田の姉さんは性來多病で——多病な位ですから怜悧な性質の婦人だと他から言はれて居ました——起きたり臥たりしてるといふ方でしたから、直接に私の面

倒を見て呉れたのは主にお婆さんでした。

『お婆さん、霜燒が痒い。』

そんなことを言つて夜中に私が泣きますと、お婆さんは臥床から身を起して、傷み腫れた私の足を叩いて呉れました。

斯のお婆さんは私に、行儀といふものを見覺えなければ成らないと言つて、種種な細い注意を拂ふことを敎へました。客の送迎は私の役廻りでしたが、私はお老婆さんに言ひ附けられた通り客の下駄を直し、茶などもよく運んで行きました。

『江戸は火事早いよ。』

これがお婆さんの口癖でした。お婆さんに言はせると、東京は生馬の眼でも拔かうといふ位の敏捷な氣風のところだ、愚圖々々して居ては駄目だ、第一都會の

人は物の言ひ方からして違ふ――よくそれを私に言つて聞かせたものでした。姉さんも笑ひながら、

『そりや、お前さん、東京の人の話は「何」で通るからネ。ちよいとあの何を何して下さいナ――あの何ですか――それでお前さん、話がもうちやんと解つて了ふんだからネ。えらいよ。』

斯樣な風に言つて聞かせました。地方から出て來た斯の姉さんでもお婆さんでも、小父さんを助けて、都會で自分等の運命を築き上げやうとする健氣な人達でした。

めづらしく姉さんの氣分の好い日が續いて、屋外へでも歩きに行かうといふ夕方などは、お婆さんは非常に悅びました。その頃、尾張町の角のところには毎晩のやうに八百屋の市が立ちました。私は靜かに歩いて行く姉さんやお婆さんの後に

隨いて、買物に集る諸方の内儀さんだの、市場の灯だの、積み重ねた野菜と野菜の間だのを歩き廻るのを樂みにしました。銀座の緣日の晩などには、よくまた小父さんに連れられて行つたものです。乞食の集つて居るやうな薄暗いところから急に明るい群集の中へ出ることは、妙に私の心を唆りました。小父さんは夜見世をひやかすのが好きで、私を連れては種々な物のごちやゝ並んだ露店の前を眺め眺め歩きました。

斯の手紙を書きかけて居るうちに、私は今一寸こゝで、姉の家や鷲津さんの家を振返つて見たいやうな心が起りました。といふはあの二軒の家に有るもので、豐田さんの家には無いものがあります。私の生れた家にも無いものです。私が姉の家に居る頃、あそこの祖母さんが時々なぐさみに琴を鳴らしたことを貴女に御話しましたらう。小さな甥までが謠曲の一ふしぐらゐは諳記じて居ることを御話

しましたらう。鷲津さんの家が矢張それで、しめやかな小唄でも口吟んで見るやうな聲が老人の部屋から時々泄れて聞えました。左樣いふ音樂の空氣といふものは豐田さんの家の方へ移つてからは、バッタリ無くなりました。

何故私が斯樣なことを御話するかといふに、あの甥の一生を考へ、豐田さんの家に殘つた人達のことを思ひ、又今日までの私自身の生涯を辿つて見るに、斯の家に附いた空氣は何處までも同じやうに流れて行つて居ますから、それは實に爭はれないものだと思ひます。私の父はあれでもいくらか横笛を吹いたといふことですが、私の兄弟で好い耳を持つて居るやうなものは一人も居りません。あの甥の造つた家庭には、別に樂器を置かないまでも、何處かに音樂の空氣の流れた好ましいところが有りました。あの甥の一生がそれでした。私は自分自身がもうすこし寛濶であつても好いと思ふことは度々ですが、しかしそれを奈何することも

出來ません。私が今住む家は殆んど周圍を音樂で取繞かれて居るやうなところにあります。表へ出れば一中節の師匠、裏へ行けば常盤津の家元、左樣いふ町の中に住ひながら、未だに私は自分の家へやはらかな空氣を取入れることも出來ずに居ります。

それから比べて見ますと、繪畫に趣味を有つことは——私はその性質を身に近い女達にも、自分の子供にも見つけることが出來るやうに思ひます。私自身にも繪畫を好むことは天性に近いやうな氣がします。少年の時代から、いくらか進んだ普通教育を受けるまで、私は最もそれを得意にしました。斯の傾向はずつと早い頃からあらはれまして、豐田さんの家へ行つて二年目に成る頃には、私は柔い鉛筆と畫學紙を携へて、築地の居留地の方までも鉛筆畫を作りに出掛けたことがあります。豐田のお婆さんは私が何をするかと思つて、ある日、私の行く方へ一緒

に歩いて來ました。私はお婆さんを橋の畔に立たせて置いて、築地邊の景色を寫しました。私は又、參謀本部の方までも行つて、あの建物を寫した鉛筆畫を一枚作りました。それは粗末な子供らしいもので有りましたが、兎も角も、御手本に據らないで、自分で見たまゝを畫にしようと骨折つたものでした。小父さんに勸められて私は左樣いふ小さな製作の一つを國の方へ送りました。父から來た手紙の中には、『貴樣は繪畫を學ぶが好からうと思ふ。』といふ意味のことを書いて寄したことも有りました。

お婆さんや姉さんが私のために注意して居て呉れたことは、銀さんの著物の世話まで届いたのを見ても解ります。私達兄弟の少年は二人だけ東京に殘つて居てもめつたに逢ふやうな機會は有りませんでした。なにしろ銀さんは御店ずまひの身で、宿人の時より外には豐田さんの家へも來られませんでしたから。で、銀

さんの著物の洗濯でも出來た時には私の方から持つて行きました。日本橋の本町です。風呂敷包を擁へながら紙問屋の店頭まで行きますと、そこに居る番頭が直ぐ私を見つけまして、小僧にそれと知らせたものです。銀さんは前垂の塵埃を拂ひながら、奥の藏の方から出て來て、庭で荷造りする人達の間などを通りましてそれから私の方へ來ました。私の口から言つては可笑しいやうですが、銀さんも大きく成りました。それに髪などを短くしまして、すつかり御店風に成りました。私逢二人は店の横手の日のあたつた土藏のところに倚凭りながら、少年らしい簡單な言葉を交換すのみでした。

私は勤奉公する銀さんから自分の自由な身を羨み見られるのがツライと思つたことも有り、時にはいそがしさうな店頭の樣子を眺めて、碌に話もせずに別れて來ることが有りました。左樣いふ時には、私達は唯ニッコリ顔を見合せるに過ぎ

ませんでした。銀さんも亦默つて私の手から洗濯著物を受取つて、御店の方へ引込んで行つて了ひました……

ある日、豐田さんの家では田舍からの女の客を迎へました。お霜婆がめづらしく訪ねて來たのでした。お霜婆は散々國の方の話をして、豐田のお婆さんや姉さんから私達兄弟のことも聞取りました。御陰で國への土產話が出來た、それを別れ際まで搔口說きました。他人の家で修業する身には、舊い出入の女も客だと思ひましたから、私はお霜婆の下駄を揃へて置きました。

『まあ、俺の履物まで直して下すつたさうな——』

と言つて、お霜婆は私の方を見て、ホロリと涙を落しました。

舊い馴染が歸つて行つた後で、お霜婆の話の中に、『俺が——俺が——』と言つたことは私の耳に殘りました。私の故郷では、目上の者に對しても、女でも『俺』

です。

斯の手紙の序に、私は田舍言葉のことをこゝに書きつけませう。一概に田舍言葉と言ひますけれども、鄙びた言葉づかひが柔軟に働いて東京言葉では言ひ表はせないやうな微細な陰影までも言ひ表はせるのが有ります。

私の故郷の方の言葉では大きいといふことを三段に形容することが出來ます。それから助動詞などにも古い言葉の殘つたのが有つて、面白く、細く、しかも簡潔な働きをして居るのに氣がつくことが有ります。田舍言葉と言つても、粗野なばかりでは有りません。

左樣言へば、都へも寒い雨がやつて來ました。斯の空には御地の山々は雪でせうか。貴女がたは例の炬燵を持ち出したでせうか。

八

私は巣の入口のみを貴女に御話して、まだ奥の方はお目に掛けませんでした。豐田さんの住居は二棟の二階建の家屋から出來て居て、それが高い引窓から明りを取るやうにした板敷の廊下で結び著けてありました。中央の廊下から奥の二階へ通ふことも出來、臺所の方へ廻ることも出來ました。奥の下座敷が豐田の叔父さんや姉さんやお婆さんの居間でした。客でもあると、叔父さんは煙草盆を提げて土藏造の内の部屋へ出掛けて來ます。その暗い部屋の外が玄關で、私の机が置いてあるのもそこなれば、私がよく行つた往來の見える窓もそこにありました。斯樣な風に、私の勉強する部屋はいくらか奥の方と離れて居ましたから、そこで私

は種々な少年らしい遊戯を考へ出しました。私は國に居てよく木登りをしたやうに、その土藏造の部屋の入口へ兩脚を突張りまして、それを左右の手で支へて、次第に高く登つて行くことを企てました。手を放せば、トンと私は入口の階段の上へ飛び降りることが出來たのです。朝に晩に大人に見つからないやうにしてはよく登りましたが、ある時私の手が滑つて堅い階段のところでひどく背骨を打つたことがありました。しばらくの間私は身動きすることも出來ませんでした。これに懲りて次第にその遊戯も止めるやうに成つて行きました。

もつと危い遊戯を考へ出したこともあります。それは土藏の二階へ昇る梯子が二段に成つて居た爲に、私は下から逆さに昇つて行くことを企てたのです。これは梯子が足を掛け易く出來て居たからもでありました。しかし斯の危い戯れよりも安全で、もつと少年の私の心を喜ばせたのは、低い梯子から高い梯子へ昇らう

とする中途の袋戸棚の上から、逆にでんぐり返しを打つことでした。ある日も人の居ない時を見て、袋戸棚の上へ身體を寢かし、足の方から段々高く持ち上げて見事に疊の上へ立つたと思ひましたら、そこに豐田の叔父さんが笑ひながら立て見て居て、ひどく私は赤面したことが有りました。

山家育ちの私は、時には叔父さんから、叱られるやうな惡戯をもやりました。ある時私は手頃な小刀を得ました。國に居れば鉈や鎌で立木の枝を拂つたり皮を剝いたりしたやうに、私は唯譯もなくその小刀を試みたくて成りませんでした。で、入口の格子の中に閉める戸へ行つてそれを試みました。大きなフシ穴を一つ刮り拔いて了つた頃に、叔父さんが來て見て呆れまして、

『貴樣はもつと悧好な奴だと思つたら、存外馬鹿だナ。』

と言つて叱られました。斯ういふ惡戯をした時でも、叔父さんは實に寛大で、私に好く言つて聞かせるだけでした。私は斯の善良な主人から手荒い目などには一度も逢つたことが有りません。それだけ又た少年の心にも深く斯の叔父さんを尊敬しました。

ある日、私は表の方から馳出して來まして、格子を開けて上らうとする拍子に上り框に激しく躓きました。私の身體は飛んで玄關に轉げました。

『馬鹿め、上から下へ轉がり落ちることは有るが、下から上へ轉がり落ちる奴が有るかい。』

斯う言つて、叔父さんは笑ふやうな人でした。

斯の叔父さんは手細工が好きで、銀座の夜店から鋸、鉋の類を買つて來まして閑暇な時には種々な物を手造りにしました。大工の用ひるやうな道具箱までも具へて有りました。叔父さんの器用なことは天性で、左樣いふ道具を使つて餘念も

なく箱を組立てたり板を削つたりする間がまた叔父さんの一番樂しみな心の落ち著く時のやうに見えました。私は叔父さんから厚い木の片で『コンパス』の入物を造つて貰つたことも有ります。

奥座敷の縁先には夕ゝキの池が有りました。そこには澤山金魚が飼つて有りまして、姉さんも氣分の好い時にはその縁先に出て、長い優美な尻尾を引きながら青い藻の中に見え隠れする魚のさまなどを眺めては病を慰めたものでした。叔父さんは好く身體の動く人でしたから、その池に臭い泥でも溜ると、一番先きに立て水を替へたり掃除をしたりしました。左樣いふ時には私も叔父さんの手傳ひで手桶に半分ばかり入れた水を裏の井戸から池の方へ運ぶことが出來るやうに成りました。

家の裏は丁度銀座通の裏側にあたる露路でした。もし私が父に勸められたやうに畫家にでも成つて居たら、彼樣いふ露路を畫いたらうと思ふほどゴチャ〳〵した面白味のあるところでした。家々の下婢が水汲みに集るのもそこでしたし、番頭や職人などが朝晩に通ふのもそこでしたし、豐田さんの家の裏には小屋なども造りつけて有りまして時々〳〵薪を割る臭のするのもそこでした。まるで私は小鳥かなんどのやうに、唯譯もなくその間を歩き廻りました。時には露路の奥の方までも入つて行つて、活版屋の裏に埋高く積重ねてある屑の中から細い活字を拾ふのを樂しみにしました。丁度私が國に居た頃、榎の實を拾ひに行つて其下に落ちて居た檀鳥の羽を見つけたやうに。

話はいろ〳〵に飛びますが、こゝで私は子供と著物のことをすこし書きつけたいと思ひます。少年時代の神經質は妙に著物などにも表はれると思ひます。私はどつちかと言へば頓著しない方で、著ろと言はれる物を著て學校へ通ひました。羽

織や袴がすこしぐらゐ汚れても著慣れた物でさへあれば滿足しました。豐田のお婆さんは私の學校の方の成績を褒めまして、ある時私のために黑ずんだ黃八丈の羽織を仕立て直して呉れました。それは國の方に居る母が手織にした物でした。私が持て居る羽織では上等の物でした。ところが黃八丈などを著て學校の式に出る友達は一人も居ません。私はそれを思ふと、何となく人に嘲戲はれさうな氣がして、氣羞かしくて堪りませんでした。お婆さんはわざ〳〵式に間に合はせる積りで夜業までして仕立て直して呉れたのでしたが、到頭私は强情を言ひ張つて、その羽織を著るだけは許して貰つたことが有りました。

父が私に逢ふのを樂みにして一度上京しましたことは、私に取つて忘れ難いことの一つです。何故かと言ひますに、それぎり私は父には逢ひませんから。

豐田さんの家の奥の二階は廣い靜かな座敷で、そこに父は旅の毛布やら荷物やら

を解き、暫時逗留しました。豐田のお婆さんの亡くなつた連合だの、親戚にあたる年老いた漢學者だの、其他豐田さんの身のまはりの人で父の懇意な人は澤山ありまして、國に居る頃は父もまだ昔風に髪を束ねまして、それを紫の紐で結んで後の方へ垂れて居るやうな人でしたが、その旅で名古屋へ來て始めて散髪に成つた話などを私にして聞かせました。私は心の中で、お父さんも大分開けて來たと思ひました。

『あれは彼樣と、これは斯樣と――』

そんなことを父はよく獨語のやうに言つて、自分の考へを纏めようとするのが癖でした。

奥の二階からは廣い物乾場を通して町家の屋根、窓などが見られます。父は旅の包の中から桐の箱に入つた鏡を取出しましたから、

『お父さん、男が鏡を見るんですか。』

と私が尋ねますと、父は微笑んで、鏡といふものは男にも大切だ、殊に斯うして旅にでも來た時は、自分の容姿を正しくしなければ成らないと私に話しました。

父は隨分奇行に富んだ人で、到るところに逸話を殘しましたが、しかし子としての私の眼には面白いといふよりも氣の毒で、異常なといふよりも突飛に映りました。斯の上京で私はそれを感じたのでした。私の學校友達の六ちやんの家へも父が訪ねて行かうと言ひますから、私は一方には嬉しく思ひながら、一方には復た下手なことをして呉れなければ可いがと唯そればかり心配して、三十間堀の友達の家へ案内して行きました。六ちやんの家ではお母さんが後家さんで六ちやん達を育てゝ居ました。訪ねて行くと、先方でも大層喜んで呉れましたが、別れ際に父は六ちやんのお母さんからお盆を借りまして、土産がはりに持つて行つた大

きな蜜柑をその上に載せました。やがてツカ〳〵と立つて、その蜜柑を佛壇へ備へたといふものです。斯ういふ父の行ひが少年の私には唯奇異に思はれました。私は父の精神の美しいとか正直なとかを考へる餘裕はありませんでした。何でも早く六ちやんの家を辭して豐田さんの方へ父を連れ歸りたいと思ひました。

父は私の通ふ學校を見たいと言ひますから、數寄屋河岸の方へも案内しました。赤煉瓦の建物を見せました。河岸に石の轉がつたのが有りましたら、子供の通ふ路に斯ういふ石は危いと言つて、父はそれを往來の片隅に寄せたり、お堀の中へ捨たりするやうな人でした。

父が逗留の間に舊尾州公の邸をも訪ねました。その時、私も父に伴はれて、以前の尾張の殿樣といふ人の前に出ました。父は私が學校で作つた鉛筆畫の裏に私の名前などを書いたものを尾州公の前に差出しました。私は廣い御座敷に身を置

いて燈火の影で大人の話をするのを聞いたのと、歸りに御菓子を頂いて來たのと。その他に今記憶して居ることも有りません。父は又淺草邊の鹿の子といふ飲食店へも私を連て行つて、そこの主人や内儀さんに私を引合せました。

『斯樣なお子さんが御有りなさるの。』と内儀さんは愛相よく言つて、父と私の顔を見比べました。私は内儀さんばかりでなく多勢の女中からジロジロ傍へ來て顔を見られるのが厭でした。鹿の子の主人は地方出で、父とは懇意な人でした。

その時の私の心では、私は矢張郷里の山村の方に父を置いて考へたいと思ひました。私は一日も早く父が東京を引揚げて、あの年中焜火の燃えて居る爐邊の方へ歸つて行つて、老祖母さんやお母さんや、兄夫婦や、それから太助などと一緒に居て貰ひたいと思ひました。久し振の上京で、父は東京にある舊い知人を訪ねたり、亡くなつた人の御墓參をしたりしまして、間もなく郷里の方へ戻つて行きましたが、後で國から出て來た人の話には、餘程私が嬉しがるかと思つて上京したのに、子供には失望したと言つて、父が郷里へ戻つてから嘆息して他に話しましたとか。斯の手紙で私が今貴女に御話して居るのは、銀座の大倉組の角に點いた白い強い電燈の光が東京の人の眼に珍しく映つた頃のことです。尾張町の角にあつた日々新聞社の前に花瓦斯の點く晩などは、私は豐田さんの家の人達に隨いて、明るい夜の銀座通を歩きに行きましたものです。

九

豐田さんの家で可愛らしい赤兒の生れるまでは、私は土藏の中の部屋でお婆さんの側に寢かされましたが、赤兒が生れてからはお婆さんの代りに下婢が土藏の

方へ來て寢ることに成りました。とても子供があるまいと言はれて居た豐田の叔母さんは男の兒が生れたので、急に家の内の光景が變つて賑かに成つて來ました。それにしても下婢と同じ部屋に私を寢かして可からうか、と注意深いお婆さんがそれを言ふと、

『お婆さん――あんな子供ぢや有りませんか。』

と叔父さんが笑ひました。

私は奥の部屋の炬燵にあたりながら、眠たい耳に斯の話を聞いて居ました。叔父さんの言ふ通り、私はまだ子供でした。でもお婆さん達の話が分らないほどの子供では有りませんでした。

こゝまで書きつけて來ますと、豐田さんの家へ來て奉公して居た種々な下婢が私の眼に浮びます。あるものは目見えに來たかと思ふと直に暇を取つて行つたのもありましたし、あるものは又隨分長いこと好く勤めたのもありました。左樣いふ下婢と私との隔りは最早あのお霜と私との隔りでは無くなつて來ました。私には無智な彼等の言ふことや爲ることが分つて來ました。私が玄關の小部屋に机を控へて勉强して居りますと、彼等の一人が主人の子供を抱いて來て、窓の外を見せながらよく當時の流行唄を歌ひました。そんな唄を歌つて居ることが奥へ知れやうものなら、直に御目玉を頂戴するほど豐田さんの家では嚴しかつたものですから、それを主人に聞えないように、窓のところへ來ては歌ひましたのです。

私は誘惑され易い年頃になりました。もし私に性來の臆病と、一種の自尊心とが無かつたら、早く私は少年らしい好奇心の捕虜と成つたかも知れません。で、私は下婢が傍へ來て樂しさうに歌ふみだらな流行唄などに耳を傾けて、氣は浮々とさせることを感じながら、一方には左樣いふ女と碌に口も利かないほど彼等を

憎み蔑視むやうな心を持つて居ました。

私がよく行く窓の外には種々雑多のものが通りました。一頃流行つたパン屋が太鼓を叩いて來ますと、奥の方に居る叔母さん達までその音を聞きつけて、往來の見える窓側の鐵の格子から眺めました。

『パン屋のパン、

木村屋のパン――』

風變りなパン屋夫婦の洋裝、太鼓や三味線の音などは人の氣を浮き立たせました。あのパン屋はもとは相應な官吏であつたとか、細君はそれ者の果だとか、どうして夫婦ともナカ〳〵の洒落者だとか、叔母さん達は窓側で互の眼前を通る藝人の噂をしました。町々の子供等ばかりでなく、大人まで爭つて呼びとめては買つたものでした。それパン屋が來たと言へば、窓の外の狹い往來は人だかりがし

て、何となく私の幼い心をそゝりました。

豐田さんの家である年の節句か何かの折に草餅を造つたことをも、私はこゝに書きつけて置きたいと思ひます。何故といふに、田舍に居る身内のものから遠く離れた私には、左樣いふ草餅の香氣などを嗅ぐなど可懷しい思をさせるものが有りませんでしたから。尤も、草餅と言つても、蓬のたりない都では田舍で食べるほど青いシコ〳〵としたのは出來ません。これでもつと草が多く入つて居て、餅の合せ目から田舍風のアンコが這出したら、そんなことを思ひました。

臺所に近い奥の部屋ではお婆さんや叔母さんが下婢を相手にしてその草餅を造へる、私は出來たのを重箱に入れて貰つて近所へ配りに行きました。見ると、お婆さん達は揑ねた餅を手頃にちぎつては、それを掌で薄べたく圓く延ばして居りますから、

『お婆さん、僕の田舍では其樣な風にしません。』

と私は餘計なことながら、鄕里の方で母などが造つて居たのを思出して、母は小皿にちぎつた餅を宛行つてその上で延ばすといふ話をしました。

お婆さんは成程とは思つたやうでしたが、

『えゝ、斯の子は――ほんとにベンカウなことを言ふ子だ。』

と叱るやうに言つて見せました。『ベンカウ』とは矢張私達の田舍で使ふ言葉で、まあ生意氣と言つたら近いかも知れませんが、すつかり意味の宛篏まる東京言葉は一寸思ひ當りません。

私の學資は毎月極めて鄕里から送つて寄して呉れるといふ風には成つて居ませんでした。これには私は多少の不安を感じて居ました。すると、ある時のこと長兄の許から手紙が來て、金は纏めて豐田の叔父さんの方へ送つたから買ひたい物

があらば買へ、苦しい中でも貴樣達は東京へ出してあるのだから、その積りで勉強せよ、と言つて寄しました。幾度私はその手紙を繰返し讀んで見て、兄の言葉に勵まされたか知れません。丁度、故中村正直氏の書いたナポレオンの小傳が私の手に入りました。傳記らしい傳記で私が初めて讀んだのは恐らくその小冊子です。中でも、ナポレオンの青年時代のことは酷く私の心を動かしました。私は例の日光の射し込む窓の下で獨りその小傳を開いては感激の涙を流すやうに成りました。

斯ういふ物に感じ易い私の少年時代が一方では極く無作法な荒くれた時でも有りました。姉がまだ東京に居ました頃、あの家の二階の袋戸棚の前へ幼い甥を呼びつけて、その戸棚の中に入れて置いた燒饅頭が何日の間にか失くなつたことを責めたことが有りました。私はそれを見て、心の中で甥の行ひを笑つたり憐んだ

りしました。どうでせう、その私が豐田さんの家へ來てからは甥を笑へなく成りました。私は白狀します、どうかすると私はお腹が空いて〳〵堪らないことが有りました。さういふ時には我知らず甥と同じ行ひに出て、煮付けた唐辛の葉などはよく摘みました。私は又、自分の空腹を滿す爲でも何でもないのに、酒屋へ使に行つた歸りなどには往來で酢の罎を傾げて、人知れずそれを舐めて見たりしました。

注意深い豐田のお婆さんでも左樣〳〵は氣が附きません。私はそれを好い事にして、ある日、酒屋から酒を買つて戻りました。煮物にでも使ふのでしたらう。叔父さんはあまり酒をやらない方でしたから、私が持つて歸つた罎の酒は減つて居ました。

『高い酒屋だねえ。』

とお婆さんに言はれた時は、思はず私は紅く成りました。

午後の三時は毎日私の樂みにした時でした。物のキマリの好い豐田さんの家では、三時といふと必ず煎餅なり燒芋なりが出ました。あのウマさうに氣の出るやつを輪切にした水芋か、黃色くホコ〳〵とした栗芋かにブツカる時には殊に嬉しく思ひました。夏にでも成ると、土藏の廂間から涼しい風の來るところへ御櫃を持出して、その上から竹の簾を掛けて置いても、まだそれでも暑さに蒸されて御櫃の臭氣が御飯に移ることがあります。儉約なお婆さんは、それを握飯に丹精して、醬油で味を附けまして、熱い火で燒いたのを茶の時に出しました。いかに三時が待遠しくても、終にはその握飯の微かな氣臭が私の鼻に附いて了ひました。折角丹精して造へることを思ふと、お婆さんの氣を惡くさせたくない。私の癖として、人が惡い顏をするのを見ては居られません。そこで私は握飯の遣り場に窮

つて、玄關の小部屋の縁の下へそッと藏つて置くことにしました。土藏造で床も高く出來て居ましたから。斯の人の知らない倉庫を暮の煤拂には開けなければ成りませんでした、その時は實はハラ〳〵しました。

私の生れた家では子供に金錢は持たせない習慣でした。それが癖に成つて、私は東京へ出て來てからも自分で金錢を所有したことは少く、餘分なものは家の人に預けました。時とすると豐田さんへ來る客から土產がはりとして包んだ金錢を貰つたことも有りましたが、それよりか珍しい風景の彩色した板畫でも貰つた時の方が私には難有かつたのです。私は子供の時分から金錢に對しては淡泊な方でした。で、私は唐辛の葉の煮たのなどは摘んでも、他の所有する金錢を欲しいといふ心は起りませんでした。ところが、それが全く私に無いとは言へません。有ります。私は別に何を買ひたいでは無し、それで居ながら不圖さういふ心に成つ

たのです。その一時の出來心で私の爲たことは、知られずに濟んだとは言へ、今だに私は冷汗の流れるやうな心地が殘つて居ます。

ある物語の中に、私はあの當時のことを思出して書きつけて見たことも有りました。

『叔母の寢床はもう其時分から敷いて有つた。すこし叔母が氣分の好い時には、池の金魚の見えるところへ人を集めて、病を慰める爲に花札を引いた。其時自分は雨だの日の出たのを畫いてある札を持つて見て、「青たん」とか「三光」とかいふことを始めて習つた。よく臺所の方では、叔母の爲に牛肉のソップを製へた。儉約な祖母さんはそのソップ渣へ味を附けて自分等にも食はせたが、終にはそのにほひが鼻へ著いて、誰も食ふ氣に成れなかつた。仕方が無いから、祖母さんはそれを乾して三時の茶といふと出した。そのソップを製へる爲に生の牛肉を細かく

寒の目に切つて、口の長い大きな徳利へ入れる。是がまた一役で、氣の長いものでなければ勤まらなかつた。丁度奥の二階には、叔父の親戚に當る年老いた漢學者が親子連で來て世話に成つて居て、結句牛肉の切り役は斯の温厚な白髪の老先生に廻つた。老先生が眼鏡を掛て、階下で牛肉を切つて居る間は、奥の二階は閑寂として居る。そこには先生の書藉が置並べてある。机の上には先生の置き忘れた金錢がある。その金錢を十錢許り盗んだものがある——この盗みをしたものが自分だ……』

金錢を置き忘れる位の老先生のことですから、斯の私の行ひも別段詮議されずに終つたのでせう。慚愧の情はずつと後に成つてその年老いた漢學者の歿する頃までも續いて居ました。私が老先生の靈前へと思つて、香奠を封じた手紙を書いた時にも、活々と胸に浮んだはそのことでした。假令金錢は僅かでも、私には全く左樣いふ心を起したことが無いとは言へないのですから。

金錢はあまり欲しいとは思はなかつたが、品物は欲しいと思つた。私は斯ういふ言ひ廻しをして自分の少年時代に爲たことを辯解しやうとも思ひません。取りましたから取りました。どういふものか、ふいとそんな量見に成りました。それが私の幼い日の中で掻消すことの出來ない記憶の一つとして殘つて居るのです。

それから同じ物語の續きとして、もう一つ私は書きにくいことを書きました。

『尾張町の夜店には野菜の市があつて、家の人が買ひに出掛けたものだ。自分もよく隨いて行つた。そこには少年の眼を引き易いやうな繪本を商ふ店もある。美しい表紙畫の草雙紙が數多そこには並べてある。何がなしにその草雙紙が欲しく成つて、何度も〳〵其前を往つたり來たりして、終に混雜に紛れて一冊懷中に入れた少年がある——斯の少年が、自分だ。其時自分は捕まりさうにして、命がけ

で逃げた。草雙紙は置場所に困つて、溝の中へ裂いて捨てた。もし彼の時捕つたら、自分の生涯は奈何な風に成つて行つたらう……』

左樣です。確かに斯ういふことも有りました。ナポレオンの傳記を讀んで感激の涙を流すといふことゝ、夜見世に並べてある草雙紙を懷中に入れるといふことと、それが私の少年時代には同時に起つて來たのです。私は自分の爲たことに恥ぢ恐れて、二度とそんな行ひはすまいと心に堅く誓ひました。

斯ういふことを貴女に書き送るとは自分の愚かを表白するに當ります。けれども好いと思ふことでも惡いと思ふことでも、唯それだけでは私には漠然としたものでした。愚かな私は何事でも自分で行つて見た上でなければ、眞實にその意味を悟ることが出來ませんでした。

銀座の夜見世と言へば、夜風の樂しい夏の晩などは私もよく豐田の叔父さんに

隨いて歩きに出掛けましたものです。こゝで私は物に好き嫌ひの激しい少年時代のことを一寸書き添へやうと思ひます。その情の激しさは淡泊で洒落な大人の思ひもよらないことが有ると言ひたい位であります。私達の著る物でも、食べる物でも、すべての上にそれが表れて居ます。例へば芋の莖の酢煮に青豆を添へたのは、いかにも夏らしい總菜で、豐田さんの家でもよく造りましたし、今では私は食物に嫌ひな物があまり有りませんから、膳に上れば食べもします。ところが私の子供の自分には、どうしてもそれが食べられませんでした。

斯の好き嫌ひの激しい子供らしさから、ある時、私はめつたに怒つたことの無い豐田の叔父さんを怒らせました。丁度あの海水浴に冠るやうな緣の廣い麥藁帽子が流行つて來た時でした。叔父さんの積りでは、輕くて少年の冠り物に好いと思つたのでせう。私にも一つ買つて遣らうと言つて呉れました。私の心では、ど

うしても彼の夏帽子を冠る氣に成れない。それよりか帽子なしの方がまだ好ましい。何故そんなら彼の流行の輕い麥藁帽が嫌ひだかと言ふに、それは私には説明が出來ません。唯、蟲が好かなかつたまでゞす。そこで私は叔父さんに言出しかねて、尾張町邊の夜見世の前へ誘はるゝまゝに隨いて行きました。『どうだ、是は貴樣に丁度好からう。』と叔父さんは店先で擇びまして、私の頭に合ふか奈何かと冠せて見ました。私は内々買つて貰ひたくないのですから、これはすこし大きいの、いやこれは堅過ぎるの、種々なことを並べて、到頭强情を言ひ通して了ひました。

『貴樣に帽子を買つて遣ることは懲りた。』と人の好い叔父さんが何日に無い調子で言ひましたが、それほど少年時代の好き嫌ひは大人の心に通じかねる、名のつけやうの無いものかとも思ひます。

斯の手紙を書きつゞける前に、年老いた姉を見舞ふため、雪深い郷里の方まで一寸行つて來ました。姉のことは既に貴方に御話しました。あの若かつた姉が今年は最早五十八歳です。七人あつた姉弟のうち姉は一番の年長者、私はまた一番末の弟にあたります。

十

斯の手紙を書き初めたのは昨年四月のことでした。私も長々と話し續けました。少年の日——私達に取つて二度とは來ない——その時代のことで御話すべきことは、まだ〳〵澤山あるやうに思ひます。書生を愛した豐田さんの家には幾人となく身を寄せた同郷の青年があつて、その一人々々の言つたこと爲したことが幼い

私の上に働きかけたことや、あるひは豐田さんの家は一頃それらの人達の一小倶樂部を見る趣を成して夜になると私も土藏の中の部屋に机を並べ、同じ洋燈の下に集り、話を聞き、一緒に勉强し、どうかすると制へきれないほどの居眠りが出て年長の人達からよく惡戯されたことなど、御話したいと思ふことはいろ〳〵ある。私は自分の机の上――墨汁やインキで汚れたり小刀で刳り削られたりした机の上の景色、そこに取出す繪、書籍、雜誌などのことを精しく御話して見たら、それだけでも自分の少年時代を引出すに十分だらうとは思ひます。私は貴女に年老いた漢學者のことを御話しましたらう。豐田さんの家の奥二階でしばらく暮したあの老夫婦のこと、私が英學を始めた時分のこと、それから私の十三の年に父は鄕里の方で死にましたこと、その前に父から私に寄した手紙の中には古い歌などを引合に出して寸時も忘れることの出來ないといふやうな濃情の溢れた言葉が

書き連ねてあつたこと、それからそれへと幼い日のことを辿つて見ると書くべきことは多くありますが、こゝで筆を止めます。

私は母やお牧に抱かれた頃から始めて、婦人の手を離れるとは言へないまでも、すくなくも獨立の出來る頃まで斯の手紙を持つて行きたいと思ひました。婦人に對する少年らしい一種の無關心――左樣いふ時が一度私には來ました。私は側目もふらずに、錯々と自分の道を歩き始めた時がありました。そこまで御話しなければ、斯の手紙を書き始めた最初の目的は達したとも言へません。しかし今はそれをする時がありません。

私は遠い旅を思ひ立つて、長く住み慣れた家を離れやうとして居ます。私が御地を去つて東京へ引移らうとした時、貴女のお母さんの家へ小さな記念の桐苗を殘して來たことが丁度胸に浮びます。貴女の御存じない子供は三人も斯の家で生

れ、貴女の友達であつた妻もこゝで亡くなりました。今夜は斯の家で送る最終の晩です。旅の荷物やら引越の仕度やらゴチャ〳〵した中で、子供は皆な寢沈まりました。

（終）

大正二年四月十四日印刷
大正二年四月十八日發行

著作者　島崎春樹
發行者　東京市麹町區飯田町三丁目二十五番地　佐藤義亮
發行所　東京市麹町區飯田町三丁目二十五番地　新潮社　電話（番町）二、二三三番　振替（東京）一、七四二番

印刷者　中村政雄　東京市麹町區有樂町二丁目一番地
印刷所　報文社　東京市麹町區有樂町二丁目一番地

定價金七拾五錢
（小包料市内金四錢・市外金八錢）

■ 綠蔭叢書 ■

一編 小說 破戒
全一冊 定價八拾錢 郵稅八錢

二編 小說 春
全一冊 定價九拾錢 郵稅八錢

三編 小說 家
全二冊 定價七拾五錢 郵稅八錢

島崎藤村著

『綠蔭叢書』は、今回小社に於いて出版發賣することゝなり、『春』『家』共に增刷し、久しく品切となりし『破戒』も亦新たに製版印刷を了へ各卷取揃へ、高需に應ずべきにつき、續々御申込みありたし。

新潮社藏版

—近刊豫告—

後の新片町より

島崎藤村著

柳橋七年の僑居、不斷の勞作の傍らに、折々の感想を書きとめたもの。今、海を踏んで遠く遊ばんとするに當り、置土產として公にされるのが、卽ちこの此一卷である。